

教育実践研究論文助成
課題研究助成

実践報告集

—— 令和6年度 ——



立山連峰

— 夢ひろがる富山の子どもたちのために —

公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部

はじめに

「書いてまとめる」ことが自分の考えをまとめることになり、それが子供たちへの指導につながっていくと感じました。」この言葉は、教育振興助成贈呈式での受賞された先生方の感想でした。

課題研究報告を提出された若手教職員たちの「…手立てを考えていきたい」「…実践を通じて学んでいきたい」「…効果を高めていきたい」等の言葉から、子供たち一人一人を見つめ育てたいという熱き想いを感じました。

教育実践研究論文や教育助成の報告では、富山県教育委員会が重点としてきている「子供の可能性を引き出し、才能や個性を伸ばす教育の推進」に沿った、手間暇をかけ、ぬくもりのある継続した取組みの実践が報告されています。

どの学校でも活用できる論文であり、教職員に参考となる報告でありますので各学校では是非生かしていただき、これまで以上に活力ある教育活動を展開していただければ幸いです。

今後もより実践的な指導力を高め、本県教育の発展と学校（園）の教育目標の実現に向けた日々の教育活動に生かしていってもらうことを心から願い、各事業に取り組んでまいりたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

令和7年3月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部
支部長 青木正邦



刊 行 の 言 葉

令和2年度より教育振興事業選考委員会委員長を拝命しております神川と申します。本日の「教育振興助成」贈呈式にあたり、ご挨拶と励ましの言葉を述べさせていただきます。

日本教育公務員弘済会は昭和27年に創設されて以来、72年間、昭和、平成、令和と社会環境が著しく変化してきた中、いつの時代でも、「明日や未来を担う子ども達のために」という理念を掲げ、今日まで、教育に携わる全ての方々を支えてこられました。弘済会事業のおかげで、富山県教育の今日があることに改めて気づき、「人生100年時代において、長年教育に関わる私たちが学びや経験を活かし、現在・未来の子ども達のために、できる事を考え続け、確かなバトンを渡し続けて行きたい」という気持ちになりました。

今回の「教育実践研究論文助成」では学校部門に27件、個人部門に8件の合計35件の応募があり、最優秀賞1件、優秀賞2件、優良賞3件、個人奨励賞1件を選考致しました。

最優秀賞の水見市立北部中学校では「多様性を認め合い、安心して自己表現できる校風の醸成」を研究主題に、子どもたちが他者との違いを認め合い、一人一人の人権を大切にすること、性の多様性やジェンダーについて考えること、安心して自己表現できる校風の醸成に取り組むことで、互いを尊重し、堂々と自己表現できる生徒が増えて、互いを認め合える学校の雰囲気につながったとしています。

優秀賞に選考された藤ノ木中学校の五十嵐沙紀養護教諭の取組は「自他の心に寄り添い、自分も相手も大切にできる関わり方を構築する子どもの育成」を研修主題として、アサーショントレーニングや自他へのメッセージカードなどの教材を提示し、工夫した学習活動の実践を通して、自他のよさ・違いを認め合い、互いを大切にすることで、生徒の学びが深まり、人権意識が高まったとしています。

また、同じく優秀賞に選考された桃李小学校の岩山教諭の取組は、研究主題を「『研修が楽しいです』チーム桃李小で創るこれからの研修」として、赴任した学校で研究主任を任されたことをきっかけに、これまでやらされ感のあった研修から一人一人の教師自らが研修を進める「個別最適な研修」に取り組み、課題解決を目指しながら、ポートフォリオとして研究履歴を残すことで教員としての自己実現を目指し、研究の満足感に繋がったとしています。

さらに、優良賞や個人奨励賞を受賞された研究のどれもが、研究の背景に、教員としての誇りを持ち、真に子どもを愛し、地域を愛し、学校現場が中心となってこれまで以上に楽しく、生徒も教員も安心して学び合い、信頼される場所となるようにという熱い願いが感じられました。

選考委員の皆様からも、どの研究論文にも学校教育の今日的な課題に迫るものが多く、学校運営や授業研究に挑戦的に取り組む姿勢が伺え、児童・生徒・教員の変容の姿が目に入り、他校にも参考になる論文が多く、私どもも、多くの刺激を受け、力を頂いたという共通の声を頂きました。私自身も、校長先生、教職員の皆様、そして児童・生徒の皆さんが多様な課題に、怯むことなく積極的に、そして学校全体が協働する喜びを実感しながら、創造的な姿勢で取り組まれていることに、富山県教育の未来に希望と明るさを感じました。

今後も弘済会の教育振興助成は、変化の著しい社会環境の中で押し寄せる様々な教育課題に果敢に立ち向かい課題解決を目指す学校や団体、グループや個人を応援し続けて頂きたいと思っております。そして本県の教育に携わる全ての皆様には今後とも教育の振興、発展、質の向上のために、お力を発揮して下さいを心より期待しております。今後は県内外や世界の子子ども達が、変化が激しく、リスクの予測しにくい人生100年時代を、夢を持ち続けて生き抜く力を育成するために貢献して下さいを願ひまして、発刊の言葉にさせていただきます。

令和7年3月

富山大学名誉教授
教育振興事業選考委員会委員長

神 川 康 子

教育振興助成の主旨

公益財団法人日本教育公務員弘済会富山支部

弘済会の教育振興事業は、子供たちの健やかな成長を願い、研究・研修を实践されておられる、教育関係者及び団体等を支援する事業です。

ここに、本県教育の充実発展に寄与するため、次の助成を行います。

1 教育実践研究論文教育賞

経営改善・工夫を研究テーマに掲げて取り組む学校や学年・教科等の部会に対し助成を行い、さらに優秀な報告（論文）に対して賞金を贈呈します。

- ・最優秀賞(1件)、優秀賞(2件)、優良賞(3件)、個人奨励賞(1件)

2 課題研究教育賞

学校経営の一翼を担い、今日的な課題を掲げて研究実践に取り組む30歳以下(31歳以上の新規採用教職員は3年次まで)の教職員からの申請(488件)に対し助成を行い、さらに昨年度の報告(654件)のうち優秀な報告(研究)に対して、賞金を贈呈します。

- ・優秀賞（20件）
- ・優良賞（10件）

3 教育団体研究助成

本県教育の一層の振興を図るため、幼・小・中・高校（園）長会をはじめ、教頭会、教育研究会などの団体に対して、助成を行います。

- ・教育団体研究助成(13件)

目 次

はじめに 支部長 青木正邦

刊行の言葉 富山大学名誉教授 神川康子
教育振興事業選考委員会委員長

教育振興奨励助成の主旨

◇ 教育実践研究教育賞受賞論文

● 『最優秀賞』 1編

- ・多様性を認め合い、安心して自己表現できる校風の醸成
氷見市立北部中学校 校長 櫻打佳浩 …………… 1

● 『優秀賞』 2編

- ・「研修が楽しいです」チーム桃李小で創るこれからの校内研修
下新川郡入善町立桃李小学校 教諭 岩山直樹 …………… 5
- ・多様性を認め合い、人権意識を高める生徒への支援のあり方
富山市立藤ノ木中学校 養護教諭 五十嵐沙紀 …………… 9

● 『優良賞』 3編

- ・持続可能な学校運営と教師の資質向上の両立を目指して
射水市立中太閤山小学校 校長 堀 かおり …………… 13
- ・ふるさとを愛し、たくましく未来を切り拓く児童の育成
射水市立放生津小学校 校長 赤尾秀康 …………… 17
- ・先生方の「忙しい」をあきらめない
富山市立藤ノ木中学校 教頭 山崎陽江 …………… 21

● 『個人奨励賞』 1編

- ・地球規模の問題を多角的に捉え主体的に考えを深める子どもの育成
富山市立堀川小学校 教諭 米原史剛、横道直、森田みはる …… 25

* 令和6年度教育実践研究論文助成一覧 …………… 29

◇ 課題研究教育賞『優秀賞』

- ・互いに関わり合い、主体的に学びを深めていく子供の育成
滑川市立田中小学校 教諭 山林耕大 …………… 33
- ・自己と他者との対話を通して考えを深め、思いを表現していく子供の育成
富山市立大広田小学校 教諭 太田凧紗 …………… 34
- ・課題解決に向けて、主体的に考え、行動する子供の育成
富山市立藤ノ木小学校 教諭 松倉実希 …………… 35

・ きき合うことを通して、学ぶ楽しさを味わうことのできる授業を目指して 富山市立水橋中部小学校	教諭 小澤 麻 裕	36
・ 図画工作科の学習を通して、造形的な見方や感じ方を深め、豊かに仲間と関わる子供の育成 富山市立堀川小学校	教諭 長谷川 仁 義	37
・ 問題解決を通して、エネルギーの性質に迫ろうとする子供の育成 富山市立堀川小学校	教諭 太 田 聖 久	38
・ 聴き合いを通して自ら課題を見付け、主体的に学ぶ子供の育成 富山市立新保小学校	教諭 小澤 昭 吾	39
・ 子供一人一人が自分に合った学習方法を選択し、考え表現することが楽しいと感じられる学習展開や支援の工夫 富山市立芝園小学校	教諭 窪 田 裕 子	40
・ 子供一人一人が課題意識をもつとともに、子供同士が学び合い、考えを深めることができる授業づくり 富山市立西田地方小学校	教諭 平 宮 可 那	41
・ 主体性を育み、自らの高まりを実感することができる支援の在り方 富山市立中央小学校	教諭 堀 芳 聡	42
・ 主体的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成 富山市立光陽小学校	教諭 木 村 真 樹	43
・ 外国語による言語活動を通して、主体的・対話的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成 射水市立下村小学校	教諭 神 名 寛 朗	44
・ 自己表現力を高め、安心して過ごせる学級集団の育成 高岡市立野村小学校	教諭 石 野 友 希	45
・ 子供が主体的に学び、「できる」「楽しい」を実感する指導の工夫 小矢部市立津沢小学校	教諭 篠 嶋 純 花	46
・ 語彙を豊かにし、表現力を高めるための指導の工夫 富山市立藤ノ木中学校	教諭 高 倉 笙 子	47
・ ICT機器を用いた実験の工夫 富山市立藤ノ木中学校	教諭 柳 健 太	48
・ 全校が意欲的に生徒会活動に取り組む学校を目指して 富山市立八尾中学校	教諭 畑 佐 知 弘	49
・ 生涯を通して、主体的に健康な生活を実践しようとする生徒の育成を目指して 小矢部市立津沢中学校	養護教諭 亀 谷 杏 菜	50
・ 地域とつながる生活単元学習の授業デザイン 富山県立氷見高等学校	教諭 斉 田 大 輝	51
・ 社会参加に必要な力を育てるための支援の在り方 富山県立富山聴覚総合支援学校 高等部	教諭 鍵 主 紘 子	52

◇ 課題研究助成報告「優良賞」	53
-----------------	----

* 令和6年度課題研究助成報告一覧	55
-------------------	----

◇ 教育実践研究教育賞受賞論文

多様性を認め合い、安心して自己表現できる校風の醸成

～人権教育と対話を軸とした学びの実践を通して～

氷見市立北部中学校 校長 櫻 打 佳 浩

1 はじめに

中央教育審議会答申「令和の日本型教育の構築を目指して」(2021.1)では、予測困難な時代に立ち向かう力として、課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論して納得解を生み出すこと等、新学習指導要領で育成を目指している資質・能力の必要性が改めて示された。また、一人一人の多様性と向き合いながら、一つのチームとして学びを高めていく従来の日本型教育がもつ強みを生かすこと等についても明示された。

協働的に議論し納得解を生み出すためには、他者との対話を積極的に行い、考えの違いを受け止め、合意形成を図っていく力が必要である。しかしながら、新型コロナウイルス感染症拡大により、対話の機会が奪われてきたことから、今改めて他者と対話する力、議論する力を培っていくことが必要と考える。また、チームとして学びを高めていくためには、生徒指導提要(2022.12)に加えられた生徒指導の機能「安全・安心な風土の醸成」を推進するなど、一人一人の違いや多様性を認め合い、自信をもって自分の意見を発言できる学級や学校を運営することが重要と考える。

本稿は、多様性を認め合う人権教育と対話を軸とした学びを研究の柱として、安心して自己表現できる校風の醸成に取り組んできた2年間の足跡である。

2 研究の視点

視点1 人権や多様な生き方について考える

近藤・尾崎(2017)¹⁾は、発達心理学の観点から、中学生にあたる青年期前期は対人的意味付けレベルにあり、異なった他者の意見や基準に対して非常に敏感になる時期としている。また、青年期中期では他者が自分をどう思っているかが最大の関心事となり、常に他者の視線を気にして行動してしまうとある。このことから、中学生は自分の本音や考えを周囲に合わせて抑えるため、自己表現を控える傾向があると考えられる。

そこで、人権や多様な生き方について考える活動を通して、他者との違いを認め、一人一人の人権を大切にしていけることで、「人と違っていてもいいん

だ」という感情を育み、生徒の自己開示や自己表現への不安を軽減したいと考えた。

視点2 性の多様性やジェンダーについて考える

性的指向や性自認、表現の性の違い等、性の多様性に関する問題は、今日的な問題であるにも関わらず、多くの学校ではタブー視され、積極的に取り組んでこなかった実態がある。しかしながら、性自認の悩みから学校の制服を受け入れられず、不登校になった生徒や希死念慮に陥った生徒がいることへの対策について、富山県議会(2020年11月予算特別委員会他)においても議論されてきたところである。

そこで、性の多様性やジェンダーも人権として捉えて考えるとともに、ジェンダーレスタイプの制服を導入することで、性自認等、性の多様性で悩む生徒の心をケアしていきたいと考えた。

視点3 対話を軸とした学びを確立する

学習指導要領の改訂により「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が行われてきた。学校では、コロナ禍の新しい生活様式に対応しつつ、マスク着用やICT機器の活用により対話的な学びを実践してきたが、十分な取組が行われてきたとはいえない状況であった。

そこで、安心して自己表現できる学校風土を醸成しながら、今一度、授業等における対話的な活動を意図的に設定し、多様な考えの者が協働的に議論して納得解を生み出す力等を身に付けさせたいと考えた。

3 取組の概要

『幼・小・中学校教育指導の重点』(富山県教育委員会)の人権意識チェック表を職員会で提示して教職員の人権意識を高めるとともに、以下の取組を行った。

視点1 人権や多様な生き方について考える

(1) 人権作文や意見発表大会等の活用

道徳科や国語科等の学習において、いじめや差別、障害者との関係等、人権について考える学習を行うとともに、学校行事等で自分の考えを表現する活動に取り組んだ結果、以下のように、自分の考えを臆することなく発表できる生徒が増えてきた。

・県中学生生活体験発表大会において、障害をもつ

家族のことを隠してきた生徒が、友達の言葉をきっかけに家族のことを隠さず話せるようになったことや、障害を含めた一人一人の違いを尊重することの大切さについて訴えた。

・「氷見第九合唱団」に参加している生徒が、県中文祭意見発表において、自分にとっての歌は先生であり、大切なパートナーでもあること等について、第九のソプラノの歌唱も交えて堂々と発表した。



(2) 社会を明るくする運動への参加

2学年の生徒が氷見保護司会主催の「社会を明るくする運動『公開ケース研究会』」に参加し、犯罪事案の背景等を考えながら、どうすれば犯罪を減らしていくことができるかなどについて考える学習を行った。

先輩に誘われ、ひったくりを犯してしまった少年の事案を基に「保護観察がよいか、少年院送致がよいか」について、まずは自分で考え、各意見を元にグループでどのような措置がよいかを話し合った。生徒は、罪を犯してもその人の人権を尊重し、犯罪は認めないが、人は認めていくという姿勢が大切であると考えていた。

(3) 多様な生き方について考える講演会の開催

キャリア教育の一環として、多様な生き方を知り、自分の生き方について考える場となるよう、氷見市出身で県外及び海外で活躍されてきた(株)INTECの宮下毅氏の講演会と、地域おこし協力隊として氷見に移住し活動されている吉田サラダ氏の講演会を開催した。

宮下氏は、実社会は正解のない場合が多く、自分で考え、自分の意思で判断し行動することが必要であること等について講演された。生徒は、これまでの自分の考え方の甘さを振り返り、今後の行動や生き方について深く考えていた。

〈生徒の感想〉

社会に出てから「何とかなるだろう」という考えでは、何もできないことが分かった。

何事にも大きな夢をもって挑戦することが大事だということも。できないことを一つずつでもやってみることが今の私には必要だと感じた。

吉田サラダ氏は、「笑いで地域おこし！～氷見の魅力を発信～」という演題で講演され、常識



から非常識にずらすことで笑いが生まれることや、視点をずらすことで新しい魅力がみえてくること等について、ユーモアを交えて話をされた。

生徒は、視点をずらして地元の魅力を見付けること、考え方をずらして毎日の生活を楽しくすること等、講演会の学びから多くのことを考えていた。

〈生徒の感想〉

普段当たり前だと思っていることでも、視点をずらすことで、新しい発見や魅力が再確認できると思った。これから「ずらし」を活用するために、まず学校生活で常識を身に付け、楽しむ努力をして、新しい発見をしていきたい。

視点2 性の多様性やジェンダーについて考える

(1) 性の多様性について考える場の設定

性(ジェンダー)を乗り越え(トランス)てきた



西原さつきさんを講師に「自分らしく生きていく」という演題で、LGBTQ等の性の多様性について学ぶ講演会を校区小学校や保護者にも聴講を

呼びかけて開催した。

性的指向(LGB)と性自認(T)の違いや、表現の性にも違いがあること等を学び、一人一人が多様な社会の一員であることや、自分らしく生きていくことの大切さについて真剣に考える機会となった。また、性の多様性を含め、自分とは違う他者を排除するのではなく、違いを認め合い、共に生きていく姿勢が大切だと考える生徒が多くみられた。

〈生徒の感想〉

・LGBTQの人が思っているより多くて驚いた。その人たちを認め、尊重することが大切だと思った。性の多様性も含めて、その人の個性として、人の多様な生き方につなげていくことが大切だと思った。

・私は性別や年齢等、見た目だけでできることが少なくなる「不平等」がとても嫌いだ。自分のことを隠さず話された西原さんはとても素敵だと思った。

・LGBTQだけでなく、全ての人が自分らしい生き方をするためには、悩んでいる人を受け止める人が必要だと思った。

(2) PTAと連携したアンケートの実施

SDGs(持続可能な開発目標)にも掲げられているジェンダー平等について、生徒や保護者が感じていることを明らかにしたいと考え、PTAが発行する広報紙の特集として、「ジェンダーに関するアンケート」を実施し、生徒と保護者の意見を集約し考

察した。

「『男だから、女だから、〇〇しなさい』と言われたことがあるか」の問いでは、保護者の世代では、約半数が「～らしく」と言われて育ってきているが、生徒ではその割合が減っていることから、ジェンダー平等の考えが広がってきていると思われる。

一方で、「男女平等になっていると思うか」の問いに対しては、生徒は学校や家庭において男女平等と感じている割合が高いが、保護者は職場や家庭において男性が優遇されているとの回答が多くみられ(図1)、ジェンダー平等とはいえない状況であることが伺える。

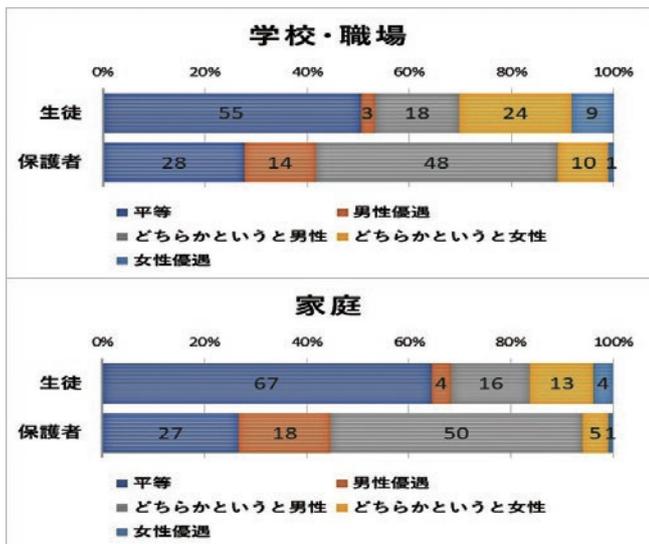


図1 男女平等になっていると思うか

「ジェンダーによる差別をなくすためには、どんなことが必要だと思うか」の問いに対して、生徒では「偏見をもたないこと、押しつけないこと」「見ただけで判断しないこと」「制服を例にすると、一択ではなく選択肢を増やすこと」等の意見があり、保護者では「ジェンダーに対する教育が大切」「男女問わず協力し合うこと」「相手を否定せず、お互いの違いを認め、理解し合うこと」等の意見があった。

本アンケートの実施により、家庭においてジェンダー平等について話し合うきっかけにつながった。

(3) ジェンダーレスタイプの制服の導入

今後入学してくる生徒の中に性自認等の悩みをもっている生徒が存在すると想定し、学校の制服に対する違和感や悩みを取り除きたいと考え、ジェンダーレスタイプの制服導入に取り組んだ。(表1)

既存の学生服やセーラー服から全てジェンダーレスのブレザー型に移行するのではなく、第3の選択肢としてブレザー型を導入することとした。

令和5年度入学式では、新入生女子生徒の約8割、男子生徒の約半数がブレザー型の制服を着用してい

た。また、ブレザー型でスラックスを選択し、入学式に参加した女子生徒も多数みられた。

1学期末に実施したアンケート「第3の制服導入はよかったと思うか」については、1年生の87%が肯定的な回答を示していた(図2)。また、2、3年生を含めた全校生徒においても約70%の生徒が肯定的な回答であった。

表1 : ブレザー型制服の導入手順	年月
①先進校(坂祝中学校等)の情報収集	R4年4月
②市教委、市中学校長会に説明	
③教職員、生徒会役員へ説明	R4年5月
④北部中学校PTA役員へ説明	
⑤業者との協議(サンプル、値段等)	
⑥LGBTQ講演会の開催	R4年7月
⑦校区小学校保護者へ案内	
⑧制服検討委員会設置	R4年8月
⑨制服業者選考会 業者決定	
⑩制服デザイン検討、制服決定	R4年9月
⑪PTA広報委員会アンケート「ジェンダー」	R4年10月
⑫校区小売店への説明(業者)	
⑬入学説明会における保護者への説明	R4年12月
○ブレザー型制服混在の入学式	R5年4月



ブレザー型の制服

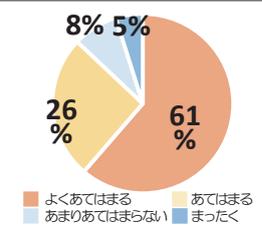


図2 第3の制服導入はよかったと思うか(1年)

視点3 対話を軸とした学びを確立する

(1) 授業における実践

社会科における開国の是非を考える学習や、理科における実験結果を予想する活動等、全教科において対話の場を意図的に設定し、主体的・対話的で深い学びの視点から授業を実践した。自分の考えの発表で終わるのではなく、考えの理由や根拠を明確にして話し合いを行い、グループで合意形成を図ったり、自分の考えを再構築したりする活動となるよう工夫した。

〈実践例①: 3年国語科「合意形成に向けた話し合い」〉

課題に対する合意形成を図るために、グループのメンバー全員が参加し、目的や条件に照らして話し合い活動を行うことをねらいとした実践を行った。

モデルとなるグループの話し合いを提示することで、よい話し合いに向けて見通しをもたせるとともに、



話し合いを促進するための話型のカードを用いて、様々な視点からの意見が出やすくなる工夫を行っ

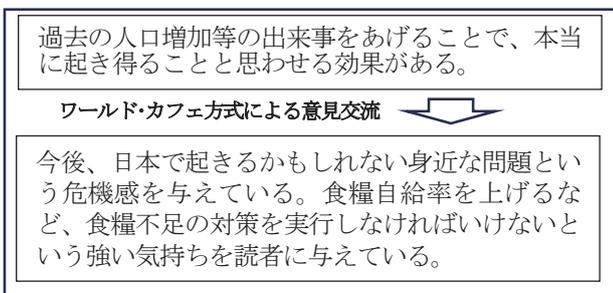
た。また、観察グループを設定して、互いの話合いを評価することとした。評価の場面では、合意形成を目指した活発な話合い活動を目指して、個々の意見のよさやグループの課題を的確に指摘し合う姿が見られた。一方、グループ全員の意見を尊重するあまり、全ての意見を取り入れてしまうグループがあり、合意形成を図っていくことの難しさも感じ取っていた。

〈実践例②〉：2年国語科「モアイは語る」

筆者の論理の展開について考える学習において、自分で考えた内容をグループ内で共有し、さらにワールド・カフェ方式による意見交流を通して、自分の考えを再構築する活動を行った。

意見交流を経て考えを再構築することで、分かったつもりになっている生徒が、もう一度深く考え直すことができた。

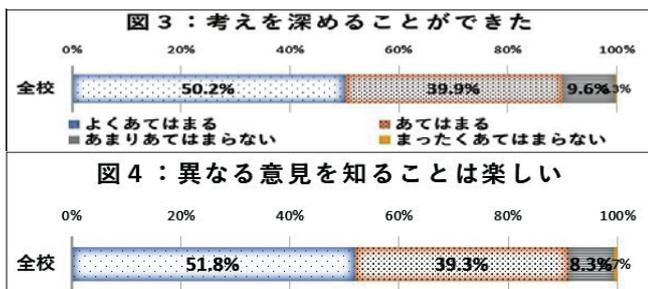
「モアイは語る」論説の効果における考えの再構築



自分の考えをもって意見交流に参加することで、主体的に話し合うことができるとともに、他の意見を聞くことで自分の意見が言語化されるなど、主体的・対話的で深い学びにつなげることができた。

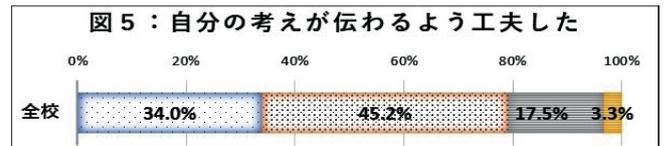
(2) 学校評価による検証

各教科の授業や生徒会活動を通して、対話を軸とした学びを実践してきたことにより、令和5年度2学期末に実施したアンケートでは、「対話する活動を通じて自分の考えを深めることができた」や「自分の考えと異なる意見を知ることは楽しい」において、全校生徒の約90%が肯定的な回答を示した。(図3、4)



一方で、「自分の考えが伝わるように工夫した」では、肯定的回答が約80%に止まり、考えを伝えられていないと感じている生徒が約2割いたことが分

かった(図5)。単に話合いを楽しむだけでなく、自分の考えを確実に伝え、意見交換の中で考えを再構築したり、合意形成を図ったりする協働的な学びとなる工夫が必要と考える。



4 成果と課題

(1) 成果

- ・性の多様性を含む一人一人の個性や違いについて考える活動を実践したことにより、自分とは違う他者を排除するのではなく、違いを認め、互いを尊重していくことが大切だと考えて行動する姿が多く見られるようになった。
- ・「人権や多様な生き方について考える場」「考えの深まりを実感できる対話的な学びの場」を継続してきたことにより、自分の考えを意見発表会や各学習活動において自信をもって発表するなど、堂々と自己表現できる生徒が増えてきた。

(2) 課題

- ・安心して自己表現するためには、表現の土台としての環境づくりが重要である²⁾。学年や学級において共感的な人間関係を育むなど、生徒指導の機能を生かした取組の継続が重要である。また、学びを深める対話的な学習の在り方について、さらに研修を推進していく必要がある。

5 おわりに

例年の1年生では夏期休業明け等に登校渋りがみられるが、今年度は、その時期の登校渋りがみられなかった。また、小学校の時にほとんど登校できなかった生徒が、登校して授業を受けている。このことの明確な根拠はないが、選択制の制服導入等により、違いがあっても当たり前という学校の雰囲気があることも、要因の一つではないかと考えている。

本校には、能登半島地震によって自宅が被害に遭い、転居を余儀なくされるなど、心に傷を受けた生徒が少なからずいる。そのような生徒の心に寄り添いながら、今後も一人一人の違いを排除することなく、認め合う関係を大切にすることで、生徒が安心して自己表現できる学校づくりに努めていきたい。

〈参考文献〉

- 1) 近藤清美・尾崎康子(2017) 社会・情動発達とその支援 ミネルヴァ書房
- 2) 深澤暢子(2022) 「安心して自己表現できる学級を目指した実践の在り方」 山梨大学教職大学院 教育実践研究

「研修が楽しいです」チーム桃李小で創るこれからの校内研修

～自分らしい教員人生を歩み続けるために～

下新川郡入善町立桃李小学校 教諭 岩山直樹

1 はじめに

本校は、全校児童161名、1～6年生通常の学級、特別支援級全て単級の小学校である。管理職を除き、教員の年齢層は、20代が4名、30代が3名、40代が2名、50代1名、60代が2名となっており、若手教員が大半を占めている。そのため、「子供とは（子供観）」「授業とは（授業観）」と、先輩が後輩に様々な助言をする姿がよく見られるなど、互いによりよい授業を目指して切磋琢磨している。職員室にはいつも笑いと前向きな言葉が溢れ、良好な職場環境である。

このような本校に本年度異動し、研究主任を務めることになった。教員が授業の在り方をよりよく変えていくことができるために、研究主任として教員のニーズに合った研修をすべきであると考え、校内研修の在り方について、全教員と課題意識を共有する場を設けることから年度の研修を始めることとした。

2 研究主題

校内研修の在り方についての研修会（第1回校内研修会）で出された課題は、次の5点である。

- ① やらされ感のある研究主題と仮説であること
- ② 教師と子供の成長を感じられないこと
- ③ 対話的・協働的に学ぶ環境が整っていないこと
- ④ 経験年数の差や異動により持続性がないこと
- ⑤ 負担に感じる研修記録・紀要があること

この5点に共通してみられるのは、校内研修を核にして、教員それぞれの自己実現のために自ら学ぼうとする意欲である。この意欲は、自分らしい教員人生を歩もうとする意欲であり、2年目からベテランまで幅広いキャリアの教員がいる分、その方向性は千差万別である。そのため、各教員が、それぞれのキャリアステージにあった研修を進めていくことが、本校の教員に適した研修と言える。

現在、「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現が求められている。先の5つの課題と自己実現に向けて自ら子供観と授業観を更新し続ける教師像を踏まえると、校内研修の在り方を見直し、本校の教員にとって最適な校内研修を創り上げる必要があると考えた。

そこで、研究主題を上記のように設定し、当事者意識を高めた教員が、「やってよかった」「学びが子供に返った」という自己実現に向けた「研修の楽しさ」を感じられる本校の校内研修を創り上げることとした。

3 研究の仮説

一人一人の教師に応じた研修推進体制「個別最適な校内研修」の構築を図るためにも、教員が自己選択・自己決定しながら、出発から達成までを教員自らが研修を進めていく「個別最適な学びの研修」を保障することが大切である。

そこで、対話を通して創り上げた研修主題の解明に向け、教員各自が課題設定、研修計画の立案をし、研修を行う体制を整える。その際、先の5つの課題に対して、下記のような仮説を設定して解決に取り組み、研究主題の解明を図る。（仮説番号は前述の課題を意味する）

仮説①：校内研修主題や研修内容等については納得がいくまで対話を重ね、研修主題解明に向けた個人テーマ等を設定できるようにする。

仮説②：子供の成長を感じる授業研究の改善を図ったり、各教員のニーズや課題、強みを共有するための研修便りを発行したりする。

仮説③：部会相互の連携や協議会の改善を図り、人・時・場所を選ばない学び方を推奨する。

仮説④：現職研修・若手研修を実施するとともに、他校へ研修会の様子を発信する。

仮説⑤：研修履歴となるポートフォリオを作成する。

4 研究の実際

4.1. i 仮説①-校内研修主題や研修内容等について-

本校では、昨年度まで「わかった・できた・がんばってよかった」を実感できる授業を目指して研修を重ねてきた。そこでは、児童の実態を踏まえた教師の単元構想や支援により、児童が興味・関心を高めながら「分かる・できる」学習をすることができた。しかし、この学習には、児童が自ら考え、判断し、行動する場面が少ないこと、児童が同質化され

てしまうこと、そして、教師の「教える教育」が前提とされていることが課題とされた。

そこで、第2回の校内研修会では、この課題と新たな校内研修の在り方も踏まえ、本年度の校内研修主題について話し合った。ここでは、時代の要請を基に、「児童を学習の主体者として再認識し、学習の主体者としての児童の中に、学習への意欲が本来備わっている」という子供観を前提にした学習展開の在り方はどうあればよいか吟味した。そして、児童一人一人が自己選択・自己決定しながら、出発から達成までの学習を児童自身が進めていく「個別最適な学び」を保障することを共通理解した。その結果、教員全員が今以上に児童の個人差に着目すべきであるという考えが共有された。このようにして、校内研修主題「自ら進んで学び続ける子供の育成～児童の個人差に着目した指導と学習の在り方を探る～」を設定した。

4.1. ii 仮説①-個人テーマ等の設定について-

教員の悩みの一つに、各自のテーマ・仮説設定が挙げられていた。そこで、対話または研修便り（3.3参照）を通じて、各自がそれらを構想できる環境を整備した。本年度は、1学期を、個人テーマを模索する期間とし、夏季休業期間を経た2学期当初にテーマ決定とした。ここでは、「こんな子供だから」を前提にした「子供に具現化するテーマ・仮説設定」の共通理解を図り、自分が心の底からやってみたいことを見付けられる時間を十分に確保できるようにした。その際、大切にしたいのが、「自分が分からないことを分かることができるようにする」である。算数科において単元内自由進度学習に取り組もうとしたり、社会科において複線型の学習に挑戦したりするなど、教員は、研修会や放課後の職員室等で、気軽に話し合いながら各自のテーマ・仮説を明確にしていった。

このように、子供も教師も個別最適な学びを行える環境を整えることで、仮説①の解明に取り組んだ。

4.2. i 仮説②-授業研究の改善について-

昨年度は、全体授業研究は行っていない。（学校訪問研修を除く）そのため、一人一人の研修や授業研究に対する意識に差が生まれていた。そこで、先述の個人テーマの下、本年度は一人1公開授業とした。（学校訪問研修除く。富山県小学校教育研究会授業者は公開授業を兼ねる）なお、研修組織は、本校の規模や教員の実態、子供の発達段階を踏まえた学団（低・中・高学年部会）で連携を図ることを基本とし、公開授業においては、学団各1名は全体研

修会と位置付け、校内研修主題について全員で研修を深める場とした。

また、公開する教科等は、個人テーマが異なるため、縛りは設けていない。授業における教師の手立てについても、教員一人一人が子供の個人差に着目した指導と学習の在り方を模索するため、同様である。ただし、以下のことは共通理解を図り、研修に取り組むこととした。

- ・指導案の書式：A4一枚で作成する。
- ・補助資料：本時までの流れを別紙で作成する。
- ・部会での事前研、事後研の場を設定する。
- ・部会での取り組みについて他部会と情報共有する場を設定する。（全体研修会にて実施）

このような授業研究体制の構図を図ったところ、多くの教員は、学習内容・学習方法を共通化した、方法としての一斉型授業ではなく、「学力」「学習時間」「学習スタイル」「興味・関心」といった違いに着目して個人差を捉え、学習内容・学習方法を子供に返す授業を公開した。

以下が、本年度実施した公開授業一覧である。（紙幅の都合上、単元名・個人研究テーマ本文等は省略）

月	授業者(学年)	教科等	個人研究テーマ
10	6年	社会科	問題発見・解決能力
	1年	特別活動	自己選択・自己決定
	4年	算数科	問題発見・解決能力
	特別支援級		自立活動
	5年	外国語	問題発見・解決能力
11	特別支援級	国語科	学習意欲
	通級指導	算数科	学習意欲
	5年(全体研)	理科	問題発見・解決能力
	2年(全体研)	算数科	個人差
	3年(全体研)	社会科	自己調整

4.2. ii 仮説②-研修便りの発行について-

校内研修に取り組む際、経験や課題意識の違いによって、研修に対する意識の差が生まれてしまう。その差を少しでも埋めることが、校内研修をより活性化させることにつながる。そこで、本年度は研究主任が中心となり、研修主題や、教員の課題意識に沿った研修便りを発行した。（週1回程度発行、全33号）ここで大切にしたいのが、研修を軸とした関係づくりである。例えば、授業づくりそのものについて課題をもつ若手教員には、授業づくりのいろはを、個別最適な学びについて課題をもつ中堅教員には、書籍の情報提供を、GIGAスクール構想に課題をもつベテラン教員には、その具体的な授業例を、便りを通して伝えた。他にも、それぞれの教員のよさや、公開授業で見られた教員の強みや課題を、それぞれ

の教員の経験や課題意識に応じるよう便りを通して伝え、全員で共有することとした。なお、この研修便りは、同地教委内の近隣小学校にも配布をした。

このように、子供による学習の自己決定を前提とした授業に取り組めるような体制や教員一人一人の成長や良さを共有する環境を整えることで、教師と子供の成長、つまり授業観と子供観の転換に関わる仮説②の解明に取り組んだ。

4.3仮説③-対話の時間を大切にしたり取り組み-

本校の職員室にはいつも笑いと前向きな言葉が溢れている。これは、よりよい授業を目指そうと、同一な立場で互いを信頼し合う関係性が構築されているからである。そこで、この職場環境を維持しながら、個人が無理なく自分裁量で、人・時・場所を選ばずに研究や研修内容を話し合える環境を推奨した。その際、上記に記した研修便りが、教員や子供の成長につながる話題づくりのきっかけになるようにした。

また、研究授業の事後研修協議会を、授業者の力量を評価する会ではなく、子供の学びの事実を、じっくり時間をかけて全員で共有し、全員が1つの授業から学ぶ会にした。これは、KJ法を取り入れた昨年度の会において、子供の学びの事実の共有や授業者と全員の学びの質に課題が見られたからである。ここでは、①授業者が想定と子供の見とりを話す②共有された子供の学びの事実を基に、ねらいを達成するために有効な授業デザインや手立ての工夫について協議する③授業者の振り返り④参観者の振り返りの流れで協議会を行った。(協調学習デザインハンドブック第3版、教育環境デザイン研究所参考)

さらに、学団部会での学びの記録を共有する「シェアタイム」を学期に1回設けた。ここでは、日頃の授業実践や悩みも相談できるようにすることで、各部会の様子を気軽に共有できるようにした。教員は、3部会での情報共有を関連付けることで、子供の発達段階や活動特性もカリキュラムづくりや単元構想に重要な視点であると捉えることができた。

このように、同じ目的のために、教員一人一人の個性が生かされ、相互作用を及ぼすような環境を整えることで、仮説③の解明に取り組んだ。

4.4仮説④-現職研修の取り組み-

我々教員は、自分の価値観やこれまでの経験を根拠として、目の前にいる今の子供たちを観てしまう傾向にある。この狭い視野の中で子供を教師という自分に付き合わせる教育にならないようにするためにも、教育基本法第9条で修養という自己改善が求

められている。そこで、多様な価値観に出合い、自分磨きを行う場として、現職・若手研「ボ



トムアップ研修会」を実施した。研修内容は、全員に取ったアンケートを基に、教員が抱える課題や興味関心の高いものとし、講師は本校の教員が務め、時間は30分程度(勤務時間内)とした。以下、本年度実施した現職研修一覧である。

月	内容	講師
9	子供と創る学び	研究主任
10	子供が熱中する宿題	3年生担任
1	個別指導	通級指導講師
1	ICTの有効活用	外国語専科担当
2	保護者対応	教務主任
2	学級づくり	校長

このように、本校に在籍する教員の魅力を最大限活用するとともに、本校でしか実現できない学びの環境を整えることで、仮説④の解明に取り組んだ。

4.5仮説⑤-ポートフォリオの作成の取り組み-

本年度は、研究紀要を廃止し、「授業実践ポートフォリオ」を作成した。その際、以下のような説明を行った。

ポートフォリオ (ア) 作成を通して、自分自身を省みてよい点や改善点、新たな目標を見付ける力を育むことができる。(イ) データをクラウド保存することで、作成や更新の手間が少なく、教員間での情報共有、そして、相互評価が可能となる。いつでもどこでも学校が変わっても閲覧することができるため、成果や課題を日々の授業実践等に効率よく役立てることができる。

教員としての資質向上 (ア) 教師には、子供たちに資質・能力を育むための単元をつくったり、デザインしたりする力が求められる。(イ) ポートフォリオでは、授業実践を単元のまとめとして記録するため、「単元をつくる」「単元をデザインする」力を育むことができる。この力は、「富山県公立学校の教員等の資質向上のための指標(令和5年10月 富山県教育委員会)」の学習指導：授業の設計・展開に関わる資質能力と一致する。(ウ) 単元をつくったり、デザインしたりする力を身に付けていくためには、1時間の記録で終わる紀要ではなく、自分なりの記録方法による学びの過程やプロセスの記録が重

要となる。

作成に関して、初めは悩む教員が多かった。しかし、作成例を基に各自が対話を重ね、次の自分に生きる記録を完成することができた。

このように、ポートフォリオを作成する意義、そして、ポートフォリオが教員としての自己実現にどのように関連してくるのかを研修便りで説明し、紀要との違いを明確にして取り組むことができるようにすることで、仮説⑤の解明に取り組んだ。

5 研究の結果と考察

本年年度の校内研修をまとめるにあたり、前述の5つの取り組みについて、アンケートをとった。(6段階評価:悪い1～6よい、回答数14)

仮説①についての評価	平均
校内研修主題に基づき、個人に委ねた研修体制はどうでしたか。	5.4
仮説②についての評価	平均
授業改善による教師と子供の成長へは見られましたか。	5.1
仮説②についての評価	平均
研修便りはどうでしたか。	5.6
仮説③についての評価	平均
互見や対話の時間を大切にしたい学び方はどうでしたか。	5.2
仮説④についての評価	平均
現職・若手研修会はどうでしたか。	5.6
仮説⑤についての評価	平均
授業実践ポートフォリオはどうでしたか。	5.1

自由記述*一部抜粋

- ・個人に委ねることで、与えられる受け身の研修ではなくなったのが、何よりよかった。自分自身の課題を強く意識し、自ら課題解決に向けて動くことで「やらされ感」は、ずいぶん軽減されたように思う。
- ・授業者の負担が少なかったが、指導案を読んでも授業の流れや授業者の意図がつかみにくかった。
- ・研修便りに、自分の授業を分析してもらい、職員室でさらに研修を深めることができうれしかった。
- ・個人差に着目することで、子供の成長を感じられる研修ができた。
- ・子供を見取ることの大切さ、一人一人の思考過程や取り組みへの時間に個人差を実感し、一斉授業の限界と個別最適な学びの重要性をもつことができた。

- ・様々な学級の授業を見せていただくことができ、よかった。今後、自分がその学年になったときの授業の参考にもなった。
- ・日頃から協働している組織のため、話合いがスムーズ、かつ深まりが見られた。
- ・ポートフォリオに自分の歩みを残すことで、自分の学びをいつでも振り返ることができ、周りの教員と手軽に共有できることには大きな意味がある。
- ・校内研修や研究に対するイメージが変わった。
- ・若手の教員が授業の基礎・基本についても学ぶ機会があるとよかった。
- ・次年度もこの研修体制を続けたい。一人一人の研修と学校全体としての研修を調整するとなおよい。

全ての取り組みにおいて5以上の数値が見られるなど、研修に対して良好な結果が得られた。これには、教員の自己選択・自己決定、そして対話を重視した環境が主な要因と考えられる。中でも研修を通して、次の満足感が生まれたことが研修への意欲向上に大きく関与していると考えられる。

- ・自分裁量の時間に他者と対話を重ね、自分の研究が子供の姿へと具現化されることで子供たちの成長を感じて精神的な満足感を得ることができている。
- ・互見授業が増えることで、他の教員にも認められるという社会的な満足感を得ることができている。

この二つは、ウェルビーイング (well-being) を実現するための要素でもあることから、研修が自己実現に向けて有効に機能していたと言える。

一方、若手教員のサポート体制や、校内研修における個別最適な学びと協働的な学びの両立の仕方については、次年度に向けた課題となった。

6 成果と課題

教員が研修を楽しみを感じるためには、「教員の多様な学び方や柔軟に対応できる研修体制」「教員の自己決定・自己選択」「対話によって心理的安全性が高まった環境」「精神的、社会的な満足感を得られる環境」が大切であると分かった。一方、若手教員に対するサポート体制を充実させるとともに、教員それぞれの研究が校内研修主題に有機的に働く組織体制を全員と模索する必要があることが課題として残った。次年度は課題を踏まえ、唯一無二の校内研修をチーム桃李小で創り上げたい。

多様性を認め合い、人権意識を高める生徒への支援のあり方

～自分も相手も大切に作る関わりを育てる実践を通して～

富山市立藤ノ木中学校 養護教諭 五十嵐 沙 紀

1 はじめに

養護教諭として採用された平成26年度からは小学校、令和4年度以降は中学校において、勤務している。

当初は、子供たちが心と体に関する正しい知識をもち、命を大切に作る心を育ててほしいと願い、平成26年度から5年間、「命のかけがえのなさを実感し、心と体の健康づくりを主体的・協働的に実践していく保健教育」のあり方をテーマに研究した。

令和に入り、新型コロナウイルスの感染が拡大し、猛威をふるう中、子供が未曾有の出来事にも対応しながら、進んで心と体の健康づくりに取り組む力を育ててほしいと願い、令和2年は「子供の命と健康を守り育てる『新しい生活様式』を踏まえた保健教育」のあり方について研究した。

コロナ禍の影響が浮かび上がる中で、かねてより表面化していたSNSの急速な普及も相まって、対面での関わりが一層希薄になったこと、自分の気持ちを、自信をもって表現する力が未熟であることに課題を感じた。そこで、令和3年度は小学校、中学校勤務となった4年度には、アサーショントレーニングを取り入れ、「自他尊重の自己表現力を高め、心に寄り添った関わり方を構築する保健教育のあり方」を研究した。

こういった実践研究を行う中で、中学校勤務2年目となり、思春期にいる中学生の発達段階では、多様な生徒同士が相互に受け入れられ、認め合いながら成長できるような支援が必要だと強く感じた。

2 研究主題について

メディアをはじめ、日常生活で多様性という言葉聞く機会が増えた。国連によって採択されたSDGs全体に通ずる「誰一人取り残さない」といった理念のベースには「多様性の尊重」がある。また、学習指導要領における育成すべき資質・能力の一つ「学びに向かう力・人間性等」の内容にも「多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力…優しさや思いやりなど、人間性に関するもの」が含まれる。

しかし、多様性の尊重に関する理解が進む一方で、それを身近なこととして実感を得る機会も多く

ない。そこで、これらの内容を保護者や地域の理解・協力を得ながら全校体制で行っていくことが大切だと考えた。生徒が互いの多様性を認め合い、人権意識を高める心の健康教育・人権教育について、支援のあり方を研究したいと思い、本テーマを設定した。

研究対象の生徒は「とやまゲンキッズ作戦アンケート」（富山県教育委員会）において「自分を信頼してくれる人はいる」、「心を打ち明けられる友達がいる」など、心に関するほとんどの項目で県平均を下回っており、人との関わりに自信がもてず不安定な様子であることが分かる。また、保健室の利用状況は、友人関係に起因した来室も多く、人間関係をうまく築くことができず思い悩む生徒の姿が見られる。

	共通項目	県平均との差
1	相手や場に応じた言葉を考え言葉づかいに気をつけている	△ -1.5%
2	自分を信頼してくれる人はいる	△ -6.1%
3	心を打ち明けられる友達がいる	△ -8.2%
4	少しくらいの失敗は気にしないでいられる	△ -5.0%
5	イライラすることがよくある	△ -3.0%
6	やってみたいことや熱中できること（趣味など）がある	△ -2.9%
7	心配事や悩みなどはだれかに聞いてもらっている	+2.9%
8	家の人は、自分の気持ちを分かってくれている	+4.4%
9	学校生活は楽しい	△ -5.8%
10	SNS(LINEなど)によるトラブルや心配なことはない	+3.0%

このような実態を踏まえ、本研究において「多様性」について、「身近な仲間・周りの人に対して」、「価値観や考え方等の違い」といった視点で捉え、一人一人が自他の心に寄り添い、生涯に渡って自他を大切にしながら生活を送る態度・関わり方を育ててほしいと願い、研究を始めた。

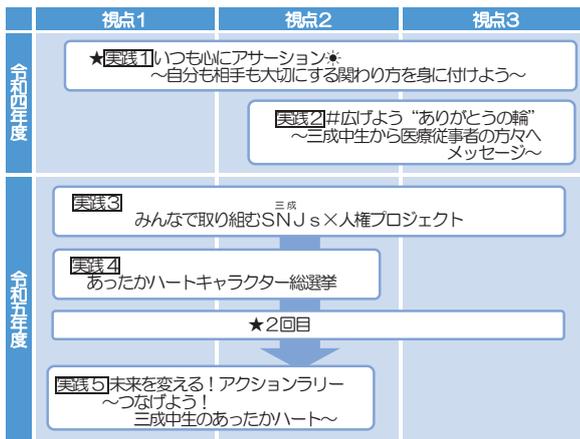
3 研究の視点

実践にあたり、次の3つの視点をもって、支援のあり方、効果と課題を明らかにした。

- 2年間を通して計画的・継続的に指導することによって生徒が身近な仲間や周囲の人に対してよりよい関係を築こうとする意欲をもち続けることができるのではないか。
- 実践場面では、教材の提示や学習活動を工夫することで人と関わることや違う価値観、考え方を知ることに関心・興味をもって取り組むことができるのではないか。
- 学校で取り組んでいる多様性の受け入れ、人権意識の高揚について家庭、地域に発信し連携していくことで生徒への支援を広げていくことができるのではないか。

4 研究計画と実践

令和4、5年度の2年間、学校保健委員会や生徒会保健委員会の取組を通し、継続して研究を進めた。



(実践のタイトルは、前任校の三成中学校に因む。)

6 研究の実際と考察

(1) 実践1 「いつも心にアサーション」～自分も相手も大切にする関わり方を身に付けよう～

○ 時間設定を工夫したトレーニングの実施

学校保健委員会では、2か年計画で自他尊重のコミュニケーションと言われるアサーショントレーニングを取り上げた。初回50分間のトレーニングを基本に朝の時間を活用した15分間のショートトレーニングを数回積み重ねた。生徒は、相手との



学級全体でのデモンストレーション

相違点に折り合いをつけた関わり方を模索しながら、最後まで意欲的に人間関係づくりについて考えた。

昨年度も行ったアサーショントレーニングを一年ぶりにできて楽しかったです。自分自身、前回よりも返事の仕方がうまくなったなど感じました。そして、改めて、伝え方・言葉選びは人間関係において大事だと学びました。"I am OK, you are OK"を頭に置いて過ごしたいです。

○ 意欲を持って継続的に取り組む「成長日記」

ワークシート「アサーション成長日記」は、予め全体の流れが分かる冊子を作成し、見通しをもって進められる形にした。毎時間、それを活用しながらトレーニングを積み重ねることで、生徒は自分の考えや思いを書き残したり、仲間と意見を交流させたりしながら学習の足跡を残した。

○ 生活場面を想定し解決に向かうための課題設定

各回トレーニングの課題は、生徒の実態を踏まえ、具体的な場面を設定した(下記、表参照)。思春期の心情に迫った課題は反響が大きく、生徒は切実感をもって取り組んだ。

思春期に突入している今だからこそこの課題だと思った。こんな場面は「あるある」なので、みんなで考えられてよかった。いつもどう伝えようか戸惑っていたけれど、言いづらいことでも、自分で言わなきゃ伝わらないこともあると思うので言葉で表すことを大事にしたい。

回	課題
1	誘いと断るとき一互いに傷付かない意思表示とはー
2	頼りたいとき一助けを借りたいときもあるー
3	会話の中に入るとき一小さな勇気が大きなきっかけにー
4	SNSで気持ちを伝えるとき一気持ちを正しく伝えるためにー
5	あたたかい言葉をかけるとき①ー「いいねポイント」のススメー
6	あたたかい言葉をかけるとき②ー「自分レター」のススメー

○ 保健委員による関心を引くための導入の工夫

保健委員が、非主張的な「もじもじさん」、攻撃的な「いばりやさん」、アサーティブな「さわやかさん」に扮し「自分も相手も大切にしたい関わり



関わり方について問いかける保健委員

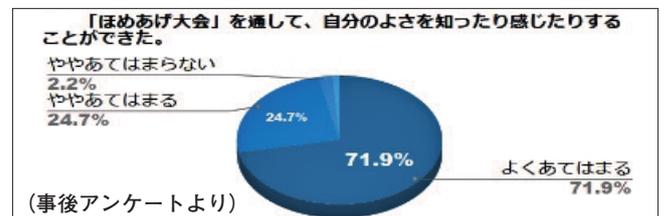
方」について問いかける動画を作成した。全校生徒は、楽しく動画を視聴し、動画に登場する委員の問いかけに答える形で、自らの振る舞いがどうあるべきか考えをまとめた。

○ 自他のよさに着目するための交流活動

アサーショントレーニングに加えて、構成的グループエンカウンター「ほめあげ大会」を行った。意図的に互いのよさ「いいねポイント」を伝え合う場を設けることで、自然と仲間のよいところに目を向け、活発に交流する姿が見られた。仲間との関係に敏感で、周囲と同調的になったり、他者と比較し劣等感を抱いたりして、なかなか自身を認められずにいた生徒も、自分のよさを実感する時間となった。



「いいねポイント」を書いて伝え合う生徒



○ レジリエンスを高めるための振り返り

「困難に直面しても自分自身で解消の糸口を探し、乗り越え回復する力を育みたい」「その力を目に見える形で本人の手元に残したい」と考え、自身に向けた手紙「自分レ

疲れたときの自分へ
今の気分はどう？もし、いやなことがあって「自分にはよいところがない」なんて思っても、自分レターを見て思い出して。わたしは、毎日部活や係の仕事を頑張っているよ。それに、友達との関わりを大切に、勉強も真剣に取り組んでいるよ。頑張りが過ぎて疲れたら、休んでもいいんだよ。一步一步進んでいこう。 13歳の自分より

ター」を書く時間を設けた。生徒は、思春期の胸の内を明かしながら、自分を励ます言葉や応援する言葉を綴った。終末に学習の振り返りとして、自分にメッセージを送る活動は、過去や現在、未来の自身を見つめ、どんな自分も大切に思う気持ちをもつきっかけとなった。

○ 生徒の理解を助けるための専門家との連携

具体的なコミュニケーションスキルの解説は、スクールカウンセラー（以下、SC）と連携を図った。アサーティブな話し方や



スクールカウンセラーと作成した資料

Iメッセージ等について、資料等を吟味し、SCから分かりやすく伝えてもらうことで、生徒は、人間関係づくりに関する自分の学びを確かなものにした。また、講話はSCの存在を知らせる機会となり、普段から相談しやすいつながりが生まれた。

人権集会は、外部講師による講演とアサーショントレーニングの内容を関連付けて行った。そこでは、全校生徒が入り交じって「いいねポイント」を盛り込んだ自己紹介を行うとともに、世界人権宣言の内容が書かれた「人権カード」を交換した。異学年で関わりの輪を広めた上で外部講師による講話を聞いたことで、生徒は、これまでの学習から思考を連続させ人権尊重について学びを深めた。



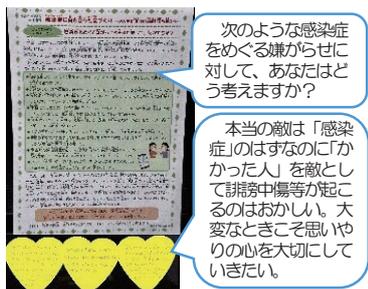
異学年で「人権カード」を交換

講師の先生から「自分や他人のよいところを認めることが人権を守ることに繋がる」と聞いて、最初は疑いました。でも他学年との活動を通して相手のことを更に分ることができたし、まずは興味をもつことが、誰も傷付けない関わり方につながると思いました。

(2) 実践2 「#広げよう“ありがたい輪”～三成中生から医療従事者の方々へメッセージ～」

○ 感染症に係る差別・偏見防止のための働きかけ

新型コロナウイルス感染症が流行し始めた頃、感染症に対する知見や理解の不足から、差別やいじめ、プライバシー侵害などが社会問題となった。そこで、保健委員会では、このような人権問題についてまとめ、不確かな情報からの偏見や思い込みをなくすよう呼びかけた。全校生徒は感染症に対する無理解や不安が



保健委員による呼びかけと対する生徒の反応

人権問題を引き起こすことを知り、この問題について関心と理解を深めた。

○ 地域社会の支えに思いを馳せるメッセージ

更に、医療現場の最前線で尽力し続けてくださっている医療従事者の方々へメッセージを集め、地域の病院や保健所へ届けた。富山市民病院の院長からは「職員は、疲弊していました。感謝の気持ちが綴られたメッセージを読んで、大変元気をもらえました」と返信が届いた。やりとりを通して、周囲に思いを巡らせ、温かい風土をつくり出すことにつながった。



富山市民病院へ届けた全校のメッセージ

(3) 実践3 「みんなで取り組むSNJ s × 人権プロジェクト」

○ 学校全体が足並みを揃えて取り組むための工夫

国連の「SDGs - 持続可能な17の開発目標 -」に関連させて「SNJ s × 人権」という合言葉を掲げ、人権教育啓発のためのプロジェクトを展開した。そこで年度当初は、生徒会執行部と教員が共演したプロジェクト発足ムービーを作成した。それを視聴することで、全校生徒が意識を合わせてスタートできた。また、年間の進捗状況が分かる掲示コーナーを設けた。度々、写真や他生徒の考えに目を留める生徒の姿が見られ意識の継続につながった。



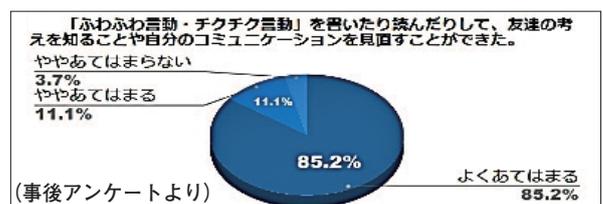
生徒玄関前の掲示コーナー

○ 普段の言動を見つめるためのカード・ポスト

生徒同士のやりとりは、自身が相手に与える影響に無自覚な言動も多く、何気ない振る舞いが他者を傷付けていることがある。そこで、廊下の一角に「受けて嬉しい『ふわふわ言動』」「受けると悲しい『チクチク言動』」と銘打った記入カードとそれを入れるポストを設置した。生徒は、その一角に足を止めコミュニケーションのあり方を考えた。



生徒玄関前の掲示コーナー



○ 学校と保護者・地域をつなぐための保健だより

保健だよりでは、連載コーナー「SNJ s × 人権」

を設け、積極的な発信に努めた。今後、生徒の心の健康づくりを継続的に見守り続けられるのは、保護者・地域社会である。折に触れて、生徒の考えや様子を発信し、生徒とつながるきっかけを意図的につくることは、心の健康づくりに有効であり重要だと考える。

連載コーナー「SNJs×人権」の内容

月	テーマ	月	テーマ
5月	SDGsと「平等権」①ジェンダー	11月	SDGsと「平等権」③障害者
6月	SDGsと「平等権」②いじめ	12月	SDGsと「平等権」④外国
7月	SDGsと「プライバシーの権利」	1月	SDGsと「勤労の権利」
9月	SDGsと「生存権」	2月	SDGsと「自己決定権」
10月	SDGsと「自由権」	3月	SDGsと「パートナーシップ」

(4) 実践4「あったかハートキャラクター総選挙」

○ 人権教育を意識付けるためのキャラクター

保健委員で、人権教育のコンセプトをもたせたキャラクターを考え、全校投票を行い学校のシンボルキャラクターを決定した。全校生徒を巻き込んだ総選挙は、インパクトを与えることができ、人権教育において大切にしたい願いを一つにできた。キャラクターは、各種便りや学年のイベント等で活用された。

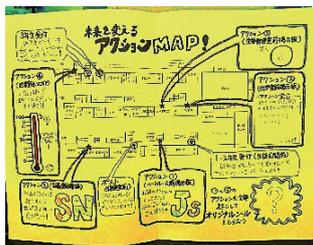


投票するキャラクターを選ぶ生徒

(5) 実践5「未来を変える！アクションラリー〜つなげよう！三成中生のあったかハート〜」

○ 日常生活へとつなげるためのアクションラリー

取組のまとめとして、校内ウォークラリーを企画した。生徒は「アクションMAP」を持ってポイントを回った。お題は「友達によさを伝える」「未来の学校に向けてメッセージを送る」など、これまでの取組を踏まえたものにした。また、MAPには、今後の目当てや、人権意識の高まりを温度計で表現させた。生徒は、経験を生かしながらアクションを起こすとともに、楽しく「自分も相手も大切にしている関わり方」を振り返った。



一年の取組を振り返られる校内MAP

7 生徒の変容

- ・「とやまゲンキッズ作戦アンケート」心の項目において、8項目で県平均を上回り、前年に比べ全項目で肯定的な回答が増えた。
- ・事後アンケートで、各項目9割以上の生徒が、自他を大切にしている関わり方について前向きに回答した。
- ・取組前後で、自身を「アサーティブ」タイプだと答えた生徒の割合が11.1%から54.8%に向上した。

取組後「とやまゲンキッズ作戦アンケート」

	共通項目	県平均との差	本校前年との差
1	相手や場に応じた言葉づかいに気を付けている。	△ -1.3%	+ 0.2%
2	自分を信頼してくれる人はいる。	○ +4.8%	○ +10.9%
3	心を打ち明けられる友達がいる	+ 2.6%	○ +10.1%
4	少しぐらいの失敗は気にしないでいられる。	△ -2.6%	+ 2.4%
5	イライラすることはない。	+ 2.3%	○ + 5.3%
6	やってみようこと・熱中できることがある。	○ + 5.0%	○ + 7.9%
7	心配事・悩み等は誰かに聞いてもらっている。	○ + 5.0%	+ 2.1%
8	家の方は、自分の気持ちを分かってくれる。	○ + 9.1%	○ + 4.7%
9	学校生活は楽しい。	+ 2.4%	○ + 9.9%
10	SNSによるトラブルや心配なことはない。	○ + 4.0%	○ + 1.0%

(△: 県平均を下回る数値、○: 3ポイント以上上がった数値)

事後アンケートより

項目	当てはまる	やや当てはまる	やや当てはまらない	当てはまらない
1 自分の気持ちを大事にして考えや思いを表現する大切さに気付いた。	85.4%	14.6%	0.0%	0.0%
2 相手の気持ちを大事にして表現の仕方に気を付ける大切さに気付いた。	91.0%	9.0%	0.0%	0.0%
3 今後も、自分も相手も大切にしている関わり方を目指して過ごしたい。	96.3%	3.7%	0.0%	0.0%



8 成果

- ・視点1：全体構想をもち計画的に進めることで、生徒が主体的に表現の仕方を工夫しながら、心地よい人間関係を築こうとする姿が見られた。
- ・視点2：課題設定や教材等を工夫することで、生徒は意欲的に課題解決に向き合い、自他のよさ・違いを認め、互いを大切にしていこうとする姿が見られた。
- ・視点3：専門家との連携や保護者・地域に働きかけを積極的に行うことで、生徒の学びや支援体制が充実し、生徒は視野を広げて人権意識を高めた。

9 課題(効果的な心の健康教育・人権教育のために)

- ・生徒の心の健康や人権意識を保持増進できるよう、様々な教育活動と関連付け、横断的で継続した支援が必要である。
- ・生徒が現在或いは将来直面するであろう諸問題に適切な意思決定や行動選択ができるよう各校種の学習内容を系統立て、発達段階に応じた支援が必要である。

10 おわりに

研究を通して、多様な生徒が相互に受け入れられ、認め合いながら成長できる関係を築いていくためには、経験を積む学びの場を積極的にもてるようにすることが大切だと感じた。生徒が「ありのままの自分」、「ありのままの相手」を大切に思い、人との関わりに屈することなく、前向きな気持ちで様々なことに挑戦できるように、日頃から生徒に寄り添い、養護教諭の立場からできることを模索し、研鑽を積み続けたい。

持続可能な学校運営と教師の資質向上の両立を目指して

射水市立中太閤山小学校 校長 堀 かおり

I 主題設定の理由

新型コロナウイルス感染症が感染症法上の5類に位置付けられ、人数制限の必要がなくなり、コロナ禍前の学校運営に戻ることが可能になった。今後は、コロナ禍において得た知識や方法を活用し、働き方改革も視野に入れつつ、学校行事をはじめとした教育活動の持続可能な運営が求められると考える。

一方で、校内研修会において、「一人一人を見つめ、育てる」という富山県教育の神髄ともいえる理念が、本校教職員に浸透していないことに気づき、愕然とした。これは、私たち世代が流行に追われ、不易ともいえる文化の継承を怠ってきたためだと自戒した。

そこで、本研究テーマを設定し、働き方改革を進めつつも、教員の資質向上に役立つ学校運営の在り方について探っていきたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の視点と研究内容

【視点1】持続可能な学校運営

- ・ねらいを明確にした学校行事等の見直し
- ・教員の働き方改革を進める地域連携の在り方

【視点2】教師の資質向上

- ・校内研修テーマ『見付ける力を育む、子供が主役の授業～カウンセリングマインドを生かした道徳科を基盤として～』を核にした研修の活性化
- ・自校や他校の研修の機会を生かした若手研修の活性化

III 研究の実際

1 【視点1】持続可能な学校運営

(1) ねらいを明確にした学校行事等の見直し

① 運動会

運動会には主に2つのねらいがあると考え。1つは体力の向上であり、もう1つは集団力の育成である。コロナ禍を契機に協議内容を見直しスリム化を図った。つまり、体力の向上を目指した徒競走は残し、遊技性の高い技走は省いた。集団で知恵を出し合い、困難を乗り越える経験ができる団体競技や応援コールは、短時間ながらも充実感が得られる内

容に改善を図った。

これによって、教員の事前準備や児童の練習時間は短縮されつつ、運動会のねらいは十分に達成することができ、6年生のリーダーシップや下級生のフォローアップも育成された。

② 歌声タイム&PTA親子活動

本校には、年間7回、ロング昼休みを利用した歌声タイムの時間があり、各学年の音楽科の学習成果を発表したり、全校で声を合わせて歌ったりするなど、音楽を全校で楽しむ文化が醸成されている。この在り方を下記のように見直した。

- ・年間7回の歌声タイムを非公開で実施。
- ・授業参観日は年間4回実施。
- ・コロナ禍前は、土日に親子活動を実施。場所や内容を決めることがPTA役員にとっても負担。

- ・年間6回に減らし、公開で実施。
- ・授業参観日を年間3回に減らして実施。
- ・歌声タイムで発表する学年の5限を欠課扱いとし、親子活動を実施。場所は体育館とし、お金もかからない。

この見直しによって次の成果があった。

子供・これまで以上に、張り切って歌声タイムの練習に励むため、学年発表の質が向上した

教員・授業参観の回数と休日出勤が減り、負担軽減につながった

保護者・PTA特別会計から親子活動の予算を削減した

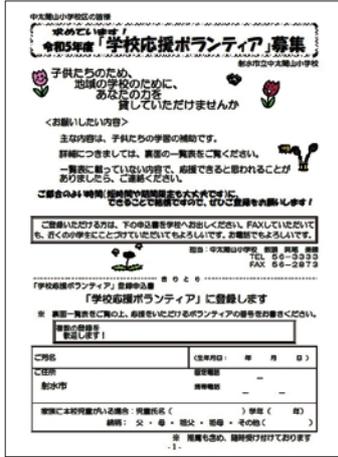
- ・親子活動担当のPTA役員の負担が軽減された
- ・親子で楽しむことは勿論、学年の保護者同士の交流にもつながった

元々は、PTA役員よりコロナ禍でバザー等が実施できないため、PTA特別会計の収益落ち込みについて相談されたことがきっかけであるが、保護者間の繋がりが薄い本校では、親子活動は必要であると考え、経費をかけない活動として残すこととした。授業参観の回数を減らし、歌声タイムとPTA親子活動を同日開催とすることは、PTA役員をはじめ、保護者に説明し、理解を図ってから実施したこともあり、保護者からも概ね好評を得ている。

(2) 教員の働き改革を進める地域連携の在り方

① 学校応援ボランティアを生かした教育活動

学校を応援してもらう仕組みを構築するため、まず学校評議員会にて学校応援ボランティアグループの重要性を説明し、評議員でもある自治会長のお二人に協力を仰いだ。両自治会の定例理事会にて話題に挙げ、地域回覧にて周知してもらえらることとなった。その反響は大きく、現在39名(団体1グループを含む)の登録がある。



2年生の町探検や3年生の薬勝寺池探索、5・6年生の調理実習・ミシン学習等の学習に関わってもらうことで、一人一人の子供たちを手厚く支援することができるとともに、教員の身体的・精神的負担を軽減することにもつながっている。

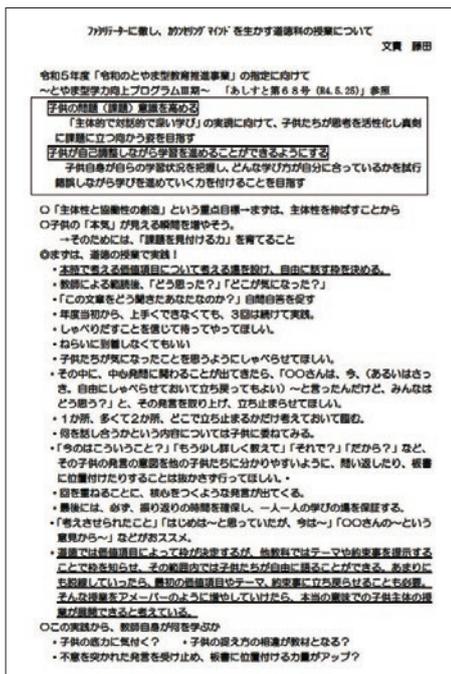
次年度から射水市はコミュニティスクールを導入することになっている。本校では、この学校応援ボランティアを生かして準備を進めている。

2【視点2】教師の資質向上

(1) 校内研修テーマ『見付ける力を育む、子供が主役の授業～カウンセリングマインドを生かした道徳科を基盤として～』を核にした研修の活性化

① 校内研修テーマの共通理解に向けたチャレンジ

「子供が主役の授業」を浸透させるため、昨年度はふるさと教育に力を注いだ。その結果、一部の学年では確かに子供たちの主体性に伸びが見られた。しかし、全校に浸透したとは言えない状況があった。そこで、昨年度の3学期開始に当たり、具体的な方策を示しながら、道徳科においてファシリテーターに徹する



取組に挑戦することを全教員に依頼した。

その後、取組状況を確認するため、3回の挑戦を終えた教員から一人一人にインタビューも行い、その内容の周知も図った。下記はその一部である。

○はじめは、子供たちが戸惑っていた様子であったが、回を重ねるごとに子供たちが感想をつないでいき、3回目には子供たち自身で話し合いを深めていくようになった。3回続ける意味が分かった。
 ○4回目になると、子供たち自身で話し合いを展開できるようになり、しかも、自分がねらいとすること以上のことを語り合い、深まっていった。これまで、自分では気付かなかったが、随分要らないことを教師が話していたことに気付いた。
 ○教師が問うのではなく、自分たちで問い、それに答えていくため、話しやすい雰囲気になった。多様な考え方が出てくるため、聞いているこちらも楽しかった。

インタビューを重ねる中で、教員の手応えを感じることができたため、次年度の方向性も示した。

〈皆さんのチャレンジに感謝！感謝！〉
 今年度の様子であれば、全教員にお願いできると判断。実は、教師の力量アップに繋がる取組！
 ・子供から引き出すことに徹することで、ファシリテート力が鍛えられる。
 ・どこから何が飛び出すか分からないため、教師の柔軟性や対応力が養われる。
 ・回を重ねるごとに、教師の予想を上回る発言が飛び出すようになるため、心から感嘆することができ、子供のもつ可能性を信じられるようになり、教師の意識が変わる。
 ・どの子供が何を言い出すかなどの予測ができるようになり、児童理解力が培われる。
 ・他教科・領域にも取り入れることで、子供たち主体の学習が増えることが期待できる。

〈次年度に向けて〉
 ・子供自身が見付けてくる授業を増やしたい！→子供が主役の授業が増えるのでは？
 ・基本となるのは、週に1時間ある道徳の時間。まずは、そこから教師の力量の向上と考える子供集団の育成を図る。
 ・道徳での学びを他教科・領域へ広げていく。
 ・道徳の導入で今日の道徳的価値に触れるように、単元名等の提示によって見通しをもたせ、その枠内で自由に語り合う授業をと考えている。(単元を貫く課題でもよい)
 ・朝の歌や歌声タイムでは、心を開放することに重点を置き、伸びやかに歌を楽しむ→心の安定を図る。心の安定無くして、学び合いは成立しないし、学力も身に付かない。

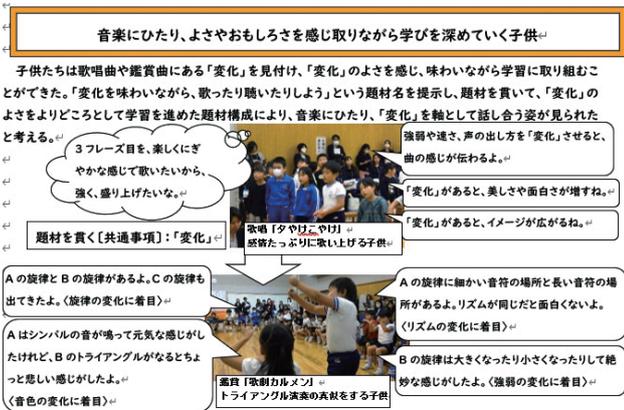
↓
 令和のとやま型教育推進事業
 実践研究テーマ (①問題発見・解決型学習)
 ↓
 次年度の校内研修テーマ…
 見付ける力を育む、子供が主役の授業 (案)

② 子供が主役の授業が増えた校内研究授業

具体的なイメージの共有を図った研究主任の道徳科の授業を皮切りに、一人一授業を実践した。事後研修においては、「授業の中で生徒指導を行う」という点について繰り返し助言するよう努めた。その成果もあってか、道徳科を基盤としながらも、他教科においても、子供たちが伸び伸びと安心して自分の考えや思いを述べたり、友達の意見を受け止めながら互いの考えを練り上げたりする授業を多く見かけるようになり、教員の意識の変化を実感している。
〈5年：道徳科の授業〉



〈2年：音楽科の授業〉



③ 実践を持ち寄る「子供の姿で語る会」

教員の意識を変えるためにもう一つ、研究主任に「子供の姿を語る会」の企画を要請した。この会は、「子供ってすごいな」と感じた瞬間を持ち寄り、気軽に話し合うことで教師が子供の姿に謙虚に学び、子供の可能性に気付くことをねらいとしたものである。道徳科等の板書画像を提示しながら、子供の発言に驚いたことや授業展開の改善点について自由に語り合う場を設けた。この取組により、「子供はその場面でこう言ったのかもしれない」「この発言は、教師の揺さぶりに対する反応であ



ろう」などと、子供の発言を多面的・多角的に分析する視点をもつことができた。

④ 授業力向上に向けての教員の自己評価

子供から見た視点、教員から見た視点について項目を立て、教員の自己評価を行った。

アンケート項目

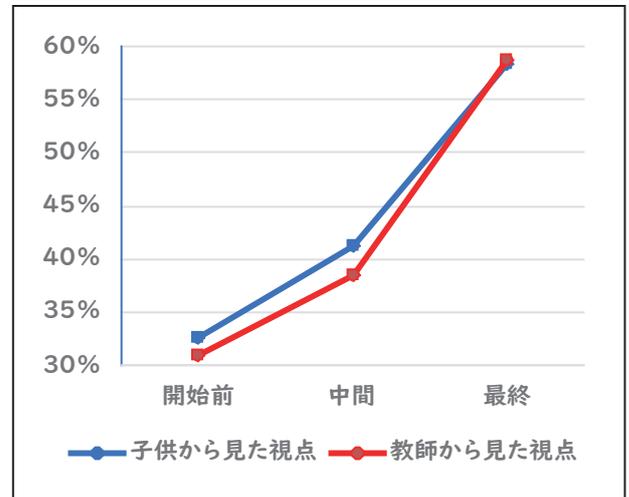
〈子供から見た視点〉

- ・気になることや疑問に感じることを見付ける。(問題意識)
- ・大切なことや価値のあることを見付ける。(本質を見ぬぐ力)
- ・ひと・もの・ことそのもののよさを見付ける。(他への敬意)
- ・他との違いから自分のよさを見付ける。(自己の再認識)

〈教師から見た視点〉

- ・子供の多様な考えを引き出す力
- ・自分の予想を超える発言に対応する柔軟性や対応力
- ・子供の発言の背景を探ろうとする児童理解力

下記はその結果である。



今年度の校内研修テーマに基づいて研修を始める前は、子供の見付ける力や教師のファシリテーター力について、低い評価が多かった。しかし、研修を重ね、教師がこれまで通り教師が1時間の授業のねらいをしっかりとつことはもちろん、その枠の中で子供の多様な考えや価値観を引き出し、子供が自由に語り合える授業を推進した結果、自己評価が高まってきた。

教師がファシリテーターとなり、子供の思考力を活性化させることで、子供が自分の力で学びを推し進める力を育むことにつながったことが、教員の自己評価からもうかがえる。子供が学び合いから新たな視点を得ることで、自分の考えを再構築し、新たな課題を見だし、積極的に解決に向かう好循環が生まれることを、教員が実感できたことが大きい。

(2) 自校や他校への研修の機会を生かした若手研修の活性化

① 若手教員の自主性を育てる校内若手研修

本校では10年次未満教員を対象とする若手研修を

実施している。年度当初に若手教員で話し合い、実施の有無も含め、その内容や計画に至るまで、本人たちの自主性に任せている。ただでさえ多忙な現場で、やらされ感がある自主研修は、負担感ばかりが募り、百害あって一利なしである。

今年度もメンバーで話し合い、実施すること、自分たちのニーズに合わせて関係教員を要請すること、自分たちの仲間からも学ぶこと等を決め、計画を立てていった。

実施月	関係教員らによる指導・若手教員による研修会
5月	生徒指導について（担当：生徒指導主事）
6月	教科指導について（担当：6年学年主任）
8月	若手教員による研修会（担当：〇〇）
9月	教科指導について（担当：研究主任）
10月	若手教員による研修会（担当：〇〇）
1月	若手教員による研修会（担当：〇〇）

〈今年度の内容と実施月〉

校内若手教員研修は、OJTが活発化するだけでなく、若手教員同士の交流の場となり、悩みを打ち明けやすい人間関係づくりにも役立っているように感じる。

② 他校の研修の機会を生かした若手研修

今年度より、射水市では市内小中学校の学校訪問研修の機会を生かした若手研修を始めた。本校においても、若手教員は年間2回まで、それ以外の教員も年間1回まで参観できることとし、その機会を大いに活用した。中学校を参観した教員からは、「小学校からの繋がりを捉えることができた」「小学校で習得させておくべきことを確認できた」との声が聞かれた。

また、市外や県外研修に参加した教員からの還元も非常に役に立っている。特に、横浜市の小学校を参観した教員からの下記の「個別最適な学び」についての報告は、印象に残るものとなった。

「個別最適な学び」とは、集団の中で一人一人の存在が際立つ授業である。「個別最適な学び」と「協働的な学び」は相反するものではなく、どちらも学びの目的ではなく手段であるがゆえに、共存し得るものであり、他者の意見をしっかり聞くこと、自分の内面をじっくりと振り返り、考えを構築していくことによって成立し得るものである。
 （元文部科学省主任視学官 嶋野道弘先生・國學院大學教授田村学先生による対談より）

他市の研修に参観した際に、終始タブレットと眺め合いを続ける授業が、あたかも「個別最適な学び」であるかのような印象を受けてきた教員にとっ

ては、「『個別最適な学び』とは、集団の中で一人一人の存在が際立つ授業である」「『個別最適な学び』と『協働的な学び』は相反するものではない」という言葉が胸に響いたようである。

Ⅳ 研究のまとめ

1 成果

【視点1】持続可能な学校運営

取組の成果は、教員の勤務時間に表れた。

	同時期の平均時間外勤務時間	令和3年度との比較(R3を0時間とする)
令和3年度	38.27時間	0時間
令和4年度	35.05時間	-3.22時間
令和5年度	32.23時間	-6.04時間

教員の時間外勤務の平均32.23時間は、持続可能な働き方に十分到達している数値とは言えないかもしれない。しかし、令和3年度はコロナ禍の最中であつたことや、今年度は通常の学校運営に戻していることを鑑みれば、十分に成果はあつたと考える。

【視点2】教師の資質向上

取組の成果は、学校評価に表れた。（単位は%）

対象	評価の内容	7月	12月
児童	自分の考えを自分の言葉で書いたり話したりすることができた	87	90
教員	「いのち」「生き方」「人の関わり」に関する授業を行っている	78	90
	研究主題を意識した授業づくりに努めている	73	90
	自らの資質向上に向け、意欲的に校内外の研修に参加している	79	90

全体的に数値が上がっている。何よりも嬉しかったのは、児童と教員アンケートのそれぞれの分析担当教員が、数値上昇の要因として今年度の研修による授業改善を挙げたことである。「ねらいを明確にしつつも、子供の内から湧き出る疑問や思いを大切に拾い上げること」「カウンセリングマインドを大切に互いに聴き合うこと」等によって、子供たちが伸び伸びと語り合う学級・学校風土ができつつあることを実感している。

2 課題

カウンセリングマインドの視点を授業に取り入れることで、授業の中で生徒指導を行うことができ、それに伴って放課後の生徒指導が減ったこともあり、持続可能な学校運営と教員の資質向上の両立を図ることができた。今年度は理解のある教員に恵まれたが、教員のメンバーが入れ替わっても持続できるかどうかは課題である。

ふるさとを愛し、たくましく未来を切り拓く児童の育成

－ SDGsとキャリア教育の推進を通して －

射水市立放生津小学校 校長 赤尾 秀 康

1 主題設定の理由

本校は、創校150年の歴史ある学校である。射水市北部に位置し、海王丸パークや日本のベニスといわれている内川、歴史的、文化的に価値の高い史跡が多く残り、ふるさと学習の教材となるようなものが多い地域である。昨年度は、近年、地域とのつながりが希薄になりつつあったことから全教育活動における「ふるさと教育」を見直し、「地域とのつながり」について改善を図った。本年度は、これまで積み上げてきた「ふるさと学習」をSDGsの視点から捉え直し、「キャリア教育」につなげたいと考えた。SDGsとは「持続可能な開発目標」。簡単に言うと「世界中にある環境問題・差別・貧困・人権問題といった課題を、世界のみならず2030年までに解決していこう」という2030年度までに達成すべき目標である。まずは、地域に目を向け地域とつながる活動を通して、「ふるさとを愛する心を根底に、身近な課題を解決していけるようなそして未来をたくましく切り拓いていく子供たちに育てたい」と考え本研究に取り組んだ。

2 研究の実際

(1) SDGsを意識したふるさと教育の推進

～キャリア教育の推進につなげて～

① ふるさと教育の推進

全教育活動からふるさとの学習に関連した単元を洗い出し、SDGsの17のどの項目と主に関連しているかを位置付け、教育活動に意義をもたせた。

学年	1	2	3	4	5	6
総合的な学習の時間						
国語						
算数						
理科						
社会						
道徳						
体育						
音楽						
美術						
外国語						
特別活動						
学校行事						

特に生活科・総合的な学習の時間における単元がSDGsの「住みよいまちづくり」と直結していることから、学習の発表会では児童が体験し感じた地域のよさを、教師が劇化台本に創り上げ、保護者や地域住民に発信した。(表1)

学年	教科及び領域	演題
2	生活科	放生津のすてき発見隊
3	総合的な学習の時間	ぼく・わたしたちの自慢 ～放生津の宝物～
4	総合的な学習の時間	レッツみんなで環境チャレンジ10 ～われら放生津環境大臣～

(表1)「学習の発表会プログラム」より

② キャリア教育との関連

小学校におけるキャリア教育をどう捉えるか
「小学校学習指導要領 第1章総則 第4 児童の発達の支援 1 児童の発達を支える指導の充実」には、次のようにある。

児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要しつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。

また、「小学校学習指導要領 第6章特別活動 第2 各活動・学校行事の目標及び内容」には、

一人一人のキャリア形成と自己実現
ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成 学級や学校での生活づくりに主体的に関わり、自己を生かそうとするとともに、希望や目標をもち、その実現に向けて日常生活をよりよくしようとする事。
イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解 清掃などの当番活動や係活動等の自己の役割を自覚して協働することの意義を理解し、社会の一員として役割を果たすために必要となることについて主体的に考えて行動すること。

以上のことから、学校行事等、特別活動を要として全教育課程における教科横断的な取組から社会の一員としての社会参画を目指したキャリア教育推進につなげていく。

③ 教科横断的な指導・外部講師と連携した指導
「まっつん大好き 放生津の宝物」(3学年)

3年生は総合的な学習の時間に「見つけよう！伝えよう！放生津の宝物」として、獅子舞や曳山の歴史や特徴等を本やパンフレットで調べている。6/14には、獅子舞保存会の青年団の方々に獅子舞について教えてもらい、11/21には曳山保存会の専務理事の宮島さんをゲストティーチャーに迎え、曳山について質問をしたり詳しい話を聞いたりした。



「守ろうぼくたちわたしたちの内川」(4学年)

4年生は、総合的な学習の時間に「環境」をテーマに追究している。身近な内川を環境を知ろうと、内川沿岸の清掃活動を行い、実際に歩いて調査した。その結果、ペットボトルやトレイ等のゴミが至る所に落ちており、内川にも、多くの漂流ゴミが目立つことを知った。このままで大丈夫か疑問にもった子供たちは、内川の水質に詳しい「水辺のまち新湊」の横田事務局長に内川の移り変わりについて話を聞いたり、市農林水産課の山本さんに内川に生息する魚について話を聞いたりした。そして実際に魚を釣る体験をして内川に生息する魚についても知るところとなった。見聞きしたり体験したりしたことをまとめる中で、環境だけでなく、地域人材の働きや役割を意識することとなった。



「いのちの教育」(5学年)

5年生は、総合的な学習の時間に「共生」をテーマに追究している。地域在住の視覚障害をもった塘添さんと介添者の森さんを講師に迎え「共に生きる」ことと「いのち」について考える時間をもった。塘添さんの明るく話される姿から前向きに生きる力の強さと感謝をもつ心を学ん



だ子供たちは、一緒にブライントーブルテニスをする中で、自己の「障害に対する思い」を見直すきっかけとなり自己理解を深める機会となった。



④ 人権教育・福祉教育の推進

毎月10日を「はとっ子の日」と定め、6年生が企画運営する縦割りの活動を行っている。1年生から6年生まで所属している色団やグループでの活動の中で、仲間意識や下級生への思いやりの心などを育てている。秋には「フォールボランティア」を企画し、校舎周辺の清掃や溝掃除、落ち葉掃き等を行い、地域の一員としての意識を高めた。また、12月の人権週間には、全校集会を開き、人権について学んだ。



⑤ 掲示による意識化

日々の実践が・活動がSDGsのどの項目に位置しているかを児童玄関の掲示板に貼り付けて可視化できるようにしている。児童は、自分たちの学びをSDGsの窓口から捉え直し、学習の発表会の場や交流の場で保護者や地域住民に発信している。児童にとって、この掲示が、自分たちの学習や活動がSDGsのどの項目に関係しているのか、またどんな意義があるのかを捉え直す場になっている。



(2)地域との交流～主体的・協働的に問題解決～

①ふるさと教育の推進…

地域の獅子舞祭りに参加

地域の獅子舞連合会の代表の五十嵐さんより創校150周年記念を祝って是非獅子舞を奉納したいとの申し入れがあり、8つの町内の獅子舞が奉納された。本校の児童も各町内の獅子舞に「きりこ」や「囃子方」で参加した。町内での練習会では各町内で伝統を受け継いでいる方々から、夜遅くまで指導してもらい、自ら参加を希望した児童も自信をもって獅子舞に参加していた。地域の一員として活躍している児童たちを誇りに思う。



のじた踊り・町流しに参加

毎年3年生は、郷土の踊りである「のじた踊り」を地域の先生方から学んでいる。4名の地域の先生から学んだ児童もすぐにこつをつかみ、上手に踊ることができた。今年度は7/29と8/11に、30年ぶりに輪踊りや町流しが地域で行われることもあり、全校児童が踊りを教わる機会をもった。町流しには、1年生から6年生までの児童が進んで参加し楽しく夏祭りを盛り上げた。

曳山祭り・築山行事に参加

例年10/1に行われる放生津八幡宮祭の曳山・築山行事が今年度も盛大に行われ、多くの子供たちが曳山囃子や前人形の操作、舞姫として参加し自分の役目を果たした。参加した児童も祭りに携わった保護者も、地域に伝わる国無形重要文化財を心から慕い、地域の一員として参加させてもらった大きな喜びを得た。曳山保存会の方々と各町内の曳き子の方々と直接関わることができた児童は、自分たちが伝統文化を守っていく立場にあることを肌で感じ、将来への大

きな夢や希望を口々にしていた。

②地域発信事業の推進

人文字プロジェクト

本校の創校150周年を記念した人文字の撮影を企画したところ、是非とも地域の方々にも参加してもらい、一緒に祝ってもらいたいという思いで、同窓会、PTA役員と地域振興会・コミュニティセンターが主体となって全自治会に呼びかけ、本校のグラウンドでの人文字を完成させた。当日は、全校児童と地域住民、計400名余りが参加し、ドローンを使っての空撮と動画撮影が行われた。地域の方々のおかげで大成功に終わったことに対し、児童が感謝の言葉で締めくくった。地域と一体となったプロジェクトに児童も教員も保護者も実行委員も大満足の日となった。



学習の発表会 & 地域交流会

本校の創校150周年記念の「学習の発表会」に、児童の出演に加えて、地域の方々にも参加してもらおうと周年記念事業実行委員の中で計画が進んだ。当日の児童のステージ発表では、各学年、ふるさと学習を中心に、学校の150年を祝う思いを、歌や劇で表現し地域の方々への感謝も盛り込んで発表した。

また後半は、地域の方々から3つの代表団体の出演機会を設けた。児童と一緒に曳山囃子を披露して下さった「南立町曳山囃子方連中」女声コーラスグループ「カラフル」、そして進学先の「新湊中学校吹奏楽部」のそれぞれの演奏で会場の盛り上がり最高潮に達した。児童も地域の方々と共に素晴らしい時間が共有でき思い出に残る発表会となった。

創校150周年記念集会

記念式典の中での「児童の発表」では、4年生26名による地域に伝わる「めでた踊り」と、全校児童による「よびかけ」「はとっ子の歌」を披露した。子供たち一人一人が、本校へのお祝いの気持ちと地域の方々への感謝の気持ちを伝えようと心をつなぐ取り組みをした。参加者全員で式典最後に歌った校歌は、会場いっぱい響

きわたった。記念講演では、本校卒業生である声楽家 澤武紀行氏が「夢を見ること」と題して、目標をもち続け努力することの大切さや認め合うことの重要性について話され、「校歌」「オーソレ・ミオ」「富山銀行のCMで流れる歌」を聞かせていただいた。児童には、本物に触れる貴重な機会となった。



③地域から世界へそして宇宙へ交流事業の推進 保育園児との交流

「共生」を総合的な学習のテーマに掲げている5年生は、近くの保育園児と交流を行った。年長児の発達の段階を園長先生や保育士から学んだ児童は、園児が喜ぶことを経験させたいと4つのブースを設けることとし、遊び方の分かりやすい伝え方や言葉遣い、接し方を工夫するなど、相手意識をもちながら準備をして当日を迎えた。保育園での活動を機に幼児や保育士と接する機会を得て、働くことの意義や責任について自分の考えを深めることができた。



台湾士林国民学校との交流

4年前から台湾の台北市士林国民小学校と交流している。本年度もコーディネーターとして射水市未来創造課の陳さんに通訳等のご協力いただき、本校の4年生と士林国民小学校の児童とがそれぞれの学校の紹介や学習したことをオンラインで発表し合った。1時間程度の交流であったが、互いの文化の違いや共通点等について知ることができ有意義な時間をもつことができた。他国と瞬時にオンラインでつながることができ、他国への興味関心や通訳等の国際的に活躍する仕事に直接触れ、国際的な視野を広める機会となった。



ISS（国際宇宙ステーション）との交信等

本校の子どもたちが夢と希望をもって未来に羽ばたけるよう、無限の宇宙をテーマにした国際宇宙ステーションとの交信プロジェクト（ARISSスクールコンタクト）を計画中である。日程決定の連絡はまだ無いが、国際宇宙ステーションの長期滞在中の宇宙飛行士との交信に挑戦する予定である。実現すれば、富山県では初めての試みとなる。児童のキャリア形成の一助として、是非とも児童に体験させたいプロジェクトとして、一年前に申請した。PTA役員の棚田氏に、スクールコンタクトのサポートに当たってもらい、練習を重ねている。直接交信を行う15名の児童は英語で質問する予定で、宇宙飛行士と交信を心待ちにしている。成功すれば大きな夢の実現となる。



(3)成果と課題

①成果

- ・活動ごとの児童の感想からは、地域の方々への感謝の思いが溢れている。SDGsを意識した児童主体の「ふるさと学習」の推進により、児童と地域とのつながりが強化された。
- ・家庭、地域との連携により、児童が自ら進んで地域の中で働く姿や伝統文化の継承の役割を担っている姿を直接見ることができた。児童は地域において、自分たちへの愛情を肌で感じることで、各自のキャリア形成や自己実現につなげることができた。
- ・児童に学ぶことと自己の将来とのつながりを意識付けたことで、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤ができたと考える。

②課題

- ・児童の一人一人の将来像につながる系統的なキャリア教育の推進が今後も必要である。
- ・児童の一人一人の将来像につながるキャリア教育推進に向け、学校や地域が一緒になり、共に児童を育てていく意識がもてるよう、今後も風通しのよい学校経営を行う必要がある。
- ・働き方改革が叫ばれている昨今、教員の意識の向上が鍵となる。校長は、児童だけでなく教員自身のキャリア形成にいかにか寄与できるかが問われていると強く感じている。

先生方の「忙しい」をあきらめない

～藤ノ木中働き方カイゼン～

富山市立藤ノ木中学校 教頭 山崎 陽江

1 主題設定の理由

学校における働き方改革の目的について中央教育審議会の答申では、「教師のこれまでの働き方を見直し、教師が我が国の学校教育の蓄積と向かい合って自らの授業を磨くとともに日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができるようになること」としている。この目的を達成するためには、深刻化する学校の多忙の状況を改善していくための方策を練って実践していくことが管理職として急務となっている。

教頭として勤務して3年目になる。これまでも、職員の時間外勤務時間を削減したい思いから、早めの退勤を促すなどしてきたものの、状況は好転せず、管理職からのトップダウン方式の働き方改革に違和感を感じていた。

このような経験から、働き方改革はトップダウン方式でなく、現状を把握し、現場の先生方が問題の改善を図るためにさまざまな知恵を出し合い、解決策を考えていくボトムアップ方式で進めていく方が効果的ではないかと考えた。職場では、「今の時期は仕事量も多く、忙しいので、遅くなっても仕方ない。」等の声もあるが、これまでの学校現場での当たり前から脱却し、ムリ・ムダ・ムラをなくし、先生方が忙しいことを当たり前にしたくないという思いから、研究主題を設定した。また、副題の「カイゼン」は、「改善」のように、悪い点を改めるという視点ではなく、今よりよい方法を模索していくという積極的な意味を込めて、あえてカタカナ表記とした。

2 研究の方法

藤ノ木中の働き方カイゼンは次の4ステップから成るPDCAサイクルを繰り返す、課題解決型アプローチで進めることとした。

【ステップ1】 チームをつくる。

【ステップ2】現状を把握し、アイデアを出し合う。

【ステップ3】改善策を実施する。

【ステップ4】評価・修正をする。

3 これまでの取組の概要

【ステップ1】 チームをつくる。

【ステップ2】現状を把握し、アイデアを出し合う。

3.1 働き方カイゼン委員会の発足

働き方改革は、管理職がリーダーシップをとって押し進めていくだけでは、職員が主体的に動くことができないと考えた。そこで、働き方改革の取組の中心となる「働き方カイゼン委員会」を発足した。委員会は、職員の立候補によるメンバーで構成され、1学年5名、2学年1名、3学年2名、4学年2名合計10名が集まり、夏期、冬期休業中に委員会を実施した。夏期休業は職員の働き方の現状や働き方カイゼンのアイデアを出し、取組の方向性等を話し合った。ここで話し合われた内容を校長に提案し、妥当性、有効性があると判断されたものを実施に移していくこととした。冬期休業は期間も短いことからチャット会議形式で実施し、これまでの取組の成果と課題や3学期以降に取り組みたいことについて話し合った。カイゼン委員会の設置により、各学年の働き方の現状や本音の意見を知ることができ、職場の課題発見や取組推進に役立てることができた。また、委員会に所属する者同士で働き方カイゼンの視点についてアドバイスし合ったり、各学年に働き方カイゼンの視点を広めたりすることで、職員全体で働き方カイゼンにチームで取り組む雰囲気が醸成されたと感じている。

3.2 働き方カイゼン通信の発行

学期に1～2回程度「働き方カイゼン通信」を発行した。通信では、働き方カイゼン委員会で話し合われた内容や、職員が工夫して働き方カイゼンに取り組む様子の紹介、実践の進捗具合等について取り上げた。取組の様子を「見える化」することで、課題や成果の共有、働き方カイゼンに向けて、職場の雰囲気の醸成を図ることにつながった。

項 目	できている	できていない
1. 自身の勤務時間（一日一週）や勤務時間外業務に、記録（記録）している。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2. 勤務時間を減らし、計画的に仕事を進めている。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3. 授業改善と業務の効率化に努めて、30分特別授業している。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4. 業務の効率化を意識し、依頼と取り次ぎ、確認しやり直しがない。仕事を効率化している。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5. 自身の心身の健康維持に努めている。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6. 授業や研修準備と連携し、協力し、授業準備の負担を軽減している。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7. 勤務時間外、児童生徒とコミュニケーションを確保している。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

【ステップ3】改善策を実施する。

3.3 校時の変更

令和4年度に校時を見直し、令和5年度から月・火・木は清掃活動をカットし、部活動の始まる時間を早めることで、一年を通して下校時刻を17:00に早期化した。また、水曜日はノー部活動デー、それ以外の曜日は部活動の時間を90分確保できるようにした。

これにより、勤務時間中に学級事務や授業準備等の時間が確保できるようになり、1日当たりの時間外勤務の減少につながった教員もいる。一方で、まだまだタイムマネジメントの意識が希薄な教員も多いので、今後更なる工夫・改善が必要である。

3.4 タイムマネジメント研修の実施

職員一人一人のセルフマネジメントを促すため、ビジネス界の講師を招き、タイムマネジメント研修を実施した。研修では、タスク管理の方法、タスクのアポイントメント化、OODAループ等、ビジネス界でのタイムマネジメントスキルを学ぶとともに、教職員一人一人の働き方に対する考え方を見つめ直すことができる機会となった。

研修後の参加者からは次のような感想が得られた。

- ・「タスクのアポ化」という言葉が印象に残っています。今後、作業の人数や回数、時間といったことを計画し、可能な限り制限内に仕事をしていきたい。
- ・教員の業務量を可視化し、講師の先生のような業務改善のスペシャリストの方に分析していただき、根本的な働き方の見直しが必要だと感じた。

研修後に、各自の働き方カイゼンの目標を設定し、2学期から各自で取組を実践した。また、3学期には各自で振り返りを行い、新たな働き方の目標を設定した。このように、職員一人一人が自らの働き方に関心をもち、よりよい働き方について考えることで、職員個人による主体的な働き方カイゼンを目指した。

氏名	分類	行動目標
〇〇	時間管理	月の超過勤務時間を65時間以内にする。
〇〇	事務	TO DOリストを整理し、仕事の優先順位を見極めて取り組む。
〇〇	校務分掌	ICT利用で活用できそうなものを他の人にも紹介する。

働き方カイゼン3学期・各自の目標

3.5 カエルボードの設置

職員の、「何となく残業してしまう。」「学年の先生が残っているのに帰りづらい。」等の声から、朝の出勤時にその日の帰宅予定時刻にマグネットを置く「藤ノ木中カエルボード」を設置した。職員各自の退勤時間を可視化し、事前に自身の退勤時刻を意識したり、同僚の帰宅予定時刻を知ることによって、職員が自らの仕事の調整を図ったり、仕事を頼む時刻や打ち合わせの時刻を工夫したりすることにつながった。また、退勤時刻が遅くなりそうな職員には管理職から声を掛けるなど、職員個々の働き方の状況を把握しやすくなり、過度な超過勤務等の抑制にもつながった。



「藤ノ木中カエルボード」

3.6 教育業務支援員活用の工夫

職員の「スクールサポーターやスクールサポートスタッフ等にどんな仕事をどのように頼んだらよいか難しい。」との声から、教育業務支援員の活用を推進するために、「藤ノ木中学校ワークシェアMAP」と「お仕事お願いボード」を作成した。「藤ノ木中学校ワークシェアMAP」は、SS、SSS、SSW、SCの先生方に頼むことのできる仕事の内容やルート等をマップで示したものである。これによって、誰にどのようなルートでどのように仕事を頼めばよいか分かる。また、「お仕事お願いボード」は、各教員や学年からお願いしたい業務と、期限等をホワイトボードに記入し、書かれた内容をもとに教頭とSS、SSSで相談の上、業務量の調整や優先順位を決定し、業務に当たった。これらにより、職員からは「仕事を頼みやすくなった。」「業務の負担軽減につながっている。」等の声があり、一方のSS、SSSからは「仕事の見直しをもつことができるようになった。」「様々な仕事の依頼が増え、やりがいがある。」との意見をもらった。職員と教育業務支援員相互の相互利益の関係により、業務のカイゼンを目指した。

選や内容の見直し、準備の簡素化を進めるよう話し合った。その際、教師の働き方の負担軽減の一側面からだけでなく、生徒や保護者の立場に立って、目的は十分に達成されているか、保護者の理解を得られるかなど、互いの立場から見て相互利益の関係が構築されているかを確認しながら進めた。

今年度中に行事検討委員会で、十分に話し合いがなされ、職員会議で共通理解したため、来年度以降、スムーズに行事のスタートを切ることができると期待している。

3.9 生活ノートの廃止・時間割のデジタル化

担任は日々多くの仕事を抱えながらも更に生活ノートの朱書きにかなりの時間を費やしている。また、翌日の時間割を生活ノートに書く時間を短縮できないかとの声があり、生活ノートの廃止、時間割のデジタル化を図った。実施に当たっては、企画委員会や生徒指導委員会で、様式や回収方法、教師の仕事の効率化の側面だけでなく、生徒とのつながりをどう図っていくかなど、何度も話し合いを重ねながら進めた。こうしてできたのが、「月別生活振り返り表」である。生徒は日々の生活について終学活に振り返りを行い、コメント等を記入し、担任がチェック欄にチェックを入れ、翌日の終学活に返却する。また、時間割のデジタル化については、これまで連絡黒板の時間割を、生活ノートに写していたものを、担任が一人1台端末で写真に撮り、クラスルームにあげる形とした。今年度は3学期に試行し、評価、再検討を経て来年度実施につなげたい。今まで行っていた当たり前を見直し、新しい形でのコミュニケーションを実現していきたい。

○月生活振り返り表		氏名					家庭学習の時間	担任チェック☑
日	曜	主な行事	1 朝を守る	2 場を清める	3 礼を正す	4 今日の学級目標		
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								
9								
10								
11								

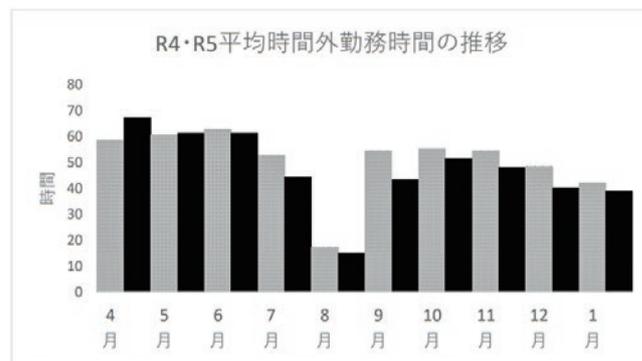
生活振り返り表

【視点4】評価・修正をする。

4 成果と課題

下のグラフは、令和4年度と令和5年度の超過勤務時間の平均をまとめたものである。一概には言えないが、各月において、前年度に比べて超過勤務時

間が改善されたことが分かる。



1年間の取組を通して感じたことは、上司から言われて無理やり退勤時間を早めるようなトップダウン方式の働き方改革では、働きがいも感じられなければ、職員の当事者意識も希薄なものとなる。何より働き手である自分自身が、働き方のくせや、超過勤務時間、ワークライフバランス等を意識することで、主体的に自分なりの働き方を変えようとしていくボトムアップ方式のカイゼンこそが重要だということである。また、「働き方カイゼン」という取組を通して、職員から「こんなことにチャレンジしてみてもどうでしょう」という提案や要望が生まれたり、「〇〇先生のような働き方を目指したい」といった雰囲気醸成されたりするなど、職員のモチベーションや当事者意識の向上等、予想外の効果を実感している。

また一方で、在校等の時間だけでなく、教職員としての働きがいを大切にした働き方改革を促していくこと、前例踏襲の考え方を変える必要があること、授業準備等のストックがない若手教員や、長年染みついたワークスタイルから脱却できない職員がいること、保護者や地域・社会に対する働き方改革への理解や協力を求める必要があること等も課題として見えてきた。

取組を始めた当初、「これまで染み付いたワークスタイルから脱却するのは難しいですよ。」と言っていた職員が、「時間を意識して働くようになりました。」と話してくれた。今後も「先生方の忙しいをあきらめない」をテーマに掲げ、各職員が自らの働き方を見つめ、働きがいを感じながら仕事に向かうことのできる環境づくりを目指していきたい。

地球規模の問題を多角的に捉え主体的に考えを深める子どもの育成

—学年で取り組む「気候変動」の学びの実践から—

富山市立堀川小学校 教諭 米原 史剛、横道 直、森田 みはる

1 はじめに

気候変動とは、気温及び気象パターンの長期的な変化を指す。持続可能な世界を目指すにあたり、環境問題の重要なテーマであり、SDGsの目標13では、「気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる」と設定された。気候変動は、子どもにとっても他人事ではなく、自分がくらししていく未来に地球を残すための重要な問題である。

気候変動について正しく理解し、地球規模の問題を多角的に捉え、主体的に考えを深める子どもの育成を目指して、第6学年92名に本実践を行った。

2 課題設定の理由

本校は、ユネスコスクール（2013年6月認証）である。ESDの推進拠点として子どもが持続可能な社会をつくっていく担い手として成長するために、気候変動問題について学びを深めていくことが重要であると考え。一方で、地球環境に対する子どもの意識は高くない。気候変動について学ぶにあたり地球環境についてアンケートを取った。

- ①私たちの地球環境はよくなっていると思うか。
- ②今後、地球環境はどうなっていくと思うか。
- ③地球環境を守るために取り組んでいることがあるか。

その結果、①の質問では、「よくなっているとは思わない」と答えた子どもが76%、②の質問では、「どちらともいえない」と答えた子どもが45%、③の質問では、「どちらともいえない」と考えた子どもが41%であった。

このことから、子どもたちは地球環境に問題を感じているが分からないことが多い。自分のくらしと地球環境のつながりを十分意識していないことがわかる。このような子どもたちであるからこそ、気候変動という地球規模の大きな問題を自分に関わる問題として引き寄せ、自分のくらしや生き方と関わらせながら考えを深めていくことを目指した。

3 単元目標及び単元構想

(1) 単元目標

- ① 気候変動問題について調べることを通して、気候変動は、単に地球の気温が上がるだけではなく、異常気象や海面上昇等、様々な被害を世界に与えているという問題があることや、SDGsの他の目標との関連があることを理解する。
- ② 気候変動の対策としてその原因である温室効果ガス排出量を減らすなどの「緩和」対策と、それでも被害が生じてしまう影響に対する「適応」対策の意義について考える。
- ③ 気候変動の対策について、地球規模・国際社会・地域における取り組み方や人間としての生き方について考え、自らの生活や行動に生かす構えをもつ。

(2) 単元構想

- ① 子どもたちは、これまで漠然と考えていた地球環境に危機感を感じ、気候変動の仕組みや影響、歴史、対策等、自分が関心をもったことについて調べ、事実を積み重ねていく。その過程で、これまでの人々の営みが気候変動を引き起こす主な原因となっていることに気付くだろう。
- ② 地球規模の問題に対して自分がどのように関わればよいのか悩む子どももいるだろう。そこで、子どもたちが調べて集めた事実やそれに基づいた考えを紹介し合い、気候変動に対するそれぞれの見方や考え方を広める。
- ③ 単元の後半では、SDGsの目標が互に関連していること、気候変動が現実に行き起きている様々な問題とつながっていること、科学的な気象データに基づいて考えていくことなど、多角的に問題を捉えていくことを効果的に学ぶ機会を設ける。専門的な立場の講師を招き、自分たちが考えきたことや悩みを聞いてもらい、助言を得るための「気候変動教室」を実施する。

4 実践内容と考察

(1) 学びの4本柱と評価基準の明確化

気候変動は、地球規模の大きな問題であり、学ぶ内容も多岐にわたると予想される。そこで、本単元における「学びの4本柱」と「評価規準」を下表のとおり明確にした。

学びの4本柱	メタ認知能力	情報収集・活用力	論理的思考力	学び続ける力
A 知ることを学ぶ	①問題や多様な価値に気付く	②必要な情報を取捨選択する	③原因と結果をつないで把握する	④知ることの喜びを感じる
B 為すことを学ぶ	①問題を自分事としてとらえる	②情報を活用し、発信する	③どのように取り組むかを考える	④納得できるまで問い続ける
C 人間として生きることを学ぶ	①自分を見つめ、みなおす	②倫理観をもって情報を取り扱う	③自他の相違を認識し、受け入れる	④仲間と協力して学ぶ
D 共に生きることを学ぶ	①地域・国際社会とのつながりをとらえる	②情報活用を通して他と交流する	③多様な視点から問題をとらえなおす	④人の見方や考え、文化・生物の多様性から学ぶ

縦軸の「学びの4本柱」は、ユネスコ「21世紀教育国際委員会」編、『秘められた宝』（1997）年から引用したものであり、文部科学省日本ユネスコ国内委員会発刊の『ユネスコスクールガイドブック』にも紹介されている。ユネスコスクールとしてユネスコが提唱する教育理念に基づく「学び」の研究実践をするには、「知ることを学ぶ」「為すことを学ぶ」「人間として生きることを学ぶ」「共に生きることを学ぶ」の4本柱が重要だと考えた。また、横軸には、「学びの4本柱」に応じた本単元の評価規準として、「メタ認知能力」「情報収集・活用力」「論理的思考力」「学び続ける力」を設定した。子どもが、地球問題を多角的に捉え、主体的に考えを深めていくためには、この4つの力が必要だと考えた。

以上のことを踏まえて、子どもたちがオンラインで自己評価できるフォームを作成・活用し、個と全体の学びの状況を把握しながら単元を実践した。

(2) 学びの状況に応じた支援・指導

1学期（7月）の自己評価では、「A 知ることを学ぶ」「D 共に生きることを学ぶ」の項目のスコアが高かった。一人ひとりが情報を集め、気候変動への理解を深めたり、仲間と意見を交流したりしたためだと考えられる。一方、「B 為すことを学ぶ」「C 人間として生きることを学ぶ」の項目のスコアが低かった。これは、気候変動に関する事実を集めるほど、規模の大きさを実感し、自分にできることが果たしてあるのかと悩む子どもが多かったためだと考えられる。

そこで、2学期は、SDGsの活動を第一線で続けるPECとやま（環境市民プラットフォームとやま）の堺勇人氏をゲストティーチャーとして迎え、「第1回気候変動教室」を行うことに

した。堺氏は様々な事例を示しながら、気候変動は規模の大きな問題ではあるが多様な側面から考えたり、つながりを意識して捉えたりすることが大切であることを示唆された。また、「第2回気候変動教室」の富山気象台の職員は、各種のデータに基づき、富山県の気象への影響を捉えることの重要性を示唆された。

2学期（12月）に行った自己評価では、下表の青の網掛け部分の項目のスコアが高い結果となった。

学びの4本柱	メタ認知能力	情報収集・活用力	論理的思考力	学び続ける力
A 知ることを学ぶ	①問題や多様な価値に気付く	②必要な情報を取捨選択する	③原因と結果をつないで把握する	④知ることの喜びを感じる
B 為すことを学ぶ	①問題を自分事としてとらえる	②情報を活用し、発信する	③どのように取り組むかを考える	④納得できるまで問い続ける
C 人間として生きることを学ぶ	①自分を見つめ、みなおす	②倫理観をもって情報を取り扱う	③自他の相違を認識し、受け入れる	④仲間と協力して学ぶ
D 共に生きることを学ぶ	①地域・国際社会とのつながりをとらえる	②情報活用を通して他と交流する	③多様な視点から問題をとらえなおす	④人の見方や考え、文化・生物の多様性から学ぶ

1学期の自己評価と比べると、「B-④納得できるまで問い続ける」「C-④仲間と協力して学ぶ」の項目のスコアが高くなっている。

子どもたちは、「第1回気候変動教室」を契機に、気候変動が地球規模の問題であることを再認識した上で、自分が納得できる取組になるよう進めたことがうかがえる。また、仲間と自分の考えを関わらせながら「気候変動に対する自分の考え」をもつことができたと言える。

また、「第2回気候変動教室」では、子どもは、気象と気候変動の関係性について、富山県の気温や降水量の変化を重視することの意義を学ぶことができた。気温や降水量の変化のグラフを見て、気候変動は確実に気象を変えていることを実感した。自分が住む地域の気象も気候変動によって変化していている事実気付いた子どもたちは、気候変動は、今まさに自分の身近に影響を及ぼしていると自分に引き寄せて捉え直したのである。

「気候変動の問題」は地球規模であり、ともすれば焦点を定めにくい問題となりがちである。だからこそ、評価規準を明確にし、子ども学びの状況を教師が的確に把握し、個と全体の学びに対する支援・指導に生かす必要がある。

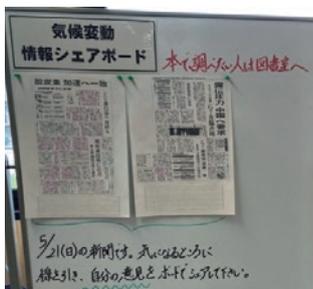
(3) 学年全体で取り組む気候変動の学び

学年全体で気候変動について学びを進めていくことで、自分と同じ意見をもったり、違う考え方をしたりする仲間がより多く存在し、それぞれの取組を比較したり、関わらせ合ったりすることで、新しい視点に気付いたり、自分の考えを広げたり

できる。

反面、学習に取り組むタイミングが学級によって異なったり、誰がどのような取組をしているかを互いに把握するのが難しかったりすることが課題となる。そこで、子どもが互いの情報を共有し合い、考えを交流できるよう、以下、3つの支援を行った。

① 気候変動情報シェアボードの活用



【気候変動情報シェアボード】

学年で取り組む「気候変動」の学びの支援の1つとして、気候変動情報シェアボードを設置した。これは、子どもの目に付きやすい

廊下にホワイトボードを設置し、教師が気候変動に関わる掲示物を貼ったり、子どもが意見を書いたりできるようにするものである。学びの環境として、この気候変動ボードを活用することで、学年全体に情報を共有したり、仲間に自分の意見を広めたりできる。

最初は、子どもたちへの話題提供のため、教師が気候変動に関わる新聞記事を掲示した。新聞記事の下には余白を作り、記事を読んで感じたことや考えたことを自由に書けるようにした。子どもたちに気候変動ボードを紹介すると、早速掲示されている記事を読み、自分の考えたことを書き始めた子どもがいた。

A児が着目したのは、2023年に札幌で開催されたG7環境大臣会合での自動車の脱炭素化への各国の取組内容に関する記事であった。A児は各国の取組内容を比較することで、国ごとに取組の内容にばらつきがあることに気付いた。これに対しA児は、「各国ごとに違う事情を抱えている。ばらつきがあっても世界がこのように一生懸命気候変動の解決に向けて取り組んでいる」という旨を記述し、各国の取組の違いを肯定的に受け止めていた。

一方、B児は掲示されたA児の考えを読んで「各国で取組に差があるのはおかしい。みんなが同じ目標に向かっていくべきではないか」と考え、その場にいたA児と気候変動に対する各国の取り組み方について議論になったのである。その場では、結論は出なかったが、その後A児は各国の気候変動対策について調べ始めた

のである。

気候変動に対して「それぞれが自分の目標をもって頑張ればよい」と考えるA児と「みんなが同じように頑張るべきだ」と考えるB児。学級も異なり、日頃はあまり関わりのない二人であるが、気候変動ボードを使って自分の意見を表現することで、二人の考えが自然と関わる場をつくることができた。

同じ記事を読み、違う考えをもった二人が主体的に考えを述べ合い、気候変動対策も様々な見方があり、気候変動を多角的に捉えるきっかけとなる有効な「気候変動情報シェアボード」の活用だったと考える。

② 共有フォルダの活用

子どもたちが学びを進めていく上でICT機器を活用し、子どもたち同士で情報を共有できるようにした。Chromebookを活用し、学年全体の「共有フォルダ」を作成した。



【共有フォルダ】

子どもたちは、それぞれに見つけた資料やホームページを共有フォルダに保存することで、学年全体で資料を共有することができた。また、共有フォルダには子どもたちが学びをまとめるために作成したスライドも保存できるようにした。共有フォルダには、どのChromebook（富山市から貸与されているPC）からもアクセスできるため、子どもたち同士が対話をするときに、いつでも自分の作成したスライドや保存した資料を取り出し、意見を述べ合うことができる。仲間の意見を聞いた子どもが、後にその意見を参考にしようとしたときにも仲間が作ったスライドや資料にアクセスすることができ、いつでも考えを振り返ることができる。

次に、学年全体で気候変動の学習用のclassroomを作成した。Classroomでは、全員が見ることができるチャット機能があり、その機能を活用し、仲間に呼びかけたいことを書いたり、自分の資料を貼り付けたりすることができる。

C児は、単元の提示では、気候変動は個人の力では対応できない問題だろうと考えていた。そのC児は、学びを進める中で「畜産が温室効果ガスであるメタンガスを多く排出している」ことを理解し、畜産によるメタンガスを減少させるため、代替肉である「大豆ミート」を普及させることが気候変動対策として有効であると考えた。そこで、C児は大豆ミートが学年の仲間にとどのくらい認知されているかを調べるためにGoogleフォームを使い、アンケートを作成し、それをclassroomのチャットで全員に呼びかけることでアンケートに協力してもらった。C児は、アンケートの結果をグラフにし、学年全員の大豆ミートの認知度の実態を捉え、自分の考えを次に進めることができた。

③ 学年で考えを交流する場の設定

「気候変動」に対する問題をみつけ、主体的に個の学びを重ねてきた子どもたちではあるが、自分の学びや取組を見直し、一層考えを深めていくために、学年合同で仲間の考えを聞き合う場を設けた。

大豆ミートに気候変動対策の有効性を見いだしていたC児は、畜産と気候変動の関係性を説明した上で、「気候変動を止めるために大豆ミートを普及させるべきである」と主張したところ、B児は「大豆ミートはまだ普及するか分からないから、意味のある対策にならないのではないかと疑問点を述べた。B児は、「みんなが継続することができる取組でなければ気候変動対策として有効ではない」と考えていたのである。そのようなB児に対して、C児は「流行らなくても、自分の取組を信じてこつこつ頑張っている人がいる。普及しようと頑張っている人がいるから普及するのだ。気候変動の対策も同じだ」と反論し、自分の主張を変えることはなかった。

次の個人学習でC児は、農業に関わる補助金について調べ始める。大豆ミートを普及させるためには生産する人が必要だろうと考えたC児は、これまで畜産をしていた人や新しく農業を始めたい人が大豆ミートを作るため、設備等にかかる資金が問題だと考えたのである。B児の話の聞き、努力すれば大豆ミートが普及すると考えていたC児だったが、現実的にどのような問題があるか考え始めたのである。

また、このようなB児とC児の議論を聞いていた子どもたちにも変化があった。気候変動対

策に意欲をもって取り組めていない自分を見直したいと思っていたD児は、学年交流での仲間の意見や取り組み方を聞きながら、効果は低くても自分が取り組み続けたいと思える対策から始めることが、気候変動問題への意識を絶やさないことにつながると考えた。

E児は、「緩和」対策と「適応」対策のバランスを取ることが、「気候変動」の対策を国内外で継続することにつながると気付いていった。そして、「効果が高いと思われる対策」に着眼していたF児やG児は、「継続可能な対策」を多くの人に取り組んでもらう市民レベルの工夫が必要だと考えることができた。

学年で考えを交流することで、個の学びが学年全体に広がり、それぞれの学びに作用する。学年全体で子どもたちが互いに考えを聞き合い、自分の考えと関わり合わせることは、新たな視点を与えたり、仲間の取組や学び方を参考に自分の取組への意欲につなげたりすることに有効に働く。

4 成果と課題

(1) 成果

① 機能的で形成的な評価による学びの深まり

学びの4本柱と評価基準の明確化を通して、「子どもによる自己評価」、「教師による評価」、「子ども同士による相互評価」を機能的で形成的な評価とし、子どもの学びの深まりを捉えることができた。

② 「気候変動」の全体像を捉える学び

本単元の実践では、体験的な活動を急ぐことなく、「気候変動」の全体像を捉えることを大事にした。子どもたちは、探究的な学びから「緩和」対策と「適応」対策があることを理解し、「気候変動教室」での科学的な学び、学年の仲間と見方や考え方を交流することでの学びを通して、地球規模の問題を多角的に捉えることができた。

(2) 課題

① 「気候変動」を取り巻く問題を科学的・社会的事象の観点から教材研究を深め、総合的な学習の時間、教科・領域での単元を構想・実践・評価、改善を行うといったカリキュラム・マネジメントを重視する。

② 子どもが「気候変動」を起因として起こる自然災害について一層理解を深め、ワークショップ等を通じて、地域と人々と協働して防災・減災に取り組む学びを実践する。

* 令和6年度教育実践研究論文助成一覧

【学校部門】

	団体名	代表		研究テーマ
1	富山市立大庄小学校	校長	西村 勇 嗣	学校経営方針の具現化
2	富山市立宮野小学校	校長	原田 郁 美	主体的・対話的に学び合う子供の育成を目指した全校体制の構築
3	富山市立保内小学校	校長	亀澤 誉	「こどもまんなか」の授業づくり
4	富山市立呉羽小学校	校長	堀 泰 洋	「新たな教師の学びの姿」の実現を目指す、教育クラウドを活用した授業研究の在り方の検討
5	富山市立池多小学校	校長	佐藤 尚 子	たくましく生きる 心豊かな子供の育成
6	富山市立奥田北小学校	校長	中山 隆 博	創意と活力に満ちた学校づくりを目指して
7	射水市立歌の森小学校	校長	高岡 陽 子	地域とともにあるコミュニティ・スクールを目指して
8	射水市立下村小学校	校長	萩 中 弘 恵	揺れ動く学校体制の中で、教師も子供も笑顔で過ごせる学校づくり
9	小矢部市立津沢小学校	校長	宮崎 靖	教育データを活用した目標達成度評価の充実による教員の参画意識と資質・能力の向上の効果
10	南砺市立上平小学校	校長	山田 由紀子	特別の支援を必要とする子供が、学校で安心して過ごせるようにするための体制や支援はどうあればよいか。
11	南砺市立井波小学校	校長	中町 寿 子	子供一人一人に応じた多様な学びの場と支援体制に係るシステムの構築
12	南砺市立福光中部小学校	校長	高田 公 美	子供主役の学校づくり
13	富山市立堀川中学校	校長	竹脇 孝 志	本校で検査・分析が可能な2つの無料心理テスト（アセス、そばセット）を活用した、教育相談体制の充実
14	富山市立上滝中学校	校長	北 嘉 昭	共に学び合い、生き生きと活動する学校づくり
15	富山市立八尾中学校	校長	横野 誉 子	コミュニティースクールの運営と働き方改革
16	射水市立射北中学校	校長	高信 智加子	主体的に学び、互いに認め、高め合う生徒の育成
17	射水市立小杉中学校	校長	京角 輝 彦	学校課題の解決に向けた組織体制の構築と組織運営の推進
18	射水市立小杉南中学校	校長	畑井 綾 乃	「地域の力を学校へ」地域とともに子供を育てる学校運営
19	砺波市立庄川中学校	校長	砂土居 良 江	学校規模を生かした効果的な学校運営を目指す取組
20	富山県立富山高等支援学校	校長	澤田 昌 子	生徒の自主的・実践的な態度の育成

【個人部門】

	所属名	職名	氏名	研究テーマ
1	射水市立大島小学校	教諭	海老澤 健一	真の「理科好きな子供」を育むためのアプローチ
2	富山市立奥田中学校	教頭	岡村 紀子	生徒の自治力を高める取組 ～奥中プライドを通して～
3	富山市立八尾中学校	教諭	江尻 小春	イエナプラン的教育をつなぐ
4	富山県立富山高等学校	教諭	猪又 健太	高校における教訓帰納の効果に関する教科横断的検討
5	富山県立南砺福野高等学校	教諭	安谷 佳浩	科学的見地に基づいた運動動作の指導理論の確立とその教材化

◇ 課題研究教育賞『優秀賞』

互いに関わり合い、主体的に学びを深めていく子供の育成

～理科「人や動物の体」模型を作り、自分の目で見て・触って体験的に学ぼう！の実践を通して～

滑川市立田中小学校 教諭 山 林 耕 大
(R5滑川市立西部小学校での実践)

1 課題設定の理由

本学級の子供は、自然の事物・現象から主体的に課題を見出したり、学ぶことに楽しさを感じたりする経験が乏しい。また、本実践の単元「人や動物の体」では、「すでに知ったつもりになっていること」が多いと想定されるため、子供たちの主体的な学ぶ姿勢につながりにくいと考えた。そこで、言葉だけの理解で終わるのではなく、調べ活動しながら子供自ら制作した模型や教師が制作した模型を使って学習を進めていく。模型を使って疑似的に体験しながら課題解決をすることで、知っているようで知らない体のつくりや面白さやその神秘さに気付くだろう。また、本学級の子供が得意としている関わり合う場を大切にすることで、それらの気付きをより価値あるものにし、主体的に学びを深めていく子供の育成につなげたいと考えた。

2 研究実践

(1) 関わり合いから生まれるさらなる課題意識

本単元の学習は、理科室にある人体模型を使いながら、教科書に書かれているような、自分たちでも知っている臓器とその働きについて調べることから始めた。

これまでの生活経験から、子供たちはある程度の臓器とその働きについては知っていた。また、一人一台端末を活用して、分からないことは容易に調べることができた。しかし、調べ活動が容易な反面、内容も理解しないまま、字面だけコピーし、分かったつもりになる児童がいると想定された。そこでこれらの活動はペアで行うこととした。そうすることで、自分の気付かない不思議さや疑問を見落とすことなく、課題として捉える児童が増えた。また、自分が分かったつもりになっていても、ペアがいることで、その「つもり」を明確な理解につなげようとさらに調べようとする児童の姿が見られた。

また、「模型を作って体感してみる」という活動では、子供自身が主体的に関わり合いながら学び合う姿勢が見られた。例えば腸の模型を作る際には、材料を使って作っていく子、腸の長さについて調べたことを伝える子、腸は大腸・小腸に分かれており、働きが異なることから、その働きについてまとめる子という風に学ぶ姿勢が見られた。関わり合う場が主体的な学びにつながることは間違いない。その関わり合う場を教師が意図的に仕組む場面もあれば、子供が自分たちの力で自然と関わろうとする場をあらかじめ想定した上で単元や授業を構想することが大切だと改めて感じた。

(2) 自らの手で学習教材をつくることで生まれる主体的に学ぶ姿勢と学ぶ意欲

本単元で使う人体模型等の学習教材は理科室に揃っているが、本実践の課題設定にもあるように、学習を進めながら教師も子供も一緒に人の体の臓器模型を作った。

始めは教師が作った肺の模型を子供に提示した。制作した肺の模型は、風船とホースを使うことで空気の出入りも分かるようにし、実際に膨らんだりしぼんだりするようにした。そのため、肺のつくりと働きについて調べて得た理解をより深めることができた。また、「どのようにして体の中で膨らんだりしぼんだりするのか調べたい」など、さらに追究したい課題を見出すことにつながった。肺や心臓の模型は100円ショップで揃えられるような簡単な材料で作成したため、自分にもできそうだと考えた子供が自ら作るなど、主体的に学ぶだけでなく、学習を楽しむ子供が増えた。

腸の模型は、人の腸の長さを調べた子供が、「肺の模型を作ったように、実際に腸の長さを体感してみたい」という意欲から、学級全員で制作した。模型を作るために、より正確に長さを調べたいと考えたり、実物により近付くように材料や作り方を工夫したいと考えたりする子が多く、主体的に、楽しく学ぶ姿が見られた。

心臓の模型では、ホース、水、ビーズを使って、血管、血液、酸素や二酸化炭素を再現した。心臓のポンプを押すたびに、水とビーズが流れる過程を直接目で見て体感することで、血液の流れや拍動について理解を深め、感動する子供の姿が多く見られた。

3 研究の成果

- ・人体の臓器模型を子供自ら作るという活動を取り入れたことで、言葉、写真、映像による理解よりもより深まった。また、調べる→作る→臓器の働きを再現してみるという過程の中で、疑問やさらに調べたいという意欲が生まれ、主体的な学びにつながった。
- ・模型を作り、触って体感してみる過程では自然と関わり合いが生まれた。その関わり合いと主体的に学ぶ姿勢が合わさったとき、子供たちは自分たちで学ぶ楽しさ・面白さに気付くことができた。

4 今後の課題

- ・子供たちの興味関心が高まり、主体的に学習したり調べたりすることで、指導内容の範囲を超えて学ぶ子供がいた。自由試行の場の工夫や単元構想を行う際に、子供の主体的に学ぶ姿勢は大切にしながらも、教師は指導と評価の一体化を意識し、子供の学びを明確に捉え、成長につなげられるように今後も実践を積み重ねていきたい。



【実際の長さを再現した腸の模型】

- 分かったこと
- ・酸素と二酸化炭素の交換の仕組みが分かった
 - ・肺が膨らむ仕組みが分かってきた
 - ・模型を作ると、教科書より立体感があって分かりやすかった
 - ・胃の模型を作って疑問などを解決したい



【肺の模型を使った学習の子供の振り返り】



【血液の流れ模型を使って関わり合う子供たち】

自己と他者との対話を通して考えを深め、思いを表現していく子供の育成

—国語科「すぐれた表現に着目して読み、物語のみりよくをまとめよう『大造じいさんとガン』』の実践を通して—

富山市立大広田小学校 教諭 太田 風 紗

1 課題設定の理由

本学級の子供たちは、国語科の物語文の学習で、教師の範読を聞きながら思ったことをその場でつぶやいたり、自分の経験と照らし合わせながら登場人物の気持ちに共感を示したりするなど、自分の思いを臆すことなく伝えようとする姿が多く見られる。その一方で、「○○のすごいところがすごいと思いました」と発言するなど、「すごい」という言葉を多用し、語彙力に乏しさを感じることも多くあった。また、長い物語文を読むのが苦手で、叙述から場面の様子や登場人物の気持ちを具体的に想像するのが難しいという子供も少なくない。

そこで、情景描写や豊かな色彩表現、場面の臨場感を高めるオノマトペなど、場面の様子や登場人物の気持ちを表す巧みな表現が、たくさん散りばめられている本教材文を読むことを通して、語彙を広げ、対話をしながら自分の思いを豊かに表現できるようになってほしいと願い、この研究課題を設定した。

2 研究実践

○ 学習の見通しをもちながら、学習意欲を継続していくための単元のゴールの設定

本単元では、子供たちが見通しをもって学習に取り組めるよう、単元の導入で「学習の予定」を提示した。子供たちに、「この物語をまだ読んだことがない4年生が、早く読んでみたいと思うような『大造じいさんのみりよく紹介カード』をつくろう」と投げかけ、みりよく紹介カードの見本を見せながら単元のゴールを伝えた。続けて、「4年生に物語の魅力伝えるには、まずは自分たちが物語の内容を詳しく知らないといけないうね。じっくり読んでいく中で、自分のお気に入りの部分を見つけていこう」と投げかけ、各場面の様子や登場人物の気持ちを深く読み取っていきながら、魅力を探っていくという学習の流れを説明した。このように、学習のゴールや流れを明確にしたことで、子供たちは、相手意識（誰のために）と目的意識（何のために）をもちながら、単元の終末まで学習意欲を継続させることができた。

○ 学び方を自己決定し、思いや考えを形成するためのワークシートの工夫

初発の感想を交流した際、大造じいさん・残雪・作者の表現の仕方等、子供によって関心を抱いている事柄が様々であった。そこで、各場面の読み取りを行う際、4色の付箋を用意し、関心を抱いた事柄に合わせて、考えを色分けして書けるようにした。加えて、子供たちが叙述を根拠にして考えを書けるようにするために、本文が書かれたワークシートを用意し、着目した叙述に線を引いたり、ワークシートの空いたスペースに考えを書いた付箋を貼ったりできるように工夫した。全場面で同じように、付箋を使用した書き込みをさせたことで、自分の考えをまとめるのが苦手な子供も、様々な叙述を根拠にしながら自分の考えを表現できるようになった。

また、長い文章を読むのが苦手で、物語の全体像や登場人物の心情の変化、登場人物同士の関係の変容等をイメージするのが難しいという本学級の子供たちの特性を考慮し、各場面で読み取ったことを図で表し、可視化して捉えやすくするためのワークシートも用意した。登場人物の気持ちの変化を0～5段階でシールを貼って表す「気持ちメーター」、登場人物の複雑な心情を図で表す「気持ち円グラフ」、複数の登場人物の関係を絵や矢印を使って表す「人物関係図」という、3種類のワークシートを用意し、使いやすくと思いうワークシートを3種類の中から子供たちが自分で選択した。自分に合ったワークシートを選択することが学習への満足感を高め、普段はワークシートを書くのが苦手だということも、「これなら分かりやすい」「楽しい」と言った前向きな反応を見せていた。中でも驚いたのは、「大造じいさんの心の変化だけじゃなくて、残雪の心の変化も描きたい」「文章の前半と後半、両方の登場人物の関係図を描いて比べてみたい」など、自分で図をアレンジして表現したいという子供や、叙述と自分が書いた図を線で結び、根拠を明確に示しながら表現する子供がいたことである。自分でワークシートを選んで書くという活動は、子供たちにとって初めての経験だったが、友達のワークシートと見比べながら考えを交流するにつれて、自分の考えに、より説得力をもたせて分かりやすく書こうと工夫する主体的な子供の姿が見られた。

○ 「みりよく紹介カード」とICTを活用した4年生への「みりよく紹介発表会」

先に記述した付箋の色と同じように、「みりよく紹介カード」も4色に分けて用意した。子供たちは、学習を通して愛着をもった登場人物や情景描写等の表現を選び、物語の魅力について、大造じいさんの「負けず嫌いで努力を惜しまないところ」や残雪「仲間を一つも見捨てない仲間思いなところ」、作者の「情景描写で登場人物の気持ちを表現したり、続きが気になる終わり方をして読者の想像を広げようとしたところ」などと表現し、一人一人が自分の考えた魅力にぴったりの言葉を挙げ、「みりよく紹介カード」を書くことができた。加えて、「みりよく紹介カード」を書き終えた際、ある子供の「4年生に伝えるとき、登場人物やあらすじなど、基本的な情報がないと魅力が伝わらない」という発言をきっかけに、Chromebookのスライドで「登場人物とあらすじの紹介プレゼン」もつくることになった。4年生のために長い文章を要約するという活動も、子供たちにとってよい経験になった。これまでの学習で各場面の様子や登場人物の気持ちにじっくり向き合ってきた子供たちは、進んで何枚もの「みりよく紹介カード」を書いたり、大事な要素を選びながらあらすじを書いたりする姿が見られた。そして、「みりよく紹介発表会」当日、一人一人が責任をもって、同じ出席番号の人にあらすじや魅力を説明することができた。4年生の子供から、「物語の魅力がよく分かった。早く5年生になって学習したい」という声を聞いたり、Chromebookのフォームでのアンケートで、「今年、図書室で借りて読んでみたい」という回答をもらったりしたことは、子供たちの学習への達成感を高めた。

3 研究の成果

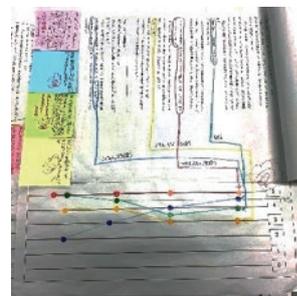
4年生に物語の魅力を紹介するという単元のゴールの設定や、自分でワークシートを選択して行う一人読みは、学習意欲の継続と主体的な学びにつながり、一人一人が自分の考えを形成し、自信をもって話合いに臨むことができた。さらに、4色の付箋の活用や、話合いでの多様な考えの交流を通して、様々な観点から題材と向き合うことができ、学びを深めることができた。

4 今後の課題

子供たちが、ワークシートに描き表した図を実物投影機で映して説明する場面が何度か設けたが、どのように話合いに活用すればよいか分からない子が多く、個人で考えを深められていても、それを全体に十分共有することができなかった。話合いでの活用の仕方をあらかじめ示しておく必要があった。



【みりよく紹介カードの見本】



【付箋と「気持ちメーター」を貼ったワークシート】



【人物関係図」と「気持ち円グラフ】



【4年生に魅力を紹介する様子】

課題解決に向けて、主体的に考え、行動する子供の育成

—第4学年総合的な学習の時間「藤ノ木つながり大作戦～広げよう なかよしの輪～」の実践から—

富山市立藤ノ木小学校 教諭 松倉実希

1 課題設定の理由

本学級の子供たちは、友達の意見を大切にしており、自分とは違う考えも肯定的に捉えている。「元気・なかよし・協力」という学級目標の下、みんなで一緒に遊んだり、一つのことを協力しながらやり遂げたりする力が高まってきた。本単元では、校区内にある視覚総合支援学校に通う、全盲や弱視等の困難を抱える子供たちと交流を図り、集会を行う。集会の内容を決める際には、相手の心境に寄り添いながら話し合う必要がある。本単元を通して、自分たちとは異なる困難さを持ちながら生活する人たちへの思いやりの心を育むことや、友達の意見に同調するだけでなく、調べ学習で得た知識を生かして自分で工夫したり、主体的に活動を進めたりすることを期待してこの課題を設定した。

2 研究実践

本単元は、視覚総合支援学校の4人と「なかよし」になることをゴールとして、①視覚障害についての調べ学習、②校内学習発表会の見合い、③meet交流、④交流集会という単元構想で進めた。現段階では、meet交流まで済んでおり、交流集会の準備を進めている。これから、単元前には見られなかった子供の変容を3つ紹介する。

(1) 「目が見える見えないに関係なく楽しく！」という願いをもちながら、自分の体験をもとに今後の活動について語るA児

A児は物静かで、休み時間は読書をしたり絵を描いたりして少人数で過ごすことが多い。以前、「大きな声を出せないからみんなの前で発表するのは苦手」と教師に話していた。A児の変容が見られたのは交流集会で行う「4-2も視覚総合支援学校の4人も楽しめるゲーム」の内容を決める話合いである。話合いの前時に、2つの候補を試した。それを生かして、学級の子供たちは「簡単だったからよい」「待ち時間が長いからよくない」といったゲームのルール等に関する発言をしていた。話合いの中盤に、A児が「私は、大きい声を出すのが苦手で、このゲームは大きい声で言わないと周りの人に気付いてもらえなかったから、片方の耳が聞こえにくい〇〇君は不利になってしまう」と発言した。この発言をきっかけに、交流する相手にとってどうかという視点で話合いが進められるようになった。自分の苦手なことを乗り越えて、交流相手のことを思いやる発言をするA児の姿が見られた。

(2) 交流で感じたことを日常生活に生かすB児

B児は、「誰も嫌な思いをしない」ことが「なかよし」だと考えている。視覚総合支援学校との交流を重ねていくうちに、全盲、弱視とまとめられているが、見え方には個人差があることや、自分と同じように得手不得手があることに気付いた。交流集会のゲームを決める際には、交流する相手一人一人のことを思い、全員が楽しめるゲームを考えた。また、学級でのトラブルについての話合いをした際、トラブルのきっかけになった他クラスのD児の行動に対して「言いたいことがあるなら言葉で話せばいいのに」という不満を話す子供がいた。その中で、B児は「言葉で伝えることが苦手な子もいるから、私たちが理由を聞いたり、優しく接したりするのがいいと思う」と話した。相手を理解し、寄り添おうとする姿が総合的な学習の時間以外にも見られた。

(3) 相手の立場に立って、活動を工夫するC児

C児は、大きな声で挨拶をしたり、誰とでも仲良くしたりする子供である。しかし、友達と意見が違ったときには、自分の意見を友達に言えない消極的な一面もある。C児の変容が見られたのは、4人を藤ノ木小学校の校内学習発表会に招待するために準備を進めていたときである。C児を含む3人は、出入口等の看板や校内地図をつくっていた。完成したものを担任に見せに来たとき、「もうできることは全部やった？」と聞くと、C児以外の2人は「やった」と答えた。しかしC児は、看板について「体育館とかの目印になる看板だけではなく、『ようこそ藤ノ木小学校へ』というのをつくると、より安心喜んでくれると思う」と話した。また、校内地図について他の2人が、面倒くさいと乗り気でなくても、「ここはマジック書きした方が見やすくいいと思う、やろう！」とさらに工夫をしていた。交流相手に喜んでもらってなかよくなりたいたいという思いから、活動を工夫するC児の姿が見られた。

3 研究の成果

- ・単元のゴールは、視覚総合支援学校小学部に通う4人と「なかよし」になることだということを学級で共通認識したことで、子供たちの活動や話合いに一貫性が生まれた。
- ・交流相手の自分と似ていたり共感できたりする部分を見付けることや、活動や交流相手のことが分かる掲示を工夫することで深みのある発言になった。
- ・疑似体験等の活動が充実すれば、多くの子供たちが根拠のある発言ができるようになり、その後の行動力につながった。
- ・子供たちの実態に合った題材を選択することで、子供たち主体で活動を進めたり、工夫を重ねたりすることができた。

4 今後の課題

子供一人一人が追究課題をもち、様々な方法で解決に向かったため、子供の思考や活動を読み取り切れない部分があった。教師が子供たちと対話したり活動をよく見たりして、児童理解をさらに深める必要がある。



(サウンドテーブルテニスを体験する子供たち)



(「ようこそ藤ノ木小学校へ」の看板を作ったC児たち)

きき合うことを通して、学ぶ楽しさを味わうことのできる授業を目指して

富山市立水橋中部小学校 教諭 小澤 麻裕
(R5富山市立奥田小学校での実践)

1 課題設定の理由

4月、本学級の子供たちと出会い、一人で課題にじっくりと向き合い自分の考えをつくり出すことが得意な子供たちであると感じた。しかし、考えを仲間と共有する場面になると、自分が話したことに満足して、仲間の話を聴かない様子があった。また、仲間の考えに対する反応が少ないため、子供同士のやり取りから考えを深めることが難しかった。友達の多様な考えに触れ、自分の考えを広めたり深めたりすることは、学級で学ぶことの意義の一つであると考えた。そこで、仲間と考えをきき合うことを通して、自分の考えが広がる、深まる、確かになるという仲間と学ぶ楽しさを味わってほしいと考え、課題を設定した。

2 研究実践

仲間と学ぶ土台づくり



①きき合いにおけるよい姿を明確に示す

きき合いにおけるよい姿を明確に示すため、右の図を学級に掲示し、子供たちと共有した。現在の自分の話のきき方は何レベルかを問うと「レベル1のことがよくある」という正直な声が聞かれた。これからは仲間の話に質問したり、反応したり、もう一度考え直したりして、きき合い名人を目指していこうと声かけをした。また、そのような子供の姿を、その都度認める声かけをした。



【きき合い名人レベル表】

②考えをきき合う場面を多く取り入れる

様々な教科を通して、仲間と考えをきき合う場面を多く取り入れてきた。右の写真は、算数科と学級会で考えをきき合う様子である。きき合いを何度も行ううちに「〇〇さんの考えが頭の中に入った」「同じ考えだね」「それ分かりやすい」等の声が聞かれ、多様な友達の考えに出会えたことを喜ぶ姿が見られるようになった。友達と一対一でのきき合いの場面を増やすと、学級全体に向けて話すことに難しさを感じている子供も自分の考えを、相手を替えて何度も話せるようになった。



【考えをきき合う子供】

国語科 読んで考えたことをきき合おう「どうぶつ園のじゅうい」の実践



「話す・聞く」言語活動を通してきき合いを多く取り入れられる教科として、国語科に力を入れて実践してきた。本単元の前に学習した「たんぼぼのちえ」では叙述から離れて語る子供の姿が見られ、根拠のないきき合いになったときに子供たちのきき合いを楽しむ気持ちがしぼんでいくように感じた。叙述を基に語り、納得感や説得力のあるきき合いにすることで、子供たちがきき合いを楽しむ姿につながると考え、以下のような手立てを講じた。

①単元の導入で目当てを明確に伝える

本単元の一時間目に「読んで考えたことをきき合おう」という単元名について考える時間を設定した。まず、「読んで考える」ということは、「言葉（叙述）から考えることである」と子供たちと確認した。次に「きき合おう」とはどういうことかと子供たちに尋ねると「自分の考えを話すこと」「友達の考えをよくきくこと」「自分の中に考えが増えていくこと」等の考えが聞かれた。これらの子供たちの考えから「言葉に気を付けて、友達に考えを話したりよくきいたりして、自分の中にいろんな考えを増やしていこう」と、単元の目標を子供たちと共有した。

②気になった叙述に線を引いたり付箋を貼ったりする

考えたことを話す際に叙述と結び付けて語る事ができるように、ペアと自分が気になった言葉や文に線を引きながら話したり、きき合いをした上で友達ともっと語り合いたいと思った言葉や文を選んで、教室の本文拡大掲示に付箋を貼ったりした。



【叙述に線を引いたり付箋を付けた子供】

①②のような手立ての結果、右のような姿が見られるようになった。3人は「そっと」という叙述から獣医がいのししのお腹にどのように機械を当てたのかを想像し、「そっと」という言葉と類似した意味の「ゆっくり」という言葉や、「素早く」「強く」という反対の意味を表す言葉を挙げてきき合っていた。他にも、「そっと」という言葉の意味を、ペアの仲間のお腹を実際に触りながら「このくらいの強さかな」と話す様子も見られた。このように、叙述から想像したり、仲間の考えを聴いて反応したり質問したりして、叙述を基に考え、きき合おうとする姿が見られるようになった。

- A児：そっと機械を当てないと、いのししがびっくりしちゃうからそっと当てたんだと思う。
B児：そっと当てないと、素早く当てたり強く当てたりしたらだめ。
C児：そっと、ゆっくり当てたってこと。

【授業記録より】

3 研究の成果

右は、友達の話をじっくりきくことに難しさを感じていたD児の振り返りの記述である。何度もきき合う経験を積み重ねる中で、少しずつ友達の考えをきいてもう一度自分で考え直し、話せるようになってきた。上記のような実践を行い、D児のように、「きき合うことで自分の考えが広がった、深まった、確かになった」ということを実感する子供が増え、振り返りにもそのような記述が増えてきた。

EさんとFさんが「これでようやく長い一日が終わります」という一文は、二段落から八段落までの獣医の仕事全部まとめているから「ようやく」と書いてあると言っていて、たしかにと思った。

【D児の振り返り】

4 今後の課題

今後もきき合いを続け、仲間と関わり合いながら学ぶ楽しさを味わうことのできる支援をしていきたい。

図画工作科の学習を通して、造形的な見方や感じ方を深め、豊かに仲間と関わる子供の育成

－第4学年図画工作科「かべに描こう」の実践から－

富山市立堀川小学校 教諭 長谷川 仁 義

1 課題設定の理由

本学級の子供たちは、下学年までの造形活動を通して、自分なりの形や色に対する見方や表現の技能を耕してきている。4年生となり、形や色の組み合わせや重なり、それらがもつ感じやイメージを感じ取り始めている。また、学級の仲間との関係に自身の拠り所を求め始めている。このような子供たちが、図画工作科の学習を通して、形や色への造形的な見方や感じ方を深めながら、互いが活きる豊かな関係について考え、実践する姿を願い、本課題を設定した。

2 研究実践 ー第4学年図画工作科「かべに描こう」ー

(1) 子供たちが描くことの楽しさを味わうことのできる場と材料の設定

本題材では、子供たちが体全体を思い切り使いながら、何度もつくりかえる活動の楽しさを味わったり、仲間と豊かに関わる姿が見られたりすることを願い、アイボリー色に塗ったベニヤ板を14枚貼り合わせた2m×14mの壁面と、水に落ちず滲まない合成樹脂塗料を画材として子供たちに提示した。

壁面に会った子供たちは、端から端まで走ったり、手を伸ばして高さを実感したりした後、「バシャーんと絵の具をかけた」「4年3組皆の個性で埋め尽くす」等と話し、壁に描くことへの意欲を高めた。S児は題材の中盤まで、ベニヤ板1枚分のスペースを使い、抽象的な絵を何度も描き重ねていった。色同士の調和や、丸い形や立った壁面ならではの垂らした形、手や指、足を使う描き方等、様々に工夫を凝らしながら描き、体全体で活動を楽しんだ。このように、広くて立った壁面と、何度も塗り重ねられる合成樹脂塗料を設定することで、子供たちはそれぞれに自分らしく描くことの楽しさを味わうことができた。

(2) 仲間との関わりの中で造形的な見方や感じ方を深める子供

描くことの楽しさを味わう中で自分らしい表現を求めていた子供たちだったが、題材の終盤、ベニヤ板一枚ずつに絵が描かれている状態に違和感を抱いたF児が「みんなの絵が板に閉じ込められているように見えるから、その仕切り線をなくしたい」と仲間投げかけた。そこから、互いの納得を求めながら板の仕切りをなくそうと、形を広げたり重ねたり、残したりして活動する子供たちの姿が見られた。そのような中でM児は、仲間と描いた黒い背景に虹色の鳥を描いていたが、背景が海のような水色変わったことで、虹色の鳥を赤色に描きかえ、さらに橙色へと描きかえた。そのことについてM児は、仲間と話し合う中で「自分が描いた鳥も目立たせたいけれど、SさんやSRさん、Yさんが描いた背景の海も目立たせたいから、鳥を赤色に塗った後にオレンジ色にした」と話した。M児は自分の鳥を目立たせるために、虹色ではぼやけて見えた鳥を赤く塗った後、仲間の背景の水色も目立たせようと、鳥の赤色に黄色を加え、水色の補色である橙色に塗りかえたのだ。M児はさらに「この色は一人では発想できなかったけれど、仲間と描いていたから発想できたと思う」と話した。仲間と共に描く活動の中で、仲間も自分も大切にしたいという思いを強めたM児だからこそ、補色の色を導き出したのだと考える。このように、子供たちは仲間との豊かな関わりから、自分を表現する際の形や色に対する造形的な見方や感じ方を深めることができた。



【子供たちへ提示してすぐの壁の様子】



【何度も描き重ね、工夫を凝らして楽しむS児】



【仕切りが見えなくなった題材終盤の壁の様子】



【M児の描いた橙色の鳥】

3 研究の成果

- ・ 広さのあるキャンバスと、何度も塗り重ねられる画材を設定することで、子供たちは活動の楽しさを味わうことができる。
- ・ 4年生という発達の段階で仲間と共に作品をつくる活動に取り組む中で、仲間との関わりと造形的な見方や感じ方は相互に影響し合いながら深まっていくということが分かった。

4 今後の課題

- ・ 活動中に考えを聞き合う時間を設けたり、ICTを利用して視覚的に捉えやすいようにしたりするなどの支援が必要だと感じた。

問題解決を通して、エネルギーの性質に迫ろうとする子供の育成

－第3学年理科「音がつたわる～〇〇電話～」の実践から－

富山市立堀川小学校 教諭 太田 聖久

1 課題設定の理由

汗をかきながら掲示物を貼る担任の姿を見た子供が「サウナと一緒に、教室の上も熱くなるんだよ。まるで『アツアツ星人』が潜んでいるみたいだね」とつぶやいた。熱やその動きを、直感的に捉えていたのである。エネルギーは、目に見えないからこそ、それによって起きる現象に不思議さやおもしろさを感じると考える。エネルギーの本質に触れながら、一人ひとりが自分の取組を基に、その性質に迫ろうとする子供の姿を願い、本課題を設定して実践に取り組んだ。

2 研究実践

「音がつたわる～〇〇電話～」の実践では、子供が作り出す「〇〇電話」をきっかけに、一人ひとりが音の伝わる仕組みや性質について迫っていく姿を期待した。

①子供が自分の問題をもつための教材提示

単元の導入では、子供一人ひとりが糸電話を体験したあと、単元名「音がつたわる～〇〇電話～」を提示し、自分で考えた電話を基に学習を進めることを教師から伝えた。その後の学習では、子供たちは自分で材料を用意して様々な電話を作って試行した。以下は、その一例である。

Aさん



名前：いろいろ電話
問題：どのような物でも音は伝わるのか

Bさん



名前：長電話
問題：音が伝わる距離には限界があるのか

Cさん



名前：ふたまた電話
問題：音はどのように伝わるのか

Dさん



名前：録音電話
問題：音を溜めることはできるのか

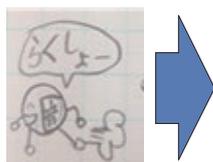
Aさんは、毛糸や針金等、様々な材料で音が伝わるか試した。Bさんは、音が伝わる距離に着目し、100m以上の長さの糸電話を試した。Cさんは、音の伝わり方を調べるために、二股に分かれた電話を試した。Dさんは、音を溜めたいと考え、筒の先に袋を付けた。子供が疑問に感じたことや試してみたいと思ったことを実現できる環境を整えたことで、自分の問題をもって学習を歩み始めていった。

②音への見方を深めることにつながる「考えの具体化」

学習を重ねる中で、その子らしい音への見方が生まれてきた。ふり返りでは、音をどのように捉えているのか絵で表すように助言することで、自分の音への見方を自覚できるようにした。以下は、第2次後半での話合いの抜粋である。

Eさん

音の速さを測ると100mを1秒くらいで移動していることが分かって驚いた。音は、ボルトより速い陸上選手のようなものだと考えている。



Fさん

水中より空気中の方がブザーが大きく聞こえた。空気が音を運んでくれているのだと考えた。Eさんとは少し違って、音は、自力では動けないものなのかもしれない。

Eさんは、筒の先にアルミホイルを貼り、反対側から声を出すとアルミホイルが振動したことから、口から出た音がアルミホイルまで移動して衝突していると仮説を立てた。音に速さがあることを証明することができたら、それは音が動いていることの証拠となると考えたEさんは、グラウンドで音が相手に届く時間差を計測した。長距離では音の届く時間に有意な差があることが分かり、音に速さがあることを突き止めたEさんは、音を足の速い陸上選手のような存在であると捉えた。その考えを聞いたFさんは、これまでの学習で得られた事実を基に、Eさんの考えと関わらせながら音の伝わり方への見方を更に深めている。Eさんが捉えている音のイメージが具体化されたことで、学級全体として音への見方が見直される契機となった。

3 研究の成果

- ・ 子供が試したいことを実現できる環境を保証することで、一人ひとりが自分の問題をもち、その子らしい見方をはたかせながら音に対して関わろうとする姿が生まれる。
- ・ 現象に対する考えを絵で具体化することで、その子のもつエネルギーへの見方が顕在化し、自分の思考の整理や、エネルギーへの理解の見直しの契機となる。

4 今後の課題

- ・ 見えない事象を対象としているからこそ、子供の考えの具体化が必要になってくる。事象を擬人的に表現するだけでなく、数値化等、子供に合った方法で考えの具体化を図っていきたい。

聴き合いを通して自ら課題を見付け、主体的に学ぶ子供の育成

—理科 メダカFamily～生命のつながりを生む環境をつくろう～の実践から—

富山市立新保小学校 教諭 小澤 昭 吾

1 課題設定の理由

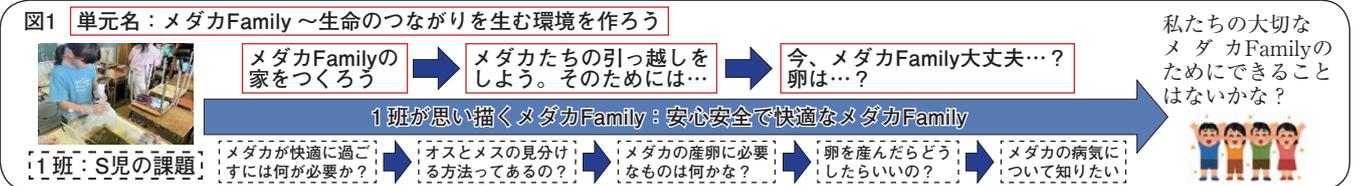
本学級の子供たち（5年生）は、自分の思いや考えを素直に表現できることが強みである。そんな子供たちが、日々学習を共にする仲間との対話（聴き合い）を通して自分が本来もっている探究心に気付き、一人一人が自ら見付けた課題に向かって問題解決していく、主体的に学ぶ姿を期待して本課題を設定した。

2 研究実践

(1) 聴き合いを通して、自分の課題を見付けるための支援

(ア) 聴き合いが生きる魅力ある教材選びと単元構想（図1）

各グループに水槽を一つずつ配り、メダカが産卵し命のつながりが生まれるような環境（メダカFamily）をグループで作ることを単元のゴールとした。生命の誕生は神秘的で感動的であり、子供たちの興味・関心は自然と高くなった。毎時間それぞれが思い描く「メダカFamily」をグループですり合わせながら、自分の課題を見付けて学習する子供の姿が見られた。



(イ) Chromebookの情報共有ツールの活用

グループの仲間が何を課題としていて、どのような学びをしているのかグループで聴き合えるようにJamboardを活用した。友達の学びから新たな課題を見付けたり、自分の課題を解決するヒントにしたりする姿が見られた。

(ウ) 聴き合うことよさを感じる学級づくり

毎朝3分間のグループトークを行った。「夏と冬、どっちが好き？」「最近のアニメについて」など子供たちが興味をもったテーマを設定した。最後にグループトークで話したことを学級で共有した。表現が苦手な子供でも笑ったり悩んだりしながら仲間と語り合い、聴き合う経験を積むことができた。聴き合う時間が「楽しい」と感じる子供が増えた。

(2) 聴き合いが主体的な問題解決（学び）に向かっていく学習サイクル（図2）

本実践では「メダカFamily」というゴールを定めただけで、子供たちの学び方や学ぶ過程は様々であった。学習のルールとして、以下の4つを定め、班の仲間と繰り返し対話（聴き合い）を行いながら学び続けるサイクルを子供自身で作る姿を期待した。

- ①班の願いや思いを大切にする
- ②私の???（知りたい、やりたい）をもって取り組もう
- ③学び方を選ぼう、決めよう、考えよう
- ④班の仲間と情報共有しよう

以下、子供の学習する様子や対話から考察する。

1班：安心安全で快適なFamily

メダカを水槽に移そうとする子供たち

S児：急に水に入ると驚いて死んでしまうことがあるみたい！水に慣れさせないと

Y児：でも、どうやって慣れさせたらいい？

S児：ナイロン袋に入れて少しおいておくんだって！

Y児：へえ！じゃ先生からもらってきてやってみよう！

T児：温度も大切らしいよ！ちょっと水温が低いから暖かいペットボトルも入れて暖めよう！

産卵しやすい場所を検討する子供たち

S児：卵を産んで欲しいね！メダカの産卵場所として水草が必要なんだって！

Y児：先生が用意してくれた水草がいらしい

H児：産卵部屋を作ったら？

T児：卵がつきやすい産卵床っていうのがあるらしいよ！

H児：それって買うの？

T児：いや！作れるらしいよ！

S児：じゃ、手作りでそれを作ってみよう！次の時間に材料をもってくる！

上記の班は、S児の発言（__部）をきっかけにT児は水温・産卵床について（__部）、Y児は水草について（__部）、情報提供して水槽をよりよくしようと活動している。子供たちは活動の中で次々と現れる問題を1つずつ班の仲間と対話を通して解決している。聴き合いを通して班の願いに向かって主体的に問題解決（学び）に向かうことができていると考えた。



3 研究の成果

- ・魅力ある教材や単元構想で学習する子供たちは自然と対話（聴き合い）を求め、自らの興味・関心に向かって課題を見付け、主体的に学ぶことができる。
- ・一貫した共通の願いや思いをもった対話（聴き合い）を基盤にした学習サイクルは、子供たち自身で次々と課題を見付け、問題を解決する力を養うことに効果的である。

4 今後の課題

本単元は聴き合いを基盤とした単元構想が比較的容易であった。今後は他教科、他単元でも子供にゆだね、子供が自身で課題を見付け、主体的に学べるような教材研究に努めていく。

子供一人一人が自分に合った学習方法を選択し、考え表現することが楽しいと感じられる学習展開や支援の工夫 ～第1学年 国語科「いきものをしょうかいしようーしらせたいな、見せたいなー」の実践から～

富山市立芝園小学校 教諭 窪田裕子

1 課題設定の理由

本学級の子供たちは動植物が大好きで、生活科の学習では、あさがおの様子を様々な視点から観察し、継続的に日記に記録してきた。前回の観察時からの変化について書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりすることが少しずつできるようになってきている。しかし、相手に分かりやすく伝える表現になるように、意識して文章を書くことは難しい。そこで、国語科の学習で「お気に入りの生き物を家族に紹介する文章を書く」というゴールを設定し、友達との関わり合いを通して、自分が伝えたいことを分かりやすく文に表す方法を学び、表現することを楽しむ姿を期待し、本単元を設定した。

2 研究実践

(1) 見通しをもって学習を進めるための単元構想

「相手に伝わるように書きたい」という目的意識を高める必要があると考えた。そこで、単元の前半に、本学級のクマのマスコット「さんちゃん」が離れて暮らす祖父に、学校で飼育している合鴨のグミについて知らせる文章を書く活動を一齐指導で行った。その際に、観察の観点を出し合い、書きたいことを短い言葉でメモしてから文に表す過程を経験した。文章表現に苦手意識をもつ子供にとっては「この手順なら、書けそう」という見通しをもつために効果的であり、「自分もお気に入りの生き物を家族に伝えたい」という願いをもって、主体的に学びを進めることができた。

(2) 実態に合わせて行き来できる学習展開や場の充実

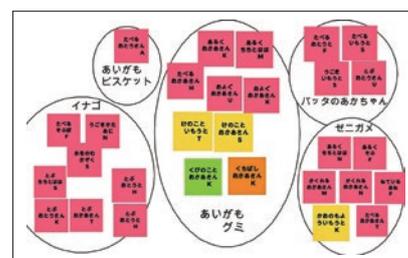
自分のペースで様々な視点から生き物の情報を集め、その情報を的確に文に表してほしいと考えた。そこで、実物を観察したり、写真や動画で撮影したものを一人1台端末でいつでも見たりすることができるように、選んだ生き物の特徴をとらえ、その情報を収集しやすい場づくりを工夫した。その結果、伝えたいことを詳しく書くために、よく観察して情報収集する習慣が身に付いた。一方で、情報過多で困っているK児には「メモ（情報収集）→短冊カードに文→文の修正や並べ替え（整理・分析）→清書（まとめ・表現）」の学習過程の行き来を促し、「一番伝えたいことが詳しく分かる文になっているか」という視点をもつことができるように支援を行った。それにより、自分の修正点を見付け、メモを見返しながら文を増やしたり、生き物を観察しながら様子を詳しくする工夫を加えたりして、自分で学びを進めようとする姿が見られた。



【K児のJamboardメモ】

(3) 子供同士の自然な関わり合いを促す「学びの可視化」

子供同士が目的意識をもって仲間と関わってほしいと考え、「誰が、誰に、どの生き物のどんな様子」を伝えようとしているのかを、学級で電子ホワイトボードアプリケーションを活用し、共有した。それによって、同じ生き物を選んだ友達同士で相談し合ったり、伝えたいことが同じ友達同士で文を比べたりする自然な関わり合いが生まれた。それによって、子供たちの間で、互いの表現の面白さに気付いたりしながら、よりよい文章を書こうとする姿が見られた。なかなか友達と関わるのが難しい子供には、教師が目的の同じ子供同士をつなぐ支援をすることで、友達の表現方法から学ぶという「学び方」を、習得する機会となった。また終末には、書いた文章を読み合い、感想を交流する場を設けたことで、試行錯誤しながら書いた文章が友達や家族に認められる達成感を味わうこともできた。



【伝えたい相手と伝えたい生き物の様子】

3 研究の成果

- ・子供の実態や思いに応じて学習過程を選べるように工夫することで、一人一人が自分らしい視点で観察しながら情報を集め、表したいことを様子が分かるように工夫をしながら文章表現に生かすことができた。
- ・学習方法や学習形態を自由に行き来しながら選択できるようにしたことで、子供自身が自分の課題をもって学習に取り組んだり、目的をもって友達と関わったりする姿が見られた。

4 今後の課題

本単元では、どの生き物のどんな様子を伝えたいかの目的を決めてから学習をスタートしたが、生き物の観察を繰り返すうち、視点の広がりや深まりによって、伝えたい内容が変わっていく子供も多々いた。子供の観察力の鋭さや着眼点のよさに驚くと同時にその時々で子供の願いに合った支援を行う難しさを実感した。今後はより柔軟な学習展開を意識し、子供それぞれの必要感にあった支援の工夫をしていきたい。

子供一人一人が課題意識をもつとともに、子供同士が学び合い、考えを深めることができる授業づくり ～5学年 道徳科「手品師 A正直、誠実」の実践を通して～

富山市立西田地方小学校 教諭 平 宮 可 那

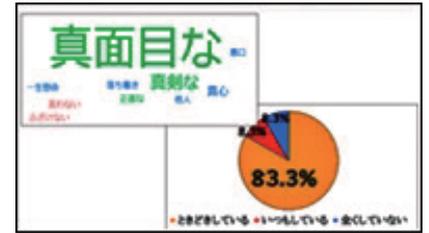
1 課題設定の理由

本学級の5年生の子供たちは、4月から、道徳科を中心にペアやグループ等、仲間と交流しながら学び合っている。しかし、中には学習課題に切実感をもてなかったり、自分の意見をうまく伝えられなかったりしたことから、仲間の考えから学ぶことができない子供もいた。そこで、全ての子供が課題に対して切実感をもち、仲間と考えを深め、学び合うことができるよう本課題を設定した。

2 研究実践

(1) 課題意識を高める事前アンケート結果の提示

道徳科では、毎時間扱う教材と関連のある生活場面の画像やアンケート結果を提示するなど導入を工夫することで、課題意識をもてるようにした。本時では事前にこれまでの自分の生き方を見直すアンケートをとり、「誠実さ」について課題意識をもって取り組めるようにした。「誠実と聞いてどのようなイメージをもつか」「日ごろ自分たちは誠実に行動していると思うか」の二つについて、結果を順にテキストマイニングと円グラフで表し、提示した。子供たちの「誠実」のイメージは、「真面目」が最も多く、日ごろの生活では「ときどき誠実に行動している」という回答が8割を占めた。この結果を通して「誠実に生きるとはどういうことなんだろう？」と課題意識をもちながら、「誠実」をテーマにした教材文に出会うことができた。



〈誠実さアンケートの結果〉

(2) 子供同士で意見を広げる「つながりワード」の提示

道徳科の話合いのポイントを提示した。「人としての生き方」に迫るために、「自分の経験とつなげて考える」「友達と話を つなげて考える」「話の内容とつなげて考える」の三つを意識して考えを広げていくようにした。授業のグループトークでは、仲間の考えや自らの経験とつなげて話し合う姿が見られた。中には、「〇〇さんはどう考えている？」と友達の考えを知ろうと声をかける子供もいた。また全体の話し合いでも、「〇〇さんの考えが心に残っていて・・・」と「つながりワード」を意識して意見を発表する姿が見られた。「手品師の生き方をどう思うか」という生き方を考える場面では、「つながりワード」を中心に子供たちで考えをつなげることで、「人としての生き方」について考えを深めていた。

(3) 自分の考えを深める「マイノート」

道徳科の時間の最後には、毎回マイノートに自分の考えを記入した。マイノートの一段落目には、授業を通して心に残ったキーワードを、二段落目にはこれからの自分の生き方について記述した。短い文章ではあるが、毎回この段落構成で学習を振り返ることは、話の内容や友達の考え、自らの経験をつなげて考える習慣となり、自分の生き方を深く考える機会となった。

〈My Key word〉	
まじめで、人と考えられる人	By 和同さん
か誠実	
いい	うさ
きた	だ
た	か
い	の
つ	こ
と	こ
思	い
い	ま
ま	じ
め	自
じ	分
に	か
し	つ
て	ら

〈本時の「マイノート」〉

3 研究の成果

- ・ 内容項目に関係する内容の事前アンケートの結果を提示することで、子供は課題を自分事として捉えながら、自分の考えをもつことにつながった。
- ・ 子供同士で意見を広げる「つながりワード」を提示することで、つながりの視点が明確になり、友達の考えに目を向けたり、知りたいという思いをもったりして、積極的に議論することにつながった。
- ・ 「マイノート」に継続的に振り返りを記入し、授業を通して学んだことや考えをまとめることは、自分の考えを整理し、生き方と学びをつなごうとする習慣づくりになった。

4 今後の課題

- ・ 教材によっては必ずしもアンケートが有効であるとは限らない。扱う教材の内容項目に合わせて、子供の課題意識を高め、自らの生き方と照らし合わせることができるよう有効な手立てを考えていきたい。
- ・ 道徳科での学びを基に、他教科の学習においても「つながりワード」を活用した子供同士が学び合う授業づくりを目指していきたい。

主体性を育み、自らの高まりを実感することができる支援の在り方

～体育科「心をついにシンクロマット」における実践～

富山市立中央小学校 教諭 堀 芳 聡

1 課題設定の理由

本学級の子供たちは、マット運動に苦手意識をもっている子供が多い。また、優しい子供が多くお互いを思いやっているが、なかなか自分自身の気持ちを表現したり、積極的に取り組んだりすることに苦手意識をもっているようである。しかし、運動会や宿泊学習等の行事では、みんなで頑張ろうという意識をもってやり遂げた。また、日々の学習活動では、分からないところがある友達に優しく教えるといった助け合う姿が見られるようになってきた。そこで、チームの仲間と構成を話し合ったり、動きを補助し合ったりする活動を大切にしながら、互いに支え合い、豊かに成長していく姿を期待して本単元を設定した。

2 研究実践

(1) 仲間と豊かに関わることで、チームの演技を高めたいという思いをもって、個人の技の完成度を高めることができるめあての設定

めあて①シンクロマットに取り入れたい技を練習しよう

めあて①とめあて②をくり返す。



仲間と話し合いながら技を見直す子供



技の完成度を高める練習に励む子供と、アドバイスをするために見守る子供



隊形、方向、タイミングについて話し合う子供



新しい技にチャレンジする子供

めあて②仲間と協力してシンクロマットをつくろう

「チームの演技を高めたいという気持ちは、個人の技の完成度を高めたいという意欲につながる」という仮説を基に、本単元のめあて①「シンクロマットに取り入れたい技を練習しよう」と、めあて②「仲間と協力してシンクロマットをつくろう」を設定し、何度も練習に取り組んだ。子供たちは、積極的に技を見直したり演技構成を考えたりする話し合いをくり返し、さらに完成度を高める練習や新しい技にチャレンジする練習を重ねることで技が上達していった。チームの仲間と話し合ったり、補助し合ったりして、豊かに関わり合う子供が多くなった。

このことから、めあてをしっかりともち、主体的に練習に取り組むことで、技能の向上につながったと考えられる。

(2) グループ設定の工夫

子供たちがいきいきと活動できるように、グループ設定を子供たちと話し合って男女別に決めた。男女混合で行う学習活動と比べ、活発に話し合い関わり合って活動する子供が多くなった。男子チームは、跳び前転や側方倒立回転、ロンダートなどを組み合わせる姿がみられた。女子チームは、ブリッジや開脚前転、伸膝後転などを組み合わせる姿がみられた。単元の終わりに行った「6年2組シンクロマットフェスティバル」では、男子の力強い演技、女子のしなやかな演技、それぞれのよさに気付き、互いに認め合う子供たちの姿がみられた。



ブリッジの練習に励む子供



チームマットと発表用マット

(3) 場の設定の工夫

マットの数に限りがある中で運動量を確保する必要がある。

各チームに3枚のマットを割り当て、体育館中央には発表用マットを設置した。発表の練習をしたいときは、発表用マットを譲り合って使用することで、いつでも練習できる環境を整えた。

3 研究の成果

- ・めあて①とめあて②を行き来できる学習過程を確立したことは、仲間同士でアドバイスしたり補助し合ったりするなど積極的に活動しチームの仲間全員が技の完成度を高める有効な手立てとなった。
- ・子供たちが話し合って男女別のグループを編成したことによって、男子の力強い演技や女子のしなやかな演技につながった。また、いきいきと活動し活発に話し合う姿がみられた。
- ・発表用マットの場を工夫したことで、練習したい時に自由に練習できるよさがみられた。

4 今後の課題

既習技の完成度の高まりは見られたが、新しい技を演技に取り入れた子供が6割であった。新しい技へのチャレンジに向かわせるための教師の手立てを考えていきたい。

主体的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成

—外国語科NEW HORIZON 6年の実践から—

富山市立光陽小学校 教諭 木村 真樹

1 課題設定の理由

本学級の子供たちは、自分の意見もちをはっきりと伝えられる子供が多い。その一方で自分と違った考えを認められなかったり、特定の友達とのみ関わったりする子供もいる。本実践は、一年間の外国語科の授業を通して、主体的にコミュニケーションを図ろうとする子供を育成することをねらいとする。答えのないこれからの時代を生きていく子供たちが、自分なりに答えを探していくためには、自己を見つめるとともに、他者とのコミュニケーションを介して解決していく必要がある。自分も友達も大切にしたい子供の姿を願い、本課題を設定した。

2 研究実践

(1) 今、自分に必要な力を身に付けるPractice Timeの設定

外国語科の授業において、主体的にコミュニケーションを図るには、英語を話したり聞いたりすることに自信をもつことが大切だと考える。そのためには、英語の苦手な箇所を解決していく必要があるが、英語に対するつまずきは一人一人異なっていた。そこで、授業のはじめの時間に本時の目当て「Today's Goal」の他に、今日の自分の目当て「My Goal」を決める時間を設けた。そして、その「My Goal」を達成するための個人の練習時間「Practice Time」も設定した。A児は、「My Goal」を「スラスラと英語を言えるようにする」と立て、「Practice Time」ではGoogle翻訳を使い、自分の英語の発音が正しいか確認していた。言語活動では、ゆっくりではあるが間違いやすい箇所に気を付けながら笑顔でコミュニケーションを取っていた。B児は「My Goal」を「楽しい気持ちが伝わるように、アイコンタクトに気を付けながら話す」とし、「Practice Time」では、ペアの友達にアイコンタクトを取りながら自分の思いを伝える練習をしたり、聞いたことに対してリアクションを取る練習を行ったりしていた。言語活動では、ペアで練習したことを多くの友達とのやり取りで行うことができた。このように、一斉授業の中にも、個人の課題を決める時間とそれを解決するための時間を授業内に設けることで、子供は自信をもって他者と関わることができ、主体的にコミュニケーションを図っていくことにつながったと考える。



【My Goalを書くワークシート】



【夏休みの思い出を伝える子供】

(2) 外国語科での言語活動における場面設定の工夫

外国語科では、自らコミュニケーションを図っていきたいと思えるような場面設定を意図的に仕組む必要がある。そのためには、伝える相手と目的が明確でなければならないと考える。そこで、各単元のゴールの言語活動を下記のように設定した。C児は、4月当初、英語を用いて相手に伝えることに自信がない様子であったが、「目を見てスラスラ伝えたい」という目標をもち、Unit4では、クラスのいろいろな友達にインタビューする姿があった。また子供たちの多くは、自分の思いを伝えるために、ジェスチャーやアイコンタクトを工夫している様子が見られた。そして、聞き手側になったときもリアクションをとりながら聞く姿が多く見られた。このように、伝える相手と目的を明確にし、伝える必要がある場面を教師側で設定したことは、子供たちの「伝えたい」「聞きたい」という意欲を高めるために有効だった。

Unit	言語活動の内容	相手	目的
3	旅行代理店として、自分の行きたい国を友達に紹介する。	クラスみんな（お客さん）とALT	旅行してみたい国に選んでもらう。
4	楽しかった夏休みの思い出を、駅で架空のテレビ番組のインタビュアーに伝える。	クラスみんな（インタビュアー）	架空のテレビ番組で放送してもらって夏休みの思い出を、1つ決めてもらう。
5	食物連鎖のつながりを、クラスみんなに発表する。	クラスみんなとALT	クラスみんなに食物連鎖のつながりについて知ってもらう。
6	栄養満点、富山県産オリジナルカレーを発表する。（質問あり）	クラスみんなと栄養職員の先生	栄養職員の先生に今後のメニューづくりに生かせるようなカレーを1つ選んでもらう。

3 研究の成果

- ・授業の始めに個の目当てを立て、自分の目指す姿に向けて追究する時間を授業内に確保することで、一人一人が自信をもってコミュニケーションを図ることができた。
- ・言語活動において、伝える相手と目的を明確にし、英語を話す必要感をもつ場面を設定することで、主体的にコミュニケーションを図ることができた。

4 今後の課題

今回、言語活動で伝える相手を、クラスメイトだけでなく栄養職員やALTにもお願いしたが、さらにいろいろな相手を設定することで、より必要感が生まれるのではないかと考える。また、伝えたり理解したりするための英語の語彙習得にも力を注ぐなど、日々の教材研究を重ねていきたい。

外国語による言語活動を通して、主体的・対話的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成 ー第6学年外国語科「世界で活躍する自分をしようかいしよう」の実践からー

射水市立下村小学校 教諭 神名 寛 朗

1 課題設定の理由

本学級の子供たちには、外国語科の学習では既習表現を使いながら、友達とやり取りする様子が見れる。しかし、ワークシートを見たり、日本語を交えたりして表現する様子も多く見られ、主体的・対話的なコミュニケーションができていると言い難い。そこで、子供たちが主体的・対話的にコミュニケーション活動に取り組み、自分のことや相手のことについて知ってほしい、知りたいと思える必要感のある活動を目指して、本課題を設定した。

2 研究実践 ー第6学年外国語科「世界で活躍する自分をしようかいしよう」ー

(1) ゴールの姿を明確にし、子供たちが意欲的に学習を進めるための単元構想の工夫

将来自分はどういう仕事に就いているだろうか。世界でどう活躍しているだろうか。未来の自分を想像しながら、自分の将来の姿について知ってほしい、また友達の将来についても知りたいと思える学習にしたいと考え、本単元のゴールを「20年後に同窓会をアメリカで開催する。その会場で、将来の自分になりきって未来の自分のことや相手のことについて紹介し合おう」と設定した。そして、第1時の導入でHRTとALTとのデモンストレーションを見せ、単元のゴールの姿を示した。子供たちは、「挨拶」「就いている仕事」「住んでいる場所」「有名な物」等を伝え合うことや、そのために必要な言語材料が何かを確認し、毎時間の活動に見通しをもって取り組むことができた。



A児とALTとのSmall Talkの様子

将来バスケットボール選手になり今同様日本で暮らすつもりA児は、外国語科の学習は普段から苦手と感じていた。しかし、毎時間行った友達同士でのSmall Talkや自分の使いたい表現を繰り返し発話することで十分慣れ親しみ、会話への抵抗感がなくなっていった。さらに居住地が日本同士の会話には驚きや新たな発見が少なく楽しめないと思うようになり、「住む場所をアメリカに変更し、アメリカで活躍する未来の自分を伝えてみたい」と考え始め、やり取りへの意欲が高まった。

(2) 子供が自分の表現をよりよいものにしていくための場の工夫

本単元では、自分の気持ちや考えを表すために必要となる表現を使えるようにALTから音声で教えてもらい、耳で慣れるようにした。ALTの後に繰り返し発話した後、個別に練習する「ボソボソタイム」を取り入れ、その後HRT、ALT、友達同士でのSmall Talkへとつなげるスタイルに統一した。毎時間同じ流れで学習することで、ゴールの姿に向かって必要な言語材料を獲得しようと主体的に取り組む姿に変容していくことを期待した。しかし、外国語科の授業に意欲的なY児の言語材料があまり定着しない面が気になった。Y児は、ALTの後に続いて繰り返し発話しているが、聞いたことをもとに自分の考えや気持ちを発話しようとするや沈黙する様子が見られ、言語活動の充実が課題であることが明らかになった。そこで、「聞く時間」と「発話する時間」を十分保障する1時間の授業改善を行った。毎時間、前時で学習した表現を再度「聞く時間」と自分の気持ちや考えを英語で伝える「発話する時間」を十分に設け、HRT、ALTと子供、子供同士と行うSmall Talkへと進めていった。さらに、Y児の困り感を中間指導で聞き出し全体で共有したり、「ボソボソタイム」を設けたりして自信をもって発話できるようにした。これらの手立てにより、Y児は単元の後半には、「What food is famous for (相手の国)?」の「food」の部分を変えれば、相手に「有名な物」をもっと尋ねることができることに気付き、「sport,place,music,anime等の既習表現を使いたい」と発言するようになった。このように、繰り返し「聞く時間」、個人や教員、友達同士で「発話する時間」を工夫し、さらに「聞く時間」には文字を介さず音声のみで行うことが効果的であった。徐々に耳で慣れ、幼児が日本語を獲得するように言語材料を身に付け自信を育み、会話を楽しみながらよりよい表現を目指していこうとする子供の姿につながるようになった。



【ボソボソタイム】タブレットで発音を確認する児童、一人二役を演じてやり取りの練習をする児童の様子



何も見ずに友達とやり取りをするY児

3 研究の成果

- ・ゴールの姿を明確にすることで、子供たちは必要な言語材料を獲得しようと思えるようになり、目的や場面、状況等に応じて自分の気持ちや考えを伝え合う意欲が高まった。
- ・個人やペア、全体等の学習形態を工夫したり、「聞く活動」「発話する活動」の時間を十分保障したりすることで、発話への自信が生まれ、よりよい表現を目指していこうとする姿につながった。

4 今後の課題

- ・主体的・対話的なコミュニケーションを目指した「やり取り」の場面で、相手に対するリアクション「nice」「good」等の返答はできる子供の実態を踏まえ、「Do you like ~?」や「I like ~ ,too.」等の既習表現を使って自己調整しながら学習を進めるためのデモンストレーションの活用の仕方については、さらに研修を進めていく必要がある。

自己表現力を高め、安心して過ごせる学級集団の育成

岡岡市立野村小学校 教諭 石野友希

1 課題設定の理由

本学級の児童は、授業中は発言が多く学習意欲がとても高いと感じている。また、授業以外でも、様々な活動に前向きな態度で取り組む姿がみられる。一方で、自分の考えていることをうまく言葉に表すことが難しく、自分の思いを相手に伝えることができない場面を多くみてきた。自己表現力が乏しいために、トラブルが生じてしまうことも多々ある。そこで、小学校の入門期である1年生において、自己表現力を高め、友達との対話を通して良好な人間関係を築いたり、学習の「分かる・できた」喜びを積み重ねたりすることで、安心して過ごせる学級づくりをしたいと考え、本課題を設定した。

2 研究実践

本学級の児童は、国語科で自分のことを話すときや、登場人物の行動から想像を広げて読むとき、また、道徳科で登場人物の心情を考えると等、「間違えると恥ずかしい」「上手く言えるか自信がない」という思いから、自分の意見を皆に向けて話すことに抵抗がある児童が多かった。そこで、気持ちを表情の絵カードで表した「きもちせんたいキモチンジャー」を作成し、絵カードを基に自分の考えを表現できるようにした。

(1) 国語科における活用場面

5月「わけをはなそう」では、「私は～(気持ち)です。どうしてかと言うと、～(出来事)からです。」の話型に沿って伝えたい内容を考えてときにカードを示し、児童に選択させ、持たせて発表させた。ひらがなの読みが未習得の児童であっても、絵カードの表情から自分の伝えたい気持ちを決める姿がみられた。過去の「楽しい」「嬉しい」ことを紹介する児童が大多数を占めたが、「私はどきどきしています。どうしてかと言うと、習い事の発表会があるからです。」や「ぼくはわくわくしています。どうしてかと言うと、旅行に行くからです。」などと、未来のことを紹介する姿もみられた。考えるときに用いることで、伝えたい気持ちの幅が広がり、それぞれの思いを話すことができた。



9月「くじらぐも」では、各場面で登場人物の行動を本文より読み取り、児童が登場人物になりきって動作化を行った後、子供とくじらぐもの様子を思い浮かべる時間を設けた。掲示されている「キモチンジャー」を基にワークシートに書き込む児童の姿がみられた。また、子供がくじらぐもに飛び乗る場面では、話合いの中で「くじらぐもに応援されたから頑張る気持ちが100になった。」「100だからくじらぐもに乗れたのだと思う。」「最初は頑張る気持ちが30くらいで、だんだん100になってきたから、音読するときも声をだんだん大きくしたらよい。」などと、絵カードを選択するだけでなく、数字を使って登場人物の気持ちの変化を表す姿が広まった。

(2) 道徳科における活用場面

教材「ひつじかいのいたずら」では、羊飼いの気持ちを考えるときに用いた。嘘をついて大人をだましたときの羊飼いの気持ちとして、「面白い」「楽しい」「嬉しい」の3種類、誰も信じてくれなくなったときの羊飼いの気持ちとして「悲しい」「困った」「嫌だ」「怖い」の4種類の絵カードが選ばれた。言葉で表現することが難しい児童でも自信をもって絵カードを選ぶ姿がみられた。さらに、児童が絵カードを基に自分の考えを述べることで、同じ絵カードを選んでも異なる考えがあることに気付いたり、羊飼いは複数の気持ちが入り交ざっていることに気付いたりすることができた。



(3) その他の活用場面

生徒指導上のトラブルが生じ、自分の気持ちをうまく言葉にできないときにも用いた。児童にそのときの気持ちに合った絵カードを選んでもらい、気持ちを汲み取りながら聞き取りを行うことで、児童は問題行動を落ち着いて振り返ることができた。

3 研究の成果

表情の絵カードを用いて国語科や道徳科の学習を行うことで、思いを伝えることが苦手な児童でも「選ぶ」ということ自己決定し、自信をもって学習に参加できた。また、「同じ絵カードを選んでいる」という安心感から発表への抵抗が減り、自己表現する児童が増えた。さらに、感情には様々な種類や程度があることに気付き、自己理解や他者理解へとつながる手立てとなった。

4 今後の課題

良好な人間関係を築くために、絵カードに頼らなくても自己表現できるよう指導していく必要がある。

子供が主体的に学び、「できる」「楽しい」を実感する指導の工夫

—通級指導における自立活動「音読マスターになろう」の実践から—

小矢部市立津沢小学校 教諭 篠 嶋 純 花

1 課題設定の理由

通級指導教室に通う子供たちは、これまでの学習の中で「分からなかった」「できなかった」経験を多く積み、学習に自信をもつことができていないことが多い。そこで、通級指導教室で学習するときには、一人一人が自分に合った学習方法を見付け、「できた」という経験を積むことで、少しでも前向きに学習に取り組むことができるようにさせたいと思い本課題を設定した。

2 研究実践 —第2学年男児 自立活動「音読マスターになろう」—

促音や拗音を読むこと、文字のまとまりを単語として捉えたりすることが難しいことから、文章を読むことや音読することへの苦手意識が強い児童に対して以下のような手立てを行った。

(1) 操作的な活動やスモールステップでの指導

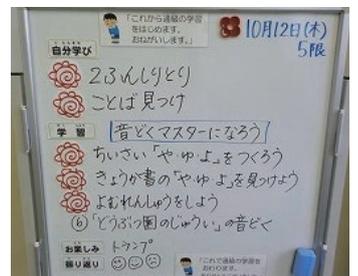
初めに、拗音が入った言葉のイラストを見て単語を答える活動を行った。次に、並び替えることが可能な平仮名カードを使って、拗音を文字と音で覚えた。さらに、音を動作化し、拗音と清音では違う動きをすることで、苦手な拗音が単語の中のどこにあるのかを理解することができた。このことは、拗音を書くことへの理解にもつながった。また、「清音カード」と「や・ゆ・よカード」からランダムに1枚ずつ取り出し、組み合わせで作った拗音を読み上げる活動を行った。どのカードを引くか分からないというゲーム要素が本人の学習に対する前向きな姿につながったと感じる。その後は文の中から拗音を見付けて練習し、単元の最後には、教科書の文章をすらすらと音読することができた。



【平仮名カードを使った動作化の掲示】

(2) 見通しをもって学習を進めるための学習計画の掲示

1時間の学習に見通しをもち、自分で学習を進めることができるように、毎時間の初めに学習内容を掲示し、活動が終わるごとに掲示物に花丸マークを付けた。また、毎時間の学習を「自分学び」「学習」「お楽しみ」「振り返り」というように同じ流れで進めることで、一つの活動が終わった時には、次の活動内容を掲示で確認し、必要なものを取り出すなど自分で学習を進めようとしている姿が見られた。



【学習計画の掲示】

(3) 学級での学習につなげることのできる振り返り

単元を通して、「○○するとすらすら読める。」という言葉で統一して振り返りをした。音読をするときのポイントについて毎時間の学習内容から見付けて書かせ、文節ごとに区切る線を付けたり、先に拗音を見付けて練習したりするなどのポイントをまとめた。促音や拗音を読むことができるようになったことに加えて、自分に合った読む練習の方法を見付けることができた。今回まとめた方法は、通級指導の時間以外でも実践できることだった。学級での学習の際にも自分で見付けたポイントを生かして読む練習をし、教科書の物語文を自信をもって音読することができた。

3 研究の成果

- ・学習の楽しさを感じさせるためには、平仮名カード使って読み方を確認したり、自分で拗音を作ったりする活動を取り入れるなど、操作的な活動が有効であった。
- ・毎時間の学習の流れを統一し、ゴールを明確にして掲示することで、安心して学習に取り組むことができ、自分で学習を進めようとする姿につなげることができた。

4 今後の課題

- ・1対1での学習であるため、子供ができることでも、つい教師が手伝ってしまうことが多かった。楽しい学習から主体的な学習へとつなげられるように、学習方法を工夫していく必要がある。

語彙を豊かにし、表現力を高めるための指導の工夫

富山市立藤ノ木中学校 教諭 高倉 笙子

1 課題設定の理由

本学年の生徒は、前年度の国語の授業において、詩や随筆を創作する活動を行った。特に、詩の創作では、比喩を用いる中で表現の幅の広さや面白さを感じ取っていた。その一方で、自分の思い描く情景を言葉にする際、限られた語彙の中で適当な言葉が見つからずに悩む姿や、安易に言葉を選ぶ姿も見られた。そこから、一つの言葉であっても多くの意味を込められることを知り、言葉に対するこだわりをもって表現活動に取り組んでほしいと考えたため、この課題を設定した。

2 研究実践

(1) 短歌の基本を学ぶ

『短歌に親しむ』（光村図書）と『短歌を味わう』（光村図書）を取り扱い、短歌についての授業を行った。ここで生徒は、短歌が三十一文字で構成されていることを知り、前年度に行った詩や随筆と比較すると、字数の制限が大きいことを学んだ。一方、教科書で紹介されている短歌の解釈を共有する中で、限られた字数の中でも、読み手の解釈の幅が広がるような表現の工夫がなされていることを目の当たりにした。

(2) 限られた字数で言葉を選ぶグループ活動

その後、教科書に作品が掲載されている俵万智氏の別作品「子どもらが十円の夢買いに来る駄菓子屋さんのラムネのみどり」という短歌の、「の夢」の箇所を空欄にして書いた模造紙を提示し、生徒が各グループで話し合っけて空欄を埋め、完成した作品の解釈を学級全体で紹介するという活動を行った。「子どもらが十円」に続く形になるという点から、多くの生徒が「持つて」や「握って」という言葉を選んでいった。気持ちや情景をより明確に表すことを目的とし、実際に10円玉を用意して渡すと、「持つ」と「握る」の違いを実践しながら班員に説明している生徒の姿も見られた。また、ある生徒は10円玉を触っているうちに、手の体温が10円玉に移ることを体感し、「あため」という言葉を選び、「温まるほど強く握りしめているという、子どもの気持ちの高ぶりを表現している」と発表していた。授業の終末には本来の短歌を紹介すると、自分たちの予想していた言葉とはかけ離れていたため、驚いている生徒も多かった。



〈グループ活動に取り組む生徒の姿〉

3 研究の成果

三十一文字という限られた字数の中で、自分が思い描いている情景を読者に伝えるためには、言葉選びにこだわる必要があることを気付かせることができた。また、言葉選びにこだわりをもつことで、表現する力が高まり、創作における楽しさを感じられることや、適切な言葉選びが、読者の解釈の幅を広げるといふ、読者にとっての楽しさにもつながることを感じ取っていた。

授業の振り返りでは、「自分は『握って』という言葉しか思い浮かばなかったけど、他の人の意見を聞いている中で、たくさんの表現があると気付けた。」「答えが『の夢』だったことには驚いたが、『十円で夢を買う』という表現の仕方に、子どもらしさを感じられてすごいと思った。」「たった三文字や四文字の違いなのに、受ける印象が大きく変わるの面白かった。短歌だけでなく、様々な場面で言葉を選ぶときには、自分の思っていることを正確に表せる言葉は何かを考えていきたい。」などといった声も聞かれた。

4 今後の課題

今回の実践において、生徒は一つの言葉がもつ無限の可能性を感じると同時に、言葉選びにこだわりをもつことの重要性や楽しさを感じ取っていた。一方で、既にもっている語彙だけでは表現の限界を感じてしまう姿も見られた。今後は、様々な言葉や表現に触れるような活動を積極的に取り入れることで、生徒一人一人の語彙量の増加を図る。その上で、今回の実践において身に付いた、言葉に対するこだわりをもって、幅広く多様な表現ができる生徒の育成を目指したい。

ICT機器を用いた実験の工夫

富山市立藤ノ木中学校 教諭 柳 健 太

1 課題設定の理由

本学年の生徒は、理科の授業、特に実験活動に意欲的に取り組む生徒が多く、正しく実験操作を行い、実験データの収集を行うことができる。また、実験班の班員と積極的な情報交換・教え合いを行うといった、主体的に授業に取り組もうとする姿勢が見られ、実験の課題を深く理解しようとする生徒も多い。一方、実験の課題に対する振り返りや考察をまとめることを苦手とする生徒が多い。そこで、昨年度の実践では、主に実験時のまとめのレポート記述やその評価に着眼点を置いて実験活動の改善を行ってきたが、今年度は、ICT機器を活用し、実験時の導入や展開時における実験に対する理解や興味・関心を高め、振り返りや考察をまとめる要点を見つけることを目的として本研究課題を設定した。

2 研究実践

(1) Chromebookを用いた実験動画の撮影と放映

化学分野の実験を行う際、予備実験の様子をChromebookで撮影し、授業の導入で放映した。これにより、生徒は実験操作の方法や流れを、短時間で把握することができた。特に、実験者の動きを、一連の流れで確認することができ、実験操作の間違いの減少や実験操作にかかる時間の短縮につながり、授業後半の実験のまとめや考察(レポート記述)の十分な時間確保につながった。



図1. Chromebookを用いた実験動画

(2) タブレット付き顕微鏡を用いた生物観察の演示実験

顕微鏡を用いた植物の観察実験を行う時、生徒が顕微鏡観察を行うと同時に、演示実験として、教員が操作するタブレット付き顕微鏡の映像をモニターに映した。これにより、生徒は顕微鏡で観察できる植物の細胞の様子を確認しながら、自らが操作する顕微鏡でも観察することができた。指導者も、生徒に観察してほしい細胞のつくり等をモニターで見ながら説明することができた。



図2. タブレット付き顕微鏡による植物の細胞の観察実験

(3) 実物投影器を用いた生物の解剖実験

生物分野の観察実験として、実物投影器を用いて、鳥の手羽先の解剖実験を演示した。この実験では、骨と筋肉の関係を示すことを目的としており、授業の導入で行った。この実験により、生徒は筋肉の伸縮とそれに連動する骨の動きに対する理解が深まった。また、導入で手羽先を解剖することで、生徒の反応から、生物の体の構造に対する興味・関心が高まった様子を確認することができた。

3 研究の成果

本実践を通して、Chromebookやタブレット付き顕微鏡等のICT機器を用いて、授業の導入や展開時に、動画を投影し、視覚的に実験内容を示すことで、生徒の授業内容に対する興味・関心を高めることができた。また、動画を用いて説明を行うことで、実験操作の間違えや時間ロスを減らすことができ、実験後の振り返りやレポート記述に、十分な時間を確保することができた。

4 今後の課題

本実践では、実験動画の放映やリアルタイムで実験試料の映像の投影を行うことで、生徒が実験内容に対して、視覚的イメージをもつように仕向けることができたので、今後はその動画に解説等の加工を行い、単元毎の動画教材として活用していきたいと考えている。また、リアルタイムでの実験試料の映像の投影も、他の授業でも積極的に取り入れていきたい。そして、今後は動画教材を活用する上で、授業のどのタイミングで使うことが、生徒の授業理解により効率的に繋がるのかを研究していきたい。

全校が意欲的に生徒会活動に取り組む学校を目指して

富山市立八尾中学校 教諭 畑 佐 知 弘

1 題材設定の理由

本校の後期生徒会スローガンは、「SDGsで輝く八尾中学校」である。このスローガンには、SDGsに関する様々な活動を企画し、参加してもらうことで、SDGsの目標に向かって全校が協力できる学校にしたいという生徒会執行部の思いが込められている。そこで今回、その思いを実現するために本課題を設定した。

2 研究実践

(1) 生徒が意欲的に取り組むことができる活動課題の設定

生徒が主体的に生徒会活動に取り組むことができるようにするためには、生徒が「参加したい」「協力したい」と感じられるような課題の設定が必要である。まずは、活動名を工夫することから始めた。生徒会担当と執行部で話し合いを重ね、「10日間！アルミ缶でSDGsチャレンジ！」という活動名に決定した。本校の教育活動のキーワードにも掲げられている「チャレンジ」という言葉を入れ、全校に「10日間でかごをアルミ缶で満杯にする！」という目標を与えることで、全校が本活動に興味をもったり、ミッション達成のために協力したりする姿が見られると期待した。

(2) 取組状況の発信と活動の工夫

活動を開始したが、初日から3日目でかごに集まったアルミ缶は数袋であった。そこで、生徒会担当と執行部でどうしたら全校が活動に興味をもち、協力してくれるのかを再び話し合った。様々なアイデアの中から2つの実践を試みた。1つ目は、本校に設置されているサイネージ（電子掲示板）で本活動について発信した。サイネージを活用することで、全校の目に止まり、協力してくれる生徒が増えると考えた。また、本校のホームページを活用し、本活動への協力を依頼し、現在の取組状況を発信した。

2つ目は、地域の企業に協力してもらい、アルミ缶を収集するかごを2つ用意した。かごには「きのこの山」と「たけのこの里」のイラストを貼り、自分の好きな方にアルミ缶を入れて投票することができるようにした。集まったアルミ缶の重さで勝敗が決まることとし、その結果を全校に伝えた。



【活動内容や実践状況をサイネージやホームページで生徒や保護者に発信】

【意欲的に活動に参加する生徒の様子】



【初日から3日目のかごの様子】

【再度、取組方法を検討し、新しいアイデアを出す生徒の様子】

【アルミ缶で満杯になったかごの様子】

【サイネージで結果を報告】

3 研究の成果

- サイネージやホームページを活用し、情報を発信することは、全生徒だけでなく保護者の本活動への興味関心を高め、理解につながった。
- アルミ缶の持参を依頼するだけでなく、持参したアルミ缶を使って参加できる取組を実践することで、楽しみながら生徒会活動に取り組む生徒が増えた。また、アルミ缶も予想以上に回収でき、全校生徒が協力し、目標を達成することができた。

4 今後の課題

- どの活動を行う際も、活動途中に取組状況を分析し、生徒の取組状況見合わせてよりよい取組方法を考えていく必要がある。
- 活動を実施するだけでなく、本活動で効果的だったアイデアや成果を生徒会で話し合い、次の活動に繋げる。
- 本活動以外のSDGsの活動も企画し、全校生徒がさらに生徒会活動に興味をもち、協力できる学校を目指したい。

生涯を通して、主体的に健康な生活を実践しようとする生徒の育成を目指して ～メディアコントロールの取組から～

小矢部市立津沢中学校 養護教諭 亀谷 杏葉

1 課題設定の理由

一人一台タブレット、スマートフォン所持の低年齢化等により、メディアを利用することが当たり前の時代である。本校においても、長時間のメディア利用により生活習慣が乱れ、体調を崩す生徒が増加している。しかし、メディア利用の多くは学校外で行われるため、安全に健康的に利用するには、生徒自身や保護者の意識改革が必要となる。そこで、①生徒の主体的活動、②家庭との連携、の2つのアプローチにより、メディア利用をコントロールする力を育成できるのではと考え、この課題を設定した。

2 研究実践

① 生徒同士の関わりから、問題意識や実践意欲を高める活動

(資料1)

生徒の問題意識を高めるため、生徒保健委員会でメディア利用調査を行った。調査の結果、「気付くと時間が過ぎていく」「長時間のメディア利用はだめだと分かっているけど、触ってしまう」等のメディアコントロールができていない生徒が多くいることが分かった。そこで、委員が、メディアと上手に付き合い合っていくために工夫していることを紙にまとめて紹介したり、委員が選んだメディアと健康に関する動画を給食の時間に流したりした。

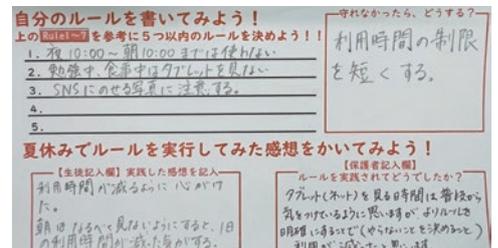


また、6月、夏休み、10月、11月と継続して強調週間を設けた。強調週間に合わせて、養護教諭が保健指導をするだけでなく、生徒保健委員が、強調週間を行う目的や長時間のメディア利用の危険性をパワーポイントにまとめ、Teamsの会議機能を使用して全校生徒へ発表し、実践に繋がるよう工夫した。さらに実践中には、メディアコントロールについてのアドバイスを校内放送し、実践後には「生徒保健委員会だより」を作成して生徒や保護者にも情報共有した。(資料1)

② PTAとの連携から、実践意欲を高める活動

(資料2)

上記調査により、本校の生徒は家庭内でメディアルールを設定している割合が32.4%と低いことが分かった。そこで、メディア利用時のルールを家庭でも考えてもらうため、「ネットとゲームのルール作り」を計画した。計画を実施する前に、PTA体育厚生委員の方と話し合ったところ、「どのようなことを考えてルールを作ればいいのか」「ルールを守れなかった場合どうなるのか」といった意見を頂いた。そのため、ルール作りの際に考えてほしい項目をポイントとして提示することにしたほか、ルールを作成しただけにならないよう、「守れなかった場合どうするか」を記入する欄を設けることとした。(資料2)

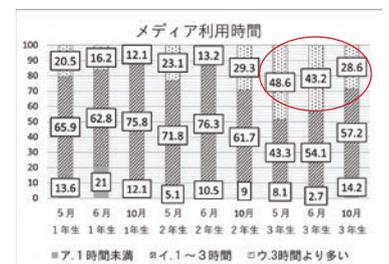


PTAでも、より多くの保護者に、メディアコントロールへの意識を高めてもらいたいと、メディアコントロールについての参考資料やお便りを配付する動きが生まれた。

3 研究の成果

(資料3)

① 強調週間の実施後に行ったアンケートでは、「動画を見て気を付けたいと思った」「睡眠時間や勉強時間が増えた」といった意識変化が多く見られたほか、72%の生徒が引き続きメディアコントロールをしていきたいと回答した。また(資料3)のとおり、強調週間の回数を重ねることでメディア利用時間が3時間以上の割合が大幅に減った学年もあり、委員会の生徒が継続的に取組を企画し課題の分析・発信をしたことで、全校生徒の自己管理能力が向上することに繋がったと感じた。



② 10月の強調週間終了後、家庭内でメディアルールを設定している割合が61%に上昇した。PTAと連携することで、より多くの保護者に周知することができ、家庭と連携したメディアコントロール週間を実践することができたと感じた。

4 今後の課題

「時間を制限されたくないからメディアコントロールはしたくない」「メディア利用時間についてのルールも加えてほしい」と生徒と保護者で温度差のある家庭も見られた。今後も家庭と連携し、メディアとうまく付き合い合っていくための手立てを考えていく必要がある。

地域とつながる生活単元学習の授業デザイン

－「ふるさとすてき見つけ隊」の実践を通して－

富山県立氷見高等学校 教諭 齊田大輝
(R5富山県立しらとり支援学校での実践)

1 課題設定の理由

学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学校と社会が連携・協働して子どもたちの人間形成を図ることが掲げられている。一方で知的障害特別支援学校では、居住地が異なる広域からの通学生が多く、生活年齢が同じでも障害の程度や発達段階が異なることから地域参加の経験に差があることが考えられる。そこで、各教科等を合わせた指導の一つの指導形態である生活単元学習において、学校所在地の古里地区をテーマに取り上げ、身近な地域への興味、関心を高めることをねらいに本課題を設定し、以下の実践を行った。

2 研究実践

(1) 題材との出会い

本校の校歌には「しらとり歌う ふるさとで」という一節がある。そこで生徒に馴染みのある校歌の歌詞に着目する導入を行った。その際、これまでさまざまな授業で活用し、生徒たちの関心が高いバーチャル地球儀システムのGoogle Earthで「しらとり支援学校」を検索することとした。生徒たちは表示された3D地図をよく観察し、学校周辺の施設を一枚のマップにまとめた。その過程で名称に「古里」の語を含む施設を多数発見していた。そこから、生徒たちは歌詞の一節である「ふるさと」が学校周辺の地区を表していることに気付き、身近な地域について主体的に学ぶ意欲が高まった。

(2) 学習意欲を高める状況づくり

学級の生徒を「ふるさとすてき見つけ隊」の隊員として任命し、教員も含めて全員が「隊員証」を身に付けることで、協働的に学習に取り組む一体感を醸成することをねらった。また、地域の古刹である各願寺のパンフレットを作成することをミッションとし、古里地区の魅力を校内外に発信することを生徒たちに呼び掛けた。授業を重ねる中で、授業開始前に「変身！」と言って隊員証を付けて授業への期待感を高めている生徒たちの姿が見られた。さらに、生徒たちと現地を訪問して各願寺の住職や自治会長にインタビューをする機会を設けた(写真1)。地域の伝統行事「曲水の宴」を現代に復活させるきっかけとなった襖絵を鑑賞する、実際に使用されている道具に触れる、地域に生きる人々の生の声を聞くことで、具体的なイメージをもつことに困難さがある生徒にとって、より深い理解につながり関心が高まった。



〈写真1 訪問時の様子〉



A：自分が住んでいる地域の地名をGoogle Earthで検索する



B：自分で撮影した各願寺の写真を他のクラスの友達に見せに行く



C：作成したパンフレットを家族に見せようと持ち帰る

3 研究の成果

居住地域との交流機会が限られる生徒も、学校を起点とした地域に関心を広げ、地域に関する学びを身近な人と共有しようとする様子が見られた(資料1)。現地訪問の様子が新聞に掲載され、作成したパンフレット(資料2)を学校のホームページで公開したり、地域の文化祭に出展したりすることで、生徒が充足感を感じるとともに、地域の方に学習の様子を知ってもらう機会となった。

4 今後の課題

生徒が主体的に地域と関わりをもつためには、生徒の実態を踏まえた上での学習活動や交流機会の設定、地域の理解や協力が不可欠である。生徒によって理解の程度は異なるものの、今後も生徒が地域との関わりを実感しながら取り組める活動を精選し、地域との連携を図っていきたい。

〈資料1 現地訪問後の生徒たちの姿〉



〈資料2 生徒がGoogleスライドで共同制作したパンフレット(一部抜粋)〉

社会参加に必要な力を育てるための支援の在り方

富山県立富山聴覚総合支援学校 高等部 教諭 鍵 主 紘 子

1 課題設定の理由

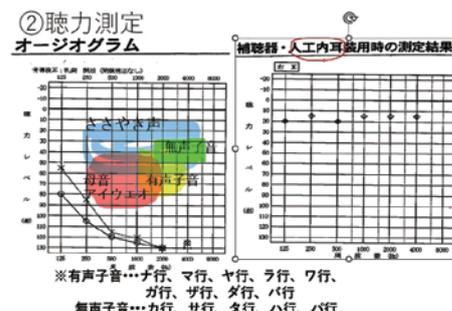
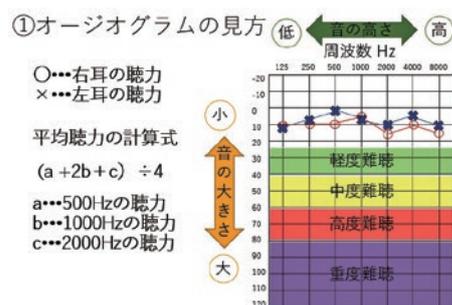
本校では、聴覚障害を有する生徒が将来自立した生活を送ることができるように、自立活動の中で補聴器の調整・管理の仕方、発音やコミュニケーションスキル等の指導を行っている。しかし、自分の障害の理解や他者に必要な支援を求めることが難しい生徒が多く、卒業生の中には、社会に壁を感じている者もいる。このような現状から、在学中に自己の障害について正しく理解し、他者とのコミュニケーション方法や関わり方を考える学習が必要であると考えた。

そこで、生徒自身が障害への認識を深め、周囲の人に対して自己の障害や必要な支援を伝えたり依頼したりするなど、社会参加に必要な力を育てるための支援の在り方について考えるべく、この課題を設定した。

2 研究実践

生徒が自己の障害の理解を深めるためには、自身の聴力や聞こえの特徴を知り、コミュニケーション方法について考えることが重要であると考え、「自分の障害を知ろう」を題材に取り上げた。

- ①イラストや図表等で分かりやすく示された物を活用してオーディオグラムの見方や平均聴力レベルの計算の仕方を学習した。
- ②聴力測定の結果をもとに、オーディオグラムを見ながら人工内耳装着時の聴力と裸耳聴力を比較して自分の聞こえの状態について確認できるようにした。
- ③語音弁別検査の結果をもとに、母音や有声子音等どんな音が聞こえているかを調べることで自分の聞こえ方の特徴を意識できるようにした。
- ④自分の聞こえや特徴について気付いたことをワークシートにまとめ、コミュニケーションの際の工夫について考えたことを発表する活動を行った。自分が困っている場面を想起させ、必要な支援は何か、支援を依頼するときどのような方法や表現方法で伝えたらよいかを考える機会を設定した。



3 研究の成果

自分の聞き間違いやすい音があることを知り、コミュニケーションの際の工夫について自分の聞こえの特徴を踏まえて考え話すことができた。また生徒は、自分の聞こえやコミュニケーションの困難さについての理解を深め、社会参加に必要な支援について具体的に説明する学習を経て、「自分のトリセツ」を作成することができた。来年度の就業体験に向けて自己紹介の際に気を付けること等イメージを掴む良い機会となり、自ら練習に臨む場面がみられるようになった。

4 今後の課題

授業直後は学習した内容を意識できるが、時間が経つと忘れてしまうため、今回作成した「自分のトリセツ」を活用する機会を設定する必要がある。今後も生徒一人一人の障害や発達の段階等に応じた自己理解につながる指導を工夫したり、必要な支援を依頼する場面を意図的に設けたりすることで、生徒が自分の状況を理解し、周りの人に対して自己の障害や必要な支援を具体的に説明し、上手に周りの支援を活用していくことができる力の向上に繋がれるよう取り組んでいきたい。

◇ 課題研究助成報告「優良賞」

学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
入善町立黒東小学校 (R5 入善町立入善西中学校)	教 諭	惣 万 紗千乃	特別支援学級における英語活動
富山市立新庄小学校	教 諭	上 野 友里愛	自分の考えや思いをもち、友達と関わり合いながら、学ぶことを楽しむ子供の育成
富山市立山室中部小学校	教 諭	木 村 祐 希	互いの思いや考えを聴き合い、自分の考えを広げる授業づくり
富山市立太田小学校	養護教諭	小 澤 彩	子供の「苦手」に寄り添い、「できる」を増やす指導の工夫
富山市立西田地方小学校	教 諭	二 木 貴久子	自分の思いや考えをもち、友達と関わり合いながら学びを深める子供の育成
富山市立中央小学校	教 諭	上 嶋 壮 太	子供が学び合う体育科の授業を目指して
富山市立東部小学校	教 諭	小 幡 真 衣	一人一人の学びに合った学習方法の工夫
富山市立光陽小学校	教 諭	荒 城 光	主体的に学ぶ子供の育成
高岡市立野村小学校	教 諭	澤 田 絵 吏	互いのよさを認め合い、安心して思いを表現できる学級集団の育成
富山県立となみ総合支援学校	教 諭	永 井 桐 雅	数学科におけるVR教材を活用した授業実践について

*令和6年度課題研究助成報告一覧

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
1	朝日町立あさひ野小学校	教 諭	宮 坂 達 哉	関わり合う力・コミュニケーション能力の育成
2		教 諭	深 松 大	主体的に学習活動に取り組む子供の育成
3	入善町立黒東小学校	教 諭	能 登 成 美	主体的に考え、協働的に学ぶことを通して、共に高め合う子供の育成
4		教 諭	惣 万 紗千乃	主体的に考え、協働的に学ぶことを通して、共に高め合う子供の育成
5		教 諭	高 縁 朱 里	主体的に考え、協働的に学ぶことを通して、共に高め合う子供の育成
6	入善町立ひばり野小学校	養護教諭	村 中 美 智	児童が健康の保持増進に向けて意欲的・継続的に取り組むための手立て
7		教 諭	坂 藤 有 梨	多様な意見を出し合い、話し合いを深める授業の工夫
8	入善町立桃李小学校	教 諭	横 田 智 哉	子供が自分の問題をつくることのできる工夫
9		教 諭	鈴 木 千 佳	子供たちが自分の問いをもち、問題解決を行っていくための手立て
10	魚津市立星の杜小学校	教 諭	宮 崎 勇 斗	言語活動を通して、主体的・対話的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成
11		教 諭	沼 田 美 咲	言語活動を通して、主体的・対話的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成
12		教 諭	野 尻 美 里	言語活動を通して、主体的・対話的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成
13		教 諭	中 嶋 菜 緒	言語活動を通して、主体的・対話的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成を目指して
14		臨任講師	石 川 舜 大	言語活動を通して、主体的・対話的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成
15	魚津市立道下小学校	教 諭	土 肥 美 冬	児童の問題意識を高める学習づくりの工夫
16	滑川市立寺家小学校	教 諭	寺 崎 綾 乃	グループでの対話を通して学びを深める子供の育成
17		教 諭	高 木 唯	対話を通して、進んで学びを深める子供の育成
18		教 諭	谷 口 碧	対話を通して自分の考えをもち、学びを深め合う子供の育成を目指して
19		教 諭	新 保 彩 葉	対話を通して新たな考えをもち、学びを深める子供の育成
20	滑川市立南部小学校	教 諭	島 谷 怜 佑	粘り強く取り組み、自らの生活を豊かにしていく子供の育成を目指して
21		教 諭	松 井 桃 花	主体的・対話的に深い学びをつくる子供の育成を目指して
22		教 諭	伊 藤 達 成	主体的・対話的に深い学びをつくる子供の育成を目指して
23		教 諭	福 島 菜乃子	粘り強く取り組み、自らの生活を豊かにしていく子供の育成を目指して
24	立山町立利田小学校	教 諭	奥 村 幹	自ら課題を見出し、主体的・対話的な場面を通して課題解決しようとする児童の育成
25	富山市立大広田小学校	教 諭	今 村 友 香	友達と積極的に関わり合い、素直に思いを表現できる学級経営
26		教 諭	柳 瀬 亮	思いやりをもって、仲間と協力できる学級経営
27		教 諭	太 田 風 紗	作者の生き方や思いに心を寄せ、想像を広げていく子供の育成
28		教 諭	金 野 美 咲	子供が意欲的に活動を進めていくための教師の支援の在り方
29	富山市立豊田小学校	教 諭	成 瀬 麻 衣	自ら課題を解決しようとする子どもの育成
30		教 諭	辻 晴 香	自分の考えを友達と伝え合い、主体的に学びに向かう子どもの育成
31		教 諭	堺 明 希	友達と関わり合いながら主体的に学ぶ子どもの育成
32		教 諭	松 浦 愛 望	主体的に考え、深め合える子どもの育成
33		教 諭	鶴 岡 ゆ り	子どもたち一人一人が主体的に学ぶための授業の工夫
34		教 諭	清 水 遼 大	子ども一人一人問いをもち、探究するための教材・環境の工夫
35		教 諭	嶋 拓 哉	探究的に学習に取り組む子どもの育成
36		教 諭	松 岡 泉	子どもが主体的に学習に取り組むための授業の工夫
37		教 諭	氷 見 瑞 基	考えたいことをもち、解決に向かう子どもの育成
38		教 諭	瀧 澤 蒼 太	子どもたちが主体的に学習に取り組むための授業の工夫
39	富山市立八幡小学校	教 諭	平 野 紗也佳	自らの課題をもち、主体的に取り組む、友達と学び合える子供の育成
40		教 諭	佐 藤 雄 大	対話的な活動の場をつくることで、自分の意見を伝えたり、友達の意見を受け入れたりすることができる授業づくり

	学 校 名	職名	氏 名	研 究 課 題
41	富山市立草島小学校	教 諭	三 浦 袖 稀	子供が追究意欲をもって、主体的に取り組むことができる授業づくり
42	富山市立倉垣小学校	教 諭	大 塚 哲	多面的・多角的に考えを深めるための手立ての工夫
43		教 諭	永 瀬 由 華	主体的に学び合う授業の工夫
44		教 諭	北 妃奈乃	対話を通して協働的に学ぶための工夫
45		教 諭	水 嶋 亜 衣	主体的な学びにつながる教科横断的に行う授業構成の工夫
46		教 諭	山 崎 彩 加	人、物、事にじっくりと関わり、自分の見方や考え方を深める手立ての工夫
47	富山市立水橋西部小学校	教 諭	白 崎 弘 宜	子供が主体的に学習に取り組むための指導の工夫
48		教 諭	團 野 奏 愛	子供たちが関わり合い、高め合う授業づくり
49		教 諭	水 口 凌 哉	関わり合いを通して、主体的、対話的に学ぶ子供の育成
50	富山市立三成小学校	教 諭	横 澤 英 公	対話を重ねることで多様な考えを認め合い、よりよい生活や自分を創ろうとする子供の育成
51		教 諭	田 中 美 玖	子供が自ら課題を見付け、主体的に取り組むことができる学習過程の工夫
52		教 諭	青 島 龍 平	一人一人が目的を明確にして課題を解決していこうとする学習過程の工夫
53	富山市立新庄北小学校	教 諭	廣 野 かおり	子供の学習意欲を引き出すための継続した取り組み
54		教 諭	荒 井 優弥花	主体的に学習に取り組むための自己決定の場の設定
55		教 諭	戸 嶋 玲 歌	子供が主体的に取り組むための、自己選択する場の工夫
56		教 諭	飯 野 涼 河	子供たちが主体的に学ぶための個別最適学習環境の工夫
57		教 諭	高 島 瑠 唯	一人一人が思いや考えを自分の言葉で相手に伝えられる場の設定
58		栄養教諭	松 井 美 結	食に関して主体的に学ぶ子供を育てるための工夫
59	富山市立堀川小学校	教 諭	番 匠 拓 也	人との関わりを通して主体的に学習を進めていく子供の育成を目指して
60		教 諭	坂 本 和 香 奈	自分の取り組みや仲間との関わりに手応えを感じながら主体的に学習に取り組もうとする子供の育成
61		教 諭	田 畠 康 史	多様な仲間と互いに尊重し合える子供の育成
62		教 諭	押 田 彩 華	身の回りの人との関わりを通して、歌唱の工夫を充実させようとする子供
63	富山市立堀川南小学校	教 諭	小 川 ひとみ	一人一人のよさを伸ばす指導の在り方
64		教 諭	坂 井 優 介	身の回りのものに興味・関心をもち、主体的に学び続ける子供の育成
65		教 諭	松 原 悠 真	ICT機器を取り入れ、「対話」を大切にしたい授業づくり
66		教 諭	河 原 幸 佑	子供一人一人が「できた」「分かった」を実感できる授業づくり
67		教 諭	菊 地 龍 成	互いの考えのよさに気付き、自分の考えをよりよく再構築していく授業づくり
68		教 諭	松 岡 尚 哉	子供が学びの場を選択して、主体的に学習に取り組むような授業の工夫
69		教 諭	水 上 桃 子	自分の考えをもち、友達と学び合うための授業づくりを目指して
70		教 諭	荻 田 真 菜	一人一人が生き生きと活動し、互いのよさを認め合える子供の育成
71		教 諭	水 上 瑞 紀	対話的な関わりを通して、自分の考えを深める授業づくり
72		教 諭	小 林 知 可	異学年で学び合える学級づくり
73	富山市立山室小学校	教 諭	柄 澤 俊	自分の考えをもち、伝え合う楽しさを味わえる学級づくり
74		教 諭	五十嵐 万 倫	思いや考えを伝え合う喜びを大切にする学級づくり
75		教 諭	大 田 知 佳	互いに考えを認め合い、主体的に学習に取り組む子供の育成
76		教 諭	立 野 健 翔	一人一人が自分の考えをもって伝え合い、認め合うことのできる学級づくり
77		教 諭	定 塚 和 也	問題解決を通して、主体的に学習に取り組む子供の育成
78		教 諭	古 市 健	子供たち同士の対話を促進する支援や指導
79		教 諭	奥 村 璃 乃	主体的に問題解決に取り組み、伝え合うことのよさを実感しながら学び合う子供の育成
80		教 諭	佐 山 結	子供が楽しみながら自分の思いを表現できる学習過程の工夫
81		富山市立山室中部小学校	教 諭	森 本 柚
82	教 諭		盛 安 楓	全員で学び合う授業を構想する

	学 校 名	職名	氏 名	研 究 課 題
83	富山市立蛭川小学校	教 諭	川 村 美貴子	子供が主体的に取り組む言語環境のあり方
84		教 諭	中 島 彩 香	一人一人が主体的に取り組む授業づくりを目指して
85		教 諭	川 原 美 里	子供が課題を自分ごととして考え、学び取る主体的な学びを目指して
86		教 諭	森 あゆみ	自ら考え、学ぶ子供の育成
87		教 諭	深 山 大 輔	互いのよさに気づき、認め合うための学級づくり
88		教 諭	國 富 翼	子供たちが主体的・対話的な学びを進めていくための授業づくり
89	富山市立熊野小学校	教 諭	村 井 太 一	共に考え、進んで表現できる授業を目指して
90		教 諭	田 村 瞳 望	共に学び合い、分かる授業を目指して
91		教 諭	伊 藤 心 笑	互いのよさを認め合い、進んで学び合おうとする子供の育成を目指して
92		教 諭	本 江 佑 衣	学ぶ楽しさを味わうことができる授業を目指して
93		教 諭	長 島 智 大	児童一人一人が目標をもって挑戦し、思いやりのあふれる学級を目指して
94		教 諭	野 崎 友 晴	「自分が好き 仲間が好き 学校が好き」と言える子供の育成
95		教 諭	古 谷 友 宏	確かな学力を身に付けるための授業の工夫
96	富山市立月岡小学校	教 諭	弓 部 真惟子	学習課題を自分事として捉え、自分や友達との対話を通して自分の考えをもつことのできる子供の育成
97		教 諭	古 野 滉 大	教材や仲間と主体的に関わり、学びを楽しむ子供の育成を目指して
98		教 諭	佐々木 玲 奈	子供たちが主体的に取り組む、楽しく学ぶことができる指導の在り方
99	富山市立新保小学校	教 諭	定 田 明	主体的に問いの解決に向けて活動する子供の育成
100		教 諭	中 寺 琉 奈	子供同士が関わり合いながら学ぶ学習活動の工夫
101		教 諭	上 田 ありさ	子供が興味をもって主体的に取り組むための学習活動の工夫
102		教 諭	大 宅 里 奈	単元を通して、自分から見たい知りたいと興味・関心をも続けられる授業の工夫
103		教 諭	小 澤 昭 吾	生きた聴き合いを通して、主体的に学ぶ子供の育成
104		教 諭	角 谷 早 紀	友達と関わりながら、学びを深める単元構想の工夫
105		教 諭	草 島 あさひ	子供が興味をもって主体的に取り組むことができる単元構想の工夫
106		教 諭	小 幡 拓 馬	子供が主体となって学びを楽しむための授業づくり
107	富山市立大沢野小学校	教 諭	小 林 ゆ り	子供が生き生きと活動する姿を目指して
108		教 諭	高 山 暉 夢	問題解決学習を通して、自らの課題に主体的に取り組む子供の育成
109		教 諭	保 本 光 輝	子供たちの学ぶ意欲を高める授業づくり
110	富山市立大久保小学校	教 諭	川 原 榛 夏	主体的に考え、仲間と共に学び合う子供の育成
111		教 諭	才 藤 翼	一人一人のよさを活かし、高まり合う授業づくり
112		教 諭	大 田 孝 恵	主体的に学習に取り組む、互いの考えのよさを認め合う子供の育成
113		教 諭	山 出 陸	子供たちが互いを認め合い、主体的に学び合うことができる学級づくり
114		教 諭	大 塚 理 紗	互いの意見を聞き合い、学級目標にむかおうとする子供を目指して
115		教 諭	網 島 斗 真	一人一人が意欲的に取り組む活動の在り方
116		教 諭	中 川 功太郎	将来に向けた自己実現を図るために、主体的な意思決定を大切にする子供の育成
117	富山市立上滝小学校	教 諭	中 野 裕美子	子供たちが主体的に学ぶための単元構想について
118		教 諭	山 田 千 尋	友達の考えを聴き、自分の考えを深める子供の育成
119	富山市立大庄小学校	教 諭	鷺 尾 玲 大	子供が主体的に学習し、学びを実感できる授業の工夫
120		教 諭	高 田 真 優	のびのびと自分の考えを伝え合い、共に関わり合い支え合いながら学ぶ児童の育成
121		教 諭	茂 住 絵莉菜	子供たちが主体的に考え、楽しく課題に取り組むことができる授業の工夫
122		教 諭	柳 田 朱 音	「分かった」「できた」に喜びを感じ、自ら進んで学ぶ子供の育成
123	富山市立鶴坂小学校	教 諭	西 田 莉 彩	話し合いや聴き合いを通して、自分の考えや思いを深める子供の育成
124		教 諭	小 林 由 莉	音楽的な見方・考え方を働かせ、思いや意図をもって表現する子供を目指して

	学 校 名	職名	氏 名	研 究 課 題
125	富山市立鷺坂小学校	教 諭	森 隼 人	音楽的な見方・考え方を働かせ、思いや意図をもって表現する子供の育成
126		教 諭	石 崎 瑞 希	子供の主体性を引き出す授業の在り方
127		教 諭	桑 野 穂 子	音楽的な見方・考え方を働かせ、思いや意図をもって表現する子供を目指して
128		教 諭	平 田 佑次朗	進んで友達と関わり、楽しみながら学習に臨む子供の育成
129		教 諭	小 林 詠 美	主体的に学ぶ子供の育成
130		教 諭	久 住 英 子	自分の思いや考えをもって、友達と関わり合う子供の育成
131		教 諭	中 岡 健 人	対話を通して、考えが深まる授業の在り方
132	富山市立宮野小学校	教 諭	藤 井 千 紘	自ら考え、共に学び合う児童の育成
133		教 諭	清 水 優 作	児童が問いをもち、主体的に考え、仲間と考えを伝え合える授業づくり
134		教 諭	竹 中 彩 乃	主体的に課題を解決しようとする子供を育てる算数科の授業づくり
135		教 諭	京 正 希々香	子供たち一人一人が課題意識をもち、主体的に取り組むことができる授業づくり
136	富山市立古里小学校	教 諭	市 川 真 亜久	地域のよさ、特色について関心をもち、愛着を深める子供の育成
137		教 諭	西 澤 拓 哉	主体的に学習に取り組む子供の育成
138		教 諭	竹 内 拓 哉	協働的に学ぶ楽しさや達成感が味わえる授業の工夫
139		教 諭	浅 井 さくら	互いのよさを見付け、学び合う授業の工夫
140	富山市立音川小学校	教 諭	江 田 有 花	主体的・対話的に学び、生活をよりよくしようとする子供の育成
141		教 諭	元 尾 海 渡	主体的・対話的に学び、家族の一員として生活をよりよくしようとする子供の育成
142		教 諭	島 倉 拓 朗	主体的・対話的に学び、生活をよりよくしようとする子供の育成を目指して
143		教 諭	小 林 夏 月	主体的・対話的に学び、生活をよりよくしようとする子供の育成を目指して
144		教 諭	前 真 子	主体的・対話的に学び、生活をよりよくしようとする子供の育成を目指して
145	富山市立杉原小学校	教 諭	竹 村 勇 希	子供が自分の考えをもち、豊かに関わり合うための一人1台端末の活用
146		教 諭	谷 山 実 優	子供が自分の考えをもち、豊かに関わり合うための授業の在り方
147	富山市立保内小学校	教 諭	藤 田 杏 柚	友達の意見を聞き、互いのよさを認め合う子供の育成を目指した学級づくり
148		教 諭	若 瀬 彩 芽	自分の考えをもち、互いの考えを認め合う授業づくり
149		臨任講師	井 藤 颯 人	教師に頼らず、子供同士の力で課題解決に向けて取り組むことのできる授業づくり
150	富山市立神明小学校	教 諭	柳 原 令 奈	一人1台端末の効果的な活用の在り方
151		教 諭	木 村 祐 希	子供が意欲的に思いや考えをまとめることのできる学習過程の工夫
152		教 諭	若 林 良 輔	子供が自分の成長を自覚できる手立ての工夫
153	富山市立老田小学校	教 諭	城 山 羽 菜	児童が主体的・対話的に学習に取り組むための指導の工夫
154		養護教諭	松 井 恵理香	子供たちが自ら生活習慣を整えるための健康教育
155	富山市立池多小学校	教 諭	佐 伯 真 栄	一人一人が主体的に問題解決に取り組むための教師の支援の工夫
156		教 諭	戸 田 三 鈴	子供が前向きに学習に取り組むための教師の支援の工夫
157	富山市立芝園小学校	教 諭	島 林 旺仁亮	子供が目的に応じて相手と関わり、「課題を解決できた」という経験を積むための教師の支援や学習展開の工夫
158		教 諭	広 瀬 勇 都	子供が自らの思いや体験から課題をもち、科学的に解決するための教師の支援の工夫
159		教 諭	竹 鼻 沙也加	子供たちが自分の思いや願いから課題をもち、それをもとに仲間と関わり合うことで、自らの課題をさらに追究することができるための、学習展開や学習環境の工夫
160		教 諭	大 浜 惇	子供が学習サイクルを調整し、必要感のある協働を通して自分の追究をより深めるための、子ども一人一人に応じた支援の工夫
161		教 諭	北 陽 一朗	子供が学習している内容を既習内容と統合したり、生活と結びつけて発展させたりするための、子供一人一人に合わせた教師の発問や言葉かけの工夫
162	富山市立西田地方小学校	教 諭	平 宮 可 那	主体的・協働的な学習を通して、探究的に学びを深める子供の育成
163		教 諭	大 岩 真 子	主体的に課題解決に向けて関わり合う学習形態の工夫
164	富山市立中央小学校	教 諭	上 嶋 壮 太	自立的に学ぶ子供を育てるために
165		教 諭	堀 芳 聡	自らの「強み」と「弱み」を生かし、主体的に学び合おうとする子供の育成
166		教 諭	入 船 晴 日	一人一人に合わせた学習を支える学習教材の工夫

	学 校 名	職名	氏 名	研 究 課 題
167	富山市立中央小学校	教 諭	高 嶋 春 奈	一人一人が主体的・対話的に取り組む授業の工夫
168		教 諭	徳 永 裕 樹	主体的・対話的探究し、自らのくらしを豊にしていく子供の育成
169		教 諭	西 尾 この実	主体的・対話的に探究し、確かな学びをつくり上げる子供の育成
170		教 諭	岩 林 亜 弥	子供たちが主体的・対話的に学ぶための授業の工夫
171	富山市立柳町小学校	教 諭	中 田 悠 揮	子供が主体的に学ぶための学習指導
172		教 諭	真 島 大 輔	子供たちが願いをもって探究する授業づくり
173		教 諭	前 馬 裕 樹	自分の考えを深めることができる単元構想の充実
174	富山市立奥田小学校	教 諭	荒 城 菊 乃	主体的・対話的に、運動の楽しさや喜びを味わうことができる子供の育成
175		教 諭	平 本 舜	聴き合いによって、よりよく問題解決することの楽しさを味わうことのできる授業を目指して
176		教 諭	湯 澤 莉 世	一人一人が安心して聴き合い、学び合うことができる授業を目指して
177		教 諭	田 辺 拓 実	友達と考えを聴き合い、自己の考えを見直しながらよりよく問題解決する子供の育成
178	富山市立奥田北小学校	教 諭	上 野 右 京	個別最適な学び、主体的・協働的な学びの充実を目指す自由進度学習
179		教 諭	谷 成 望	主体的に取り組む子供の育成
180	富山市立光陽小学校	教 諭	西 島 苑 美	教材・人と関わりながら自分の考えを広めたり深めたりする子供の育成
181		教 諭	荒 城 光	主体的・対話的に学ぶ子供の育成
182		教 諭	木 村 真 樹	自分と友達の成長を実感し、試行錯誤しながら学ぶ子供の育成
183		教 諭	石 尾 誠 一	子供たちが主体的に活動に取り組むための手立て
184		教 諭	池 上 舞 子	言葉を通して仲間と学び合うことを楽しむ子供の姿を目指して
185		教 諭	吉 田 広 輝	自分の願いをもって課題解決に向けて主体的に取り組む子供の育成
186		教 諭	早 苗 桃 子	よりよく生きようとする子供を育てる道徳科の学習
187	射水市立作道小学校	教 諭	千 葉 優	子供たちが意欲的に追及活動を進めるための単元構想や支援の在り方について
188		教 諭	荒 木 美 乃	衣食住等に関する実践的な活動を通して主体的・対話的に学ぶことができる子供の育成
189		教 諭	向 井 遼 平	物語の核心に迫るための工夫
190		教 諭	藺 生 悠 人	理科における「問題づくり」のためのイメージ図の活用
191	射水市立堀岡小学校	教 諭	輪 達 光 司	言語活動を通して、主体的・対話的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成
192	射水市立東明小学校	教 諭	三 谷 和可奈	学び高め合う子供の育成
193		教 諭	竹 村 優 子	友達と話し合うことを楽しむ子供を目指す授業づくり
194		教 諭	原 田 梨 央	互いを認め合うことができる場づくり
195		教 諭	役 川 巧 真	子供が主体的に取り組む算数教材の作成
196		教 諭	桧 物 典	子供が協働的に学ぶ授業づくり
197		教 諭	塩 谷 美 晴	一人一人が主体的に取り組む、考えをもつことができる授業づくり
198	射水市立小杉小学校	教 諭	吉 川 優 生	学ぶ楽しさを味わい、よりよく生きようとする子供の育成
199		教 諭	日 高 茜	「やりたい・確かめたい・身に付けたい」という思いを高める授業づくり
200		教 諭	八 島 志 歩	学ぶ楽しさを味わい、よりよく生きようとする子供の育成
201		教 諭	山 下 櫻	学ぶ楽しさを味わい、よりよく生きようとする子供の育成
202		教 諭	高 井 尚 子	「できた」「分かった」と学ぶ楽しさを味わえる授業づくり
203		教 諭	五十嵐 裕 児	学ぶ楽しさを味わい、よりよく生きようとする子供の育成
204		教 諭	穴 田 玲 奈	学ぶ楽しさを味わい、よりよく生きようとする子供の育成
205		教 諭	黒 田 楓 太	学ぶ楽しさを味わい、よりよく生きようとする子供の育成
206		教 諭	橋 本 歩 実	学ぶ楽しさを味わい、よりよく生きようとする子供の育成
207	射水市立金山小学校	教 諭	大 島 一 也	主体的・対話的に学習に取り組む、学びを楽しむ子供の育成を目指して
208		教 諭	三 島 永 吏	対話的に学び合う子供の育成

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
209	射水市立中太閤山小学校	教 諭	安 田 陽 紀	既習を生かし、問いの解決方法を予想する算数科の授業の創造
210		教 諭	杉 下 琴 音	自分の考えを伝え、学び合う子供の育成
211		教 諭	村 中 ひかり	音楽を心から楽しむ児童の育成
212		教 諭	本 林 風 香	自治的な学級を目指して
213		養護教諭	萩 中 陸 月	「自分で健康な生活を整える」子供の育成を目指して
214		教 諭	八 尾 妃名子	一人一人の個性や能力を最大限に発揮し、進んで物事に挑戦する子供の育成
215	射水市立大門小学校	教 諭	清 雄 大 志	為政者の思いを読み解き、政治の在り方を考える歴史授業
216		教 諭	釣 谷 祐 貴	理科における一人一人の主体的な探究を促すための工夫
217		教 諭	上 田 純 平	主体的な学習を支える個の実態に応じた支援の在り方
218		教 諭	安 養 隼	児童の学び合いを通して、主体的に考えや思いを深めることができる授業の工夫
219		教 諭	菓 子 瑞 季	授業改善「分かりきった道徳」から「問題の本質に迫る道徳」
220		教 諭	北 川 優 莉	児童が集中できる算数科の授業のあり方
221		教 諭	高 見 菜 々	子供の意欲を高める国語科の授業
222		教 諭	四 柳 友 希	自治的な集団育成を目指した教科領域横断的な取組
223		教 諭	鳥 本 佳 那	算数科において児童が筋道を立てて考察し、表現する力を高めるための手立て
224	射水市立大島小学校	教 諭	川 添 彬 乃	子供の興味を引き付ける導入や、学習意欲を高める手立てについて
225		教 諭	岩 坪 夏 穂	互いを大切にし、よりよい人間関係を築こうとする子供の育成
226		教 諭	磯 部 光 志	一人一人を大切に安全・安心な生徒指導
227		教 諭	三 井 萌	分かって楽しい算数の授業にするために
228		教 諭	津 田 泰 希	主体的・対話的に自己の生き方についての考えを深め、よりよい生き方を求めようとする子供の育成
229		教 諭	内 田 璃玖斗	児童が互いに関わり合いながら、考えを広げ、深める授業の工夫
230		教 諭	石 垣 李 菜	課題解決に向けて自分の考えを伝え合う子供の育成
231		教 諭	宗 玄 清 也	ICT機器活用の推進による有効性について
232		教 諭	道 谷 俊 輝	対話を効果的に取り入れた体育科の授業づくり
233		教 諭	塩 谷 麻友子	できる喜びと友達と交流することの楽しさを感じられるための教師の手立て
234		教 諭	土 部 彩 花	自閉症・情緒障害特別支援学級の児童が自分の気持ちを相手に伝えるための手立てについて
235		教 諭	石 田 佳奈子	病弱・身体虚弱特別支援学級における自立活動の実践
236	高岡市立五位小学校	教 諭	立 野 莉 沙	互いのよさや違いを認め、共に学び合う児童の育成
237		教 諭	近 藤 瑛 莉	友達と関わり合って学び、自分の体験と結び付けて感想をもつことができる子供の育成
238		教 諭	矢 坂 美 咲	互いのよさを認め合い、安心して過ごすことができる学級
239		教 諭	中 居 竜 汰	道徳的価値を「自分事」として考えられる道徳授業を行うための効果的な手立て
240		教 諭	石 田 愛 実	自信をもって自分の考えを表現し、学びを深める児童の育成
241		教 諭	杉 高 正 紀	「カラーカード(アナログ)×即時共有機能(デジタル)」道徳科での汎用的な活用方法
242	高岡市立福岡小学校	教 諭	有 島 千 紘	児童が主体的・対話的に関わり、学びを実感できる授業づくり
243		教 諭	新 田 初	学習専用端末を活用し、互いの考えを共有しながら学びを深め合う授業を目指して
244		教 諭	杉 江 真 弥	一人一人が考えをもち、友達と関わり合って学ぶ学級づくり
245		教 諭	窪 田 純 華	課題意識をもち、主体的に学習に取り組むための手立て
246		教 諭	石 井 聖 乃	一人一人が思いや考えをもち、進んで表現しようとする児童の育成
247		教 諭	河 端 亮 太	子供同士の話し合いから、思考を深めていく授業の工夫
248		教 諭	新 谷 歩	分かる楽しさを実感できる授業の在り方について
249		高岡市立木津小学校	教 諭	橋 本 笑 佳
250	教 諭		齊 藤 綾 乃	自分の考えをもち、表現するための授業づくり

	学校名	職名	氏名	研究課題
251	高岡市立木津小学校	教諭	西村千鶴	思いや願いをもって、地域社会に参画する子供を目指して
252	高岡市立成美小学校	教諭	屋敷涼香	考えをもち、伝え合うことを通して、主体的に学習に取り組む子供の育成
253		教諭	書川ともか	互いのよさを認め合い、自分の考えを主体的に表現する子供の育成
254	高岡市立能町小学校	教諭	西島菜恵	学ぶことに意欲をもち、楽しみながら活動する児童の育成
255		教諭	三川知香	友達と関わり合いながら、考えを深め合う学級づくり
256		教諭	牛島美貴	友達と関わり合いながら楽しく学習し、理解を深める児童の育成
257		教諭	盛野萩花	数学的な見方・考え方を働かせ、よりよく問題解決する児童の育成
258		教諭	水谷健志	友達と関わり合いながら互いのよさを認め合い、進んで活動する児童の育成
259		教諭	橋本瑠璃	友達と関わり合いながら、主体的に活動する児童の育成
260		教諭	千重智生	理科の学習において主体的・対話的に探究する子供の育成
261		高岡市立二塚小学校	教諭	山口三耶子
262	教諭		水谷晶	互いのよさを認め合い、共に高め合おうとする学級づくり
263	高岡市立野村小学校	教諭	櫻井悠香子	自分自身を見つめ、自己調整しながら問題を解決していくことができる児童の育成
264		教諭	柿畑美友	課題意識をもち、自己調整しながら学習をする子供の育成
265		教諭	村藤早紀	「分かる」「できる」を実感し、主体的に学習に取り組む子供の育成
266		教諭	向井幹城	子供が課題意識をもち、自己調整しながら学習を進めることができる支援の在り方
267		教諭	大村麗奈	課題意識をもち、友達と関わり合いながら学ぶ楽しさを味わえる授業づくり
268		教諭	宮崎完司	児童が自分のよさに気づき、友達のよさを受け入れることができる支援の在り方
269		教諭	市村夏菜江	自信をもってコミュニケーションを楽しむ子供の育成を目指して
270		教諭	高橋大吾	理科の見方・考え方を働かせながら、主体的に問題を解決しようとする子供の育成
271		教諭	大居一真	学ぶことの楽しさや自らの成長を感じることができる支援の在り方
272		教諭	浮橋萌々	自分の学びを実感し、楽しく学ぶ子供の育成を目指して
273		教諭	岸田美玲	学び合い・主体的に学習する子供の育成を目指して
274	高岡市立古府小学校	教諭	笠原有真	互いのよさや違いを認め、共に楽しんで学ぶ児童の育成
275		教諭	細川百花	楽しみながら思いを表現するためのICTを活用した授業づくり
276		教諭	中山ふづき	低学年から取り組む、児童同士が楽しんで学び合えるICTの活用
277	高岡市立牧野小学校	教諭	橋本悠平	子供の学ぶ意欲が高まる導入の工夫
278		教諭	桶隆太郎	算数科におけるICTを活用した協働的な学びの在り方
279		教諭	境優衣	音の重なりから考える児童の創造性の育成
280		教諭	中川拓	思いや考えを表現し安心して活動に取り組むことのできる学級を目指して
281		教諭	宮下集夢	児童が楽しく学べる居場所づくりを目指して
282		教諭	永原元	自分たちでつくるルールから学ぶ自律性と社会性の育成
283		教諭	廣田真由	苦手な食べ物にもチャレンジできるようなバランスのよい食事のとり方の指導について
284		教諭	高木成美	音楽的な見方・考え方を働かせる授業づくり
285	高岡市立太田小学校	教諭	田所佳純	外国語に親しみ、進んでコミュニケーションを図る子供の育成
286	高岡市立南条小学校	教諭	福尾尚久	友達と関わり合いながら、学ぶ楽しさや達成感を味わう児童の育成
287		教諭	沖野実夏	児童が主体的に学習に取り組めるような支援の在り方
288	高岡市立南条小学校	教諭	槻尾里夏	友達と関わり合いながら、主体的に活動する児童の育成
289		教諭	富樫翔己	互いを認め合ったり、よさを見付けたりできるような学級経営
290		教諭	大谷千佳子	互いを認め合う学級経営
291	高岡市立戸出東部小学校	教諭	中谷実郁	仲間と関わり、互いの読みのよさを実感しようとする児童の育成
292	小矢部市立石動小学校	教諭	三輪憲正	理科において考えを自信をもって表現できるようにするための支援について

	学 校 名	職名	氏 名	研 究 課 題
293	小矢部市立石動小学校	教 諭	野 村 拓 未	主体的・対話的に探究し、学びを深める子供の育成
294		教 諭	宮 田 陽 菜	「分かった」「できた」を実感できる授業を目指して
295		教 諭	別 所 遼 香	音楽的な見方・考え方を働かせ、音楽と豊かに関わろうとする子供の育成
296		教 諭	中 島 奏 汰	個の学びを深めることができる授業を目指して
297	小矢部市立大谷小学校	教 諭	堀 陽菜乃	友達と協働して、主体的に学びを進める子供の育成
298		教 諭	佐々木 友 那	児童が主体となる授業づくりの工夫
299		教 諭	松 永 深 月	生活科において主体的に学ぶ子供の育成
300		教 諭	浦 下 楓	認め合い、エンパワーし合う関係づくりを目指した実践
301	小矢部市立東部小学校	教 諭	牧 野 圭 佑	身近に感じ、切実感をもって学習できる教材選定の工夫について
302		教 諭	安 田 彩 香	自己調整しながら主体的に学ぶ子供の育成
303	小矢部市立津沢小学校	教 諭	吉 田 つかさ	子供が主体的・対話的に学び、「わかる」「できる」を実感する授業づくり
304		教 諭	竹 島 萌 江	1人1台端末を活用した学習者主体の授業づくり
305		教 諭	山 本 泰 斗	主体的に地域に関わりを求め、地域の一員としての自己有用感を高めるための工夫
306	砺波市立砺波東部小学校	教 諭	中 町 淑 乃	自立した学習者を育てる授業づくり
307		教 諭	幡 谷 拓 泉	自立した学習者を育てる授業づくり
308		教 諭	五十嵐 千 乃	自立した学習者を育てる授業づくりを目指して
309		教 諭	前 川 玲 奈	気持ちの変化に着目して読み、関わり合いながら学ぶ子供の育成
310		教 諭	犀 川 真 衣	子供がつながりを感じ、自己有用感を味わえる授業づくり
311		教 諭	槻 尾 瑞 希	自立した学習者を育てる授業づくり
312		教 諭	荒 見 真 唯	自立した学習者を育てる授業づくり
313		教 諭	明 神 千 夏	自立した学習者を育てる授業づくり
314		教 諭	永 井 光 貴	自立した学習者を育てるための教師の役割
315		教 諭	山 下 香菜子	自立した学習者を育てるための授業づくりと教師の役割
316	砺波市立砺波南部小学校	教 諭	棚 田 朱 音	自立した学習者の育成を目指して
317	砺波市立庄川小学校	教 諭	中 島 桃 子	学習者用デジタル教科書を活用しながら学びを深める子供の育成
318		教 諭	関 原 真 理	主体的に取り組み、学びを深めていくことができる子供の育成
319	南砺市立城端小学校	教 諭	尾 田 一 翔	子供の課題を解決するための、場の設定と補助教材の工夫
320		教 諭	荒 井 優 芽	子供が聞き合う意欲を高めるための手立て
321		教 諭	天 池 杏 璃	友達の考えを聞くことへの意欲を高める授業づくり
322		臨任講師	長 谷 朋 世	子供が見通しをもち主体的に学習に取り組むための授業づくり
323	南砺市立井波小学校	教 諭	山 本 南 穂	子供が学びを実感するための手立てについて
324		教 諭	中 島 昇 平	子供が自律的に学びを進めるための授業の工夫
325	南砺市立福野小学校	養護教諭	石 田 里 奈	養護教諭の立場を生かした、自発的・自治的な児童保健委員会を目指して
326		教 諭	砂土居 裕 貴	主体的・対話的に言語活動に取り組み、考えを深める児童の育成
327		教 諭	津 田 哲 志	子供が進んで取り組む授業の工夫
328		教 諭	小 川 美 紀	主体的・対話的に物語文の学習に取り組み、考えを深めていく子供の育成
329		教 諭	宮 崎 立	「問題発見・解決能力」を育むための「学習問題」「学習計画」作成の手立てについて
330		教 諭	倉 田 路 紗	子供が主体的に学習に取り組み、課題解決を図りながら協働的に取り組む授業の実践を目指して
331		教 諭	浦 竹 芽 生	子供が主体的に学びを獲得し、生活に活用できる力を育む授業の工夫
332		教 諭	須 藤 那 月	児童の「分かる」を大切に、共に学び合う授業づくり
333	南砺市立福光中部小学校	教 諭	本 多 翔	仲間と共に主体的に学び合う子供の育成
334		教 諭	石 塚 千 里	一人一人が主体的に書く活動に取り組むための手立て

	学 校 名	職名	氏 名	研 究 課 題
335	南砺市立福光中部小学校	教 諭	河 合 郁 音	感覚を働かせ、素材の形や色等と豊かに関わる児童を育てるための図画工作科の指導
336		教 諭	中 村 優 太	仲間の思いを共感的に受け止める子供の構えの育成
337		教 諭	上 田 妃香莉	子供が主体的に楽しく学ぶことができる国語科の指導の工夫
338	南砺市立福光南部小学校	教 諭	鈴 木 駿太郎	子供たちが関わり合いながら学ぶ学級を目指して
339		教 諭	森 口 堇 礼	物語の場面の様子を想像したり、表現の効果を考えたりしながら作者の思いを読み取ることができる授業の工夫
340		教 諭	吉 川 聖 人	子供の学ぶ意欲を高める導入の工夫
341	南砺市立福光東部小学校	教 諭	水 口 恵美子	造形的な見方・考え方を働かせ、つくりだす喜びを味わう子供の育成
342		養護教諭	栗 原 愛	実践的な活動を通して、健康な生活を送るための保健指導の工夫
343		教 諭	富 居 俊 平	造形的な見方・考え方を働かせ、つくりだす喜びを味わう子供の育成
344		教 諭	北 川 千 佳	相手の気持ちを考えて言葉を使い、上手にコミュニケーションをとるための手立てや声かけの工夫
345	朝日町立朝日中学校	教 諭	太 田 幹 人	学んだことや考えを自分の言葉で表現しようとする生徒の育成
346		教 諭	岩 田 寿 浩	生成AI等のICTを活用して課題を追求することを目指す指導の工夫
347		教 諭	小 坂 健 太	国語で正確に理解し、適切に表現する生徒を育てるための言語活動の工夫
348		教 諭	岡 崎 翔太郎	社会的な見方・考え方を働かせ、生徒が主体的に課題に取り組むことができる学習指導の工夫
349		教 諭	舟 本 祐	生徒の特性や能力に応じた学習活動の工夫
350		教 諭	中 山 舞 祐	論理的に考察し表現しようとする生徒を育てる課題設定や学習活動の工夫
351	入善町立入善中学校	教 諭	荒 川 保 香	音楽科における生徒の課題意識を高める授業の在り方
352		教 諭	佐 藤 直 也	実験・観察データを多様な形で表し、結果を処理する力を身に付けるための指導の工夫
353		教 諭	池 原 沙 織	英語科におけるパフォーマンステストの指導と評価の工夫
354		教 諭	西 川 ゆりの	共生の視点に基づく授業づくり
355	入善町立入善西中学校	教 諭	大 和 跳治郎	生徒の主体性を育む授業の工夫
356		教 諭	魚 谷 光	生徒自らが見通しをもち、検証できる仮説を設定しながら観察・実験を計画し、課題を探究することを目指す指導の工夫
357	滑川市立滑川中学校	教 諭	岩 田 梨 琴	ICTを活用した合唱の授業研究
358		教 諭	関 口 巡	班での「話し合い活動」が課題解決につながる実技指導の工夫
359		教 諭	中 村 彩 乃	美術科におけるグループワークの在り方
360		教 諭	高 田 亜 美	ICTを活用した生活との結びつきを強める学習活動の工夫
361	滑川市立早月中学校	教 諭	海 見 陽	ICT機器を活用したグループワークの在り方
362		教 諭	酒 井 遼 太	保健体育科におけるICTを活用した「個別最適化学習」の実践
363		教 諭	松 崎 遥 南	生徒の英語学習における動機付けを高めるにはどうすればよいか
364	富山市立芝園中学校	教 諭	佐々木 杏 子	ICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」がある授業づくり
365	富山市立堀川中学校	教 諭	庄 司 拓 未	バックワードデザインを意識した効果的な単元構想と授業実践
366		教 諭	畑 華 純	「主体的・対話的で深い学び」につなげる授業展開の工夫
367		教 諭	伊 東 詩 織	「主体的に学習に取り組む態度」を育成する授業づくり
368		教 諭	小 泉 茜	ICTを効果的に活用する美術科の授業とは
369	富山市立東部中学校	教 諭	畠 山 章 吾	教科指導におけるグループ活動の向上
370		教 諭	寫 田 有 里	自己決定の場がある授業を通じた主体的に学ぶ生徒の育成
371		教 諭	絹 野 凜	1人1台端末を活用した個別最適な学び
372		教 諭	溝 口 哲 夫	教材についての関心を高める効果的な授業導入はどうあればよいか
373	富山市立南部中学校	教 諭	花 田 吉 平	理科における生徒が実験の結果から考察をしやすい授業づくり
374		教 諭	細 川 慎 悟	社会科の授業において生徒が積極的に「学び合う」ための授業の工夫
375		教 諭	河 原 麻里奈	英語科における生徒が主体的にスピーキング活動に取り組むための指導の工夫
376		教 諭	山 上 博	全員攻撃・全員守備でチーム力の追求 学び合う生徒の育成

	学 校 名	職名	氏 名	研 究 課 題
377	富山市立南部中学校	教 諭	堀 田 真 志	理科におけるダニエル電池の理解を深める効果的な授業
378		教 諭	大 川 皓 資	理科におけるICT機器を用いた生徒が互いに教え合うための授業の工夫
379		教 諭	中 野 沙 耶	家庭科における生活に生かすための問題解決的な授業の在り方
380		教 諭	安 田 汐 里	音楽科における音楽表現を身に付けるための常時活動の在り方
381		教 諭	山 下 大 輔	社会科における生徒自らが手を動かすペーパークラフト教材の活用
382	富山市立北部中学校	教 諭	中 村 公 輔	生徒が主体的・能動的に学習に取り組める学習方法の工夫
383	富山市立岩瀬中学校	教 諭	綱 頭 京 雅	新聞を用いた書くことの学習
384	富山市立山室中学校	教 諭	岸 本 光	教科指導における学び合い活動の活用効果とその検証
385		教 諭	池 田 若 奈	生徒が「できる」ことを実感し、意欲的に取り組む家庭科の授業づくり
386		教 諭	岩 坪 卓	生徒の思考力・判断力を育てる社会科授業
387		教 諭	山 崎 模 菜	化学変化における質量変化を粒子モデルを活用して理解を深める授業実践
388		教 諭	江 良 友 佑	言語活動の実践を通して積極的に語彙を増やそうとする態度を育てる学習指導の工夫
389		教 諭	穴 戸 勝 哉	運動が苦手な生徒も得意な生徒も、意欲的に取り組む授業づくり
390		教 諭	埜 田 明日香	生徒自ら知りたい・確かめたいと思う理科の授業づくり
391		教 諭	尾 松 拓 哉	生徒自身で課題を発見し、解決に向けて主体的に取り組む授業づくり
392		教 諭	中 村 有 希	一人一台端末の振り返り活動への活用
393		富山市立月岡中学校	教 諭	栗 野 真 子
394	教 諭		山 本 愛	主体的に対話を行う活動を取り入れた音楽科の授業改善
395	教 諭		岡 部 哲 典	スモールステップの活動とICTの活用を取り入れることで生徒の技能・学習意欲の向上を目指す体育授業
396	富山市立呉羽中学校	教 諭	鬼 頭 克 典	数学の「よい授業を目指して」
397		教 諭	米 林 侑 香	数学への苦手意識を克服・改善するための学習活動・授業内外の工夫
398	富山市立水橋中学校	教 諭	柴 崎 あずみ	「思考力・判断力・表現力」を高める言語活動の工夫
399		教 諭	萩 原 弘 朗	1人1台端末の活用による効果的な支援と生徒の主体性を高める振り返りを目指して
400	富山市立藤ノ木中学校	教 諭	戸 島 健 太	生徒が主体的に学習に取り組む社会科の授業づくり
401		教 諭	越 前 匠 真	対話的な活動を通して課題解決を目指す保健体育授業
402		教 諭	高 倉 笙 子	生徒の主体性を高める国語科の授業づくり
403		教 諭	中 川 大 輔	体育授業で生徒が技能を身に付けるための手立て
404		教 諭	井 沢 健 佑	生徒の興味・関心をひく実用性のある学習課題の設定について
405	富山市立上滝中学校	教 諭	原 朋 子	生徒一人一人に応じた授業づくりのためのICTの活用
406		教 諭	竹 脇 みちる	指導と評価の一体化を目指した授業づくり
407		教 諭	長谷川 凜太郎	中学校社会科地理的分野におけるICTを用いた自由進度学習の実践
408		教 諭	越 坂 亜 美	生徒一人一人の学びを指導に生かす、評価におけるICT活用
409		教 諭	池 原 久瑠美	ICTを効果的に使うには
410		教 諭	小 坂 夏 生	体育の授業での継続的な持久力向上の運動の取り組みから、持久力向上を目指す
411		富山市立速星中学校	教 諭	内 井 愛 梨
412	教 諭		中 禮 佑 太	栽培分野における、生徒の自己決定能力を育む工夫
413	教 諭		白 澤 菜々子	知覚・感受と音楽の構造を結び付ける授業づくり
414	教 諭		小布施 未 春	物事を多面的・多角的に考え、互いに幸せな集団をつくらうとする道徳実践意欲と態度を育てる授業の工夫
415	教 諭		野 村 祐 太	自己の目標を達成できる喜びを感じられる授業の仕掛け
416	教 諭		宮 井 杏 理	「信じあう心」を高める生徒会活動の工夫
417	教 諭		宮 森 一 真	生徒の話合い活動を促す手立てとしてのICT機器の活用の工夫
418	教 諭		太 田 星 羅	数量の関係を表や式で整理して考える習慣を身に付けさせるための授業の工夫

	学校名	職名	氏名	研究課題
419	富山市立城山中学校	教諭	岡田 一 鷹	一人1台端末を活用した問題解決的な学習の実践
420	富山市立八尾中学校	教諭	堀田 美 玖	ICT端末を活用したレポート作成の考察
421		教諭	城田 真 歩	探究的な家庭科の授業にするための工夫
422		教諭	松尾 湧 斗	小・中学校の接続を意識した外国語指導の在り方
423		教諭	小野 真 実	生徒の学習意欲を高めるための問題解決学習(PBL)を取り入れた授業展開の工夫
424	射水市立新湊中学校	教諭	反田 雄 翔	生徒自らが見通しをもち、検証できる仮説を設定しながら観察・実験を計画し、課題を探究することを目指す指導の工夫
425	射水市立小杉南中学校	教諭	佐藤 慶 治	生徒の作文能力向上に向けた取組と成果
426	射水市立大門中学校	教諭	柚田 銀史朗	温かな人間関係を基盤とした、学び高め合う集団作り
427		教諭	梶川 まるみ	社会科において生徒の意欲を生み出す導入の工夫
428		教諭	杉本 聖 真	授業における「問題発見・解決型学習」の実践
429		教諭	宮袋 友 伽	「問題発見・解決型学習」の実践
430	高岡市立志貴野中学校	教諭	安川 知 里	音や音楽を聴く意欲を高めるための授業展開の工夫
431		教諭	高嶋 宏 樹	理科における生徒の学習内容の理解を深めるための授業の工夫
432		教諭	舟崎 美 郷	「主体的に学習に取り組む態度」を養い、適切に評価するための授業改善
433		教諭	島田 萌 菜	主体的・協働的に学習し自ら考えを深めることができる生徒の育成
434		教諭	金田 侑 子	対象年齢に合わせた幼児の特徴を捉え、発達を促す絵本作りを目指すためのデジタル絵本の活用
435		教諭	土野 祐 揮	歴史的分野における協働的な学びを実現するための指導の工夫
436		教諭	山本 希 望	互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動を重視した教科書活用の工夫
437		教諭	上村 光 優	マット運動における技能の習得における効果的な指導方法について
438	教諭	前山 明 信	リレー競技において、運動が苦手な生徒が楽しく技能を習得することができるようにするための指導の工夫	
439	氷見市立北部中学校	教諭	坂口 拓 真	生徒が見通しをもって、科学的に思考できる授業の工夫
440		教諭	木津 航 汰	主体的・対話的な学習を通して他者と学び合い、理解を深めることができる生徒の育成
441		教諭	田中美 優	板書の工夫による分かりやすい授業作り
442		教諭	石川 智 大	問題解決型学習を取り入れた中学校数学科の授業実践とその振り返り
443		教諭	祖父江 宇天奈	課題を解決するための実験方法を論理的に考える授業の工夫
444		教諭	高柳 直 之	主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり
445		教諭	小川 早恵花	運動の楽しさを感じる授業の工夫
446		教諭	牧 桃 胡	基礎・基本の定着とコミュニケーション能力や表現力の向上
447	砺波市立出町中学校	教諭	大西 将 也	生徒の自己調整を促す教師の働きかけ
448		教諭	山本章 太	「楽しくて分かりやすい」社会科の授業づくり
449		教諭	堀田 依 里	関わり合い、考えを深める授業づくり
450		教諭	山本 拓 海	生徒の自己調整を促す教師の働きかけ
451		教諭	林 智 奈	合理的な解決に向けた学習過程を通して、豊かなスポーツライフの実現を目指す生徒を育てるための学習指導はどうあればよいか
452		教諭	宮本 一 輝	特別の教科道徳における生徒の自己調整を促す教師の働きかけ
453		教諭	柳田 萌 花	国語科における生徒の自己調整を促す教師の働きかけ
454		教諭	福山 浩 子	国語科における「書く力をつけさせること」と「ICTの活用」の両立を考える
455		教諭	長田 楓 真	生徒の主体性に沿った課題設定と授業展開の工夫について
456		教諭	菅野 ひかる	家庭科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実
457	砺波市立般若中学校	教諭	小池 裕 太	自立した学習者を育てるための授業づくり
458		教諭	川越 玖瑠実	自立した学習者を育てるための授業づくり
459	砺波市立庄川中学校	教諭	清雄 風 香	学び合いを通して、主体的に学習に取り組む生徒の育成
460		教諭	酒井 多嘉也	主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
461	砺波市立庄川中学校	教 諭	寺 松 優	粘り強く取り組む生徒を育成するには
462		教 諭	東 美 紀	「自立した学習者」の育成を目指す授業づくり
463	高岡市立国吉義務教育学校	教 諭	四 日 優 紀	子供が主体的・対話的に言語活動に取り組むための手立て
464		教 諭	老 田 稜 平	学級の課題を自分事として考える指導の工夫
465		教 諭	南 菜 摘	主体的・対話的に言語活動に取り組み、考えを深めていく子供の育成
466		教 諭	尾 田 勇 哉	図画工作における製作したいものをイメージするための工夫
467		教 諭	川 島 健 志	他者と協働し自分に合った家庭での学習方法を考える特別活動の授業づくり
468	南砺市立南砺つばき学舎	教 諭	沼 田 涼 平	数理的な事象に興味をもち、自ら考え、共に学び合う子供の育成
469		教 諭	坂 井 月 花	理科におけるねらいとする資質・能力を育成するための「対話」の手立て
470		教 諭	梅 原 恵 太	体育科における課題意識をもって活動に取り組むための手立て
471		教 諭	羽 馬 裕 野	保健体育科教育における協働的な学びを促進するための手立てについて
472	富山県立新湊高等学校	教 諭	大 井 裕 介	採点支援システムを用いた指導と採点業務の効率化
473	富山県立福岡高等学校	教 諭	荒 井 琢 巳	スタンプラリーを通じた意欲関心を高める指導
474	高 朋 高 等 学 校	教 諭	渡 邊 慎	学級経営を通じて、一人一人のパーソナリティ形成
475		教 諭	大 道 輝 緒	ポジティブになるための考え方、声のかけ方
476	富山県立富山聴覚総合支援学校	教 諭	小 田 森 平	言葉の意味を理解して身に付けるための支援について
477		教 諭	上 田 美 和	生徒が自己理解を深め、主体的に学ぶための支援の在り方
478	富山県立しらとり支援学校	教 諭	土 井 麻 央	個別最適な学びを目指した音楽科授業づくりの工夫
479	富山県立となみ総合支援学校	教 諭	永 井 桐 雅	数学『データの活用』で切り拓く新たな挑戦
480	富山県立富山総合支援学校	教 諭	井 川 真 希	主体的に学習するための教材教具の工夫
481		教 諭	田 中 真依華	生徒が見通しをもって学習活動に取り組むための授業の工夫について
482		教 諭	中 野 紗由里	関係機関との連携を通して、主体的な動きを引き出す体幹装具の製作と活用
483		教 諭	日 尾 悠 人	生徒の実態に合った自立活動の指導
484		教 諭	中 村 相	主体的・対話的で深い学びの実現を目指した数学の授業の工夫

令和6年度
実践報告集

編集・発行 令和7年3月21日発行

公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部
〒939-8084 富山市西中野町1-1-18
オフィス西中野内
TEL 076-464-3703 FAX 076-464-9818

印刷 とうざわ印刷工芸株式会社
